

289-T093-97



1200500732569

200



始



49F6

289  
T0.53  
9

# 太閤秀吉

封正剛著

289  
76.93  
9

義講史外本日

# 吉秀閣太

著剛正野中



## 序

振東塾は東方會に所屬して、その同志青年を鍊成するところである。入塾の資格審査はない。大學生でもよければ、職工でもよし、農村の指導者でもよければ、所謂水呑百姓でもよい。間違つて當路の大官や、會社の重役や、知名の學者がおいでになつても、一寸も顔負けしない矜持を持つて居る。そこには教師と同志とが一緒になつて、知らざるを知らずとしながら、自ら鍊成するの意氣に燃えて居るのである。

各方面の専門家や、大家の講演も仰いだが、自分も責任上講義することになつた。中野が講義をするので政治演説に亘りはせぬかといふその筋の御苦心もあつたやうであり、絶えず數名の當局者が出席して居られた。しかし、自分は全體、自分の久しき體驗によつて、所謂政治といふものは嫌ひである。日本國の一大危機、而して一大展開期にあたり、何かお役に立ち得るなら格別のこと、所謂政治を試みても今日の世において五十歩、百歩の争ひをなすに止まらない。それは

自分が頭で判断するのみならず、體で知り抜いて居るのである。しかし時勢に貢献してお役に立ちたいといふ赤誠は燃焼し、白熱して寸時も止むことがない。そこで爲政者が聴いても、役人が聴いても、乃至田夫野人が聴いても、普偏妥當的にその人の涵養に役立たせたいといふ氣持で講義したのである。畢竟、其日其日の出來事に眼をふらず、人世の地下水を涵養したのである。

統制經濟の理念だとか、イデオロギーだとか、たかく日本では二、三十年間流行して居る術語を列べ、その術語に拘束せられて國策を論じ、その國策の基礎たる人生を律するなどは、その資格試験の合格を目指す人達の仕事である。それは聊かも日本の興亡に關係あるものでない。俯仰數千歳、人類社會興亡の跡を見て、自ら見識をたて、自ら今日に處する道を講ずるのが、無學なる自分として、振東塾青年諸君に對して講ずる學問ではあるまいか。

自分に今少しく學問があり、塾生の方に今少しく外國語の素養があれば、自分はカーライルのフレンチ・レギュレーションとか、フリードリツヒ大王のわが時代の歴史とかを講義したいのである。もう少し漢字だけでも解る人々が揃ふなら、靖獻遺言でも、史記でも一緒に讀んで見たいのである。それでは歐米の書物であり、支那の書物でないか。日本精神と縁遠いではない

かと横槍をいれる人もあるかも知れんが、日本精神を鍛錬し、日本精神の焰を擧げやうとするなら、これを世界の熱火と烈風との中に投りこんでみなければならぬ。

ドイツは三百萬の人口しか有しなかつたプロシアから興つて、大陸の覇者に一泡ふかせ、今日の強大を來すに至つたのは、そのよつて來るところがあるのである。其の苦心をフリードリツヒ大王に聴くのは、同盟國を知る爲にも、日本の爲にも有意義である。國家は營利會社でなく、營利工場でない以上、その精密機械や重要産業の背後に、一つの大きな精神が無くてはならぬ。其の大精神に接することは、日本精神の焰を燭發せしむる所以である。

イギリスはスペイン、ポルトガル、オランダ、フランスに立ち遅れて世界に乗り出したが、次にこれ等の競争者を打ち倒し、數百年世界に覇を唱へたのは殘念ながら嚴肅なる事實である。それは所謂自由主義だとか商人根性だとかの所産ではない。朴訥剛毅にして雄圖大略をかぬる大きな精神がその後控へてゐるからである。自分は直接ドイツ語によりてドイツの名著を味讀して見たい。シエクスピアでも、カーライルでも讀みづらいが、これ等の筆者が、その精魂をペンの先から血汐の如くにじみ出させた跡を辿り、仲介者や、翻譯者を俟たずして、そのまゝ我が心

と觸れさせたいのである。さうすることは日本精神を輔に掛け、鐵槌の鍛鍊を加へることであつて、決して歐米依存に流るゝ所以でない。支那の歴史である十八史略でも、單なる記録の羅列ではない。そこに人生が反省せられ、興亡の跡が検討せられ、正邪の道が批判せられ、滿篇悉く智識と見識との華を咲かせたものである。

日本は今や大東亞において英米と角逐せねばならぬ。支那においては漢民族と融和せねばならぬ。そこに進出し、そこに根據を占めたる諸民族の中の高貴なる魂に觸れることは、大和魂の最も高貴なる可能性を抽出して、世界的にその光焰を輝かしむる所以である。自分は六韜三略や孫子の兵法が、戰時政治哲學として最も示唆に富むが故にこれを講義したこともある。その講義は自分の力が足りないのと、聽く方の準備が足りないのとで、深とたる興味を催すやうではあるが、一向抄が行かない。そこで日本外史を取り出し、頼山陽の筆跡を尋ねて、あの文豪英雄兒たる山陽と共に、日本歴史をたづねて見ることにした。はじめ南北朝時代を講義し、楠氏、新田氏を講じて、大いに士氣を猛烈にしたが、更に進んで豊臣氏を講ずるに至つた。

日本外史に就きて豊臣氏を全部講ずるといふことになるのかなり大部なものになり、一週間や、

二週間の鍊成では終了することは出来ぬ。そこで豊臣氏を通讀して興味ある部分を拾ひ出だし、或は「藤吉出仕」とか、「賤岳七槍」とか、朝鮮征伐の「碧蹄館」とか、「蔚山籠城」とか、さては豊臣家の末路に及びて「託孤寄命」とか、「幸村戦死」とかいふやうな風に勝手に項目を設け、勝手に見出しをつけて講義したのである。さうすると、これは面白いといふので、塾生の方の計畫で速記にとり出した。勝手に講義に速記などが取れるものかと云ひながら、講釋してゐるうちに、矢張り速記にとられて居るなアといふ感じが頭の中にあるので、だん／＼末尾に近づくに従つて速記されても差しつかへのないやうに秩序だつて来るやうな感じがした。これなら最初から速記に適したやうに講義すればよかつたと思ふたのであるが、もう今からでは間に合はぬといふことになり、その儘無統制なりに結尾に及んだ次第である。

秀吉が聚落の第を營みて、聖上の御臨幸を仰ぎ、自ら文武百官を率ゐて扈從し奉り、諸侯をして皇室の尊きを知らしめ、皇恩を奉戴し、力を國事に致すを誓はしめし光景の如きは見落すべきではなかつた。そこに匹夫より起つた秀吉が、かねて織田信長から勤皇の大義を説き聽かされ、田夫野人の素朴なる氣持を以つて、皇室の重恩に感泣せる氣持など寫し得て最も妙なるものがあ

る。また朝鮮征伐の場面において加藤清正の蔚山籠城、小早川隆景の碧蹄館の一戦等と共に、外征の勳功第一として表彰されし島津義弘の新塞における殲滅戦を見落したのは何としても疎忽であつた。これ等の數項目を附加へて居たならば太閤及び太閤時代の全貌を今少し明白にすることが出来たのではなかつたらうかと思はれんでもない。

秀吉は最初織田信長に奉仕し、そのために天下統一を目指して東奔西走し、その天下を統一するや、日本國の權威を最大限に高調して朝鮮征伐に乗り出だし、つねにその目的のため驅使せられて、殆んど一家の計をなすに遑がなかつた。秀吉は天下統一、國威發揚のため心身を傾倒し、その餘力がなかつたのである。其隙を覗いて守成的の英雄徳川家康が着々、徳川氏の覇業のために、諸將及び國民の統制に着手して居つたから叶はない。秀吉と家康とは分業で仕事に従事したやうなものであり、秀吉は天下の目的のために心身を消耗し、家康は自己の守成のために三河武士を中心とする全體主義組織を準備して居つたのである。秀吉が雄圖大略の最高峰に蹺れた時、家康の覇業は既に完成して居つたのである。

頼山陽は豊臣氏を敘し、最後の史論において秀吉を秦の始皇及び漢の武帝に比較して居る。彼

は大膽に所信を述べ、秦の始皇は父祖六代の積威を挿んで衰弱せる六國を倒したのであり、漢の武帝は豊富なる物的及び人的資源を擁して天下を統一したのであつて、その英雄たる腕前を發揮した點では、秀吉が徒手空拳より興りて天下を平定し、外征の師を起したのと比較すべくもないと稱して居る。秦の始皇の天下を覆したものは、漢の高祖（武帝）と楚の項羽とであるが、楚の項羽は燕國の名門に生れ、貴族的將軍であり、二十代にして大業を成すだけの礎地の上に立つて居つた。これに對し漢の高祖はいろ／＼系圖を飾つてみても、江蘇省の沛縣の農民の子で、貧困に成長し、項羽に較べると大分ハンデキャップをつけられて居る。彼がはじめて兵を擧げたのは既に三十九歳の時であつた。それだけ高祖は専門の軍人でないので、項羽に比すれば戦争そのものは下手である。項羽は家柄からして名將であり、齡も若いし、戦争も巧者で、武勇も勝れて居る。そこで高祖の方では人材を幕下に集め、隨分油斷のならない男ではあるが、韓信の如き天才的名將を使はねば一遍でも項羽に勝つことは出来なかつた。高祖の左右には、陳平の如き、張良の如き、蕭何の如き、韓信の如き謀臣名將が揃つて居り、しかも譜代の臣といふのではなく、人材を拔擢し、人材を動員し、その能力を最高度に發揮せしめし所に、彼の政治的手腕がある。彼

は支那流に氣取つて云へば、王者の資格を備へて居たとも云へる。項羽は自ら勇を恃み、見識を恃み、年七十にして奇計を好むと稱せられし范增すら用ゆる能はず、勇戦健闘しながら、勢日に蹙まりて、天下を高祖に委ねばならなかつた。

頼山陽が秀吉を以つて漢の高祖に比較せしは、秀吉が外交をも、戦争をも、經濟をもひつくるめたる大なる政治家的風貌ある點を捉へたのであつて、この點甚だ當れりと謂はねばならぬ。彼も譜代の家來がなかつたので鍛冶屋の息子とか、桶屋の息子とか、賣藥商人とか、寺の小僧とかを見出して子飼ひとなし、自分で學問がなかつたので、竹中半兵衛をして、これら年少子弟の教育に當らしめた。その子飼ひのものが加藤清正であり、福島正則であり、小西行長であり、石田三成である。そこで年少ばかりを従へて天下を根本的に平定せんとするには、日暮れて道遠しの感を免れぬ。そこで伊達とか、毛利とか、島津とかを荒ごなしをして自己に服従せしめ、韓信よりは更に豊臣氏の社稷にとつて危険千萬なる徳川家康をも丸呑みにして、そのまま征韓の師を起すに至つたのである。その點は漢の高祖より、楚の項羽より大膽不敵にして、その心事に至りては酒と磊々たるものがある。楚の項羽は關中に攻め入り、秦朝の咸陽宮を焼き拂つて猛火三月

に亘りて滅せずといふ亂暴を働いた。併し政治眼なき彼はそれでもつて安心したのか、あつさり引きあげて山東に歸らんとした。楚の謀臣が天下の要衝を人手に渡して引き揚げることは、天下の鍵を手放すやうなものだと諫めた時、彼は「富貴にして故郷に還らざるは、錦を着て旅行くが如し」と答へた。それではまるで沐猴にして冠するものでないかと彌次らると、彌次つた奴を煮殺して故郷に歸つた。漢の高祖も北方の蠻族を征伐し、意氣揚々として凱旋するや、大風起つて雲飛揚す、威は海内に加つて、故郷に歸る。と吟じ大に氣を吐いたが、結尾の一句には何處にか猛士を得て四方を守らんと稱し、妙に守成的弱味を示してゐる。錦を着て故郷に歸るとか、猛士を得て四方を守るとかいふのは高祖や項羽に共通の感情である。その感情に支配せられて項羽は天下を失ひ、その守成の策を全からしめんがため、漢の高祖は天下を平定した翌日から惡辣殘虐なる謀略を自己の謀臣名將の上に加へて、片端からこれを仕末した。

秀吉はいさゝか沐猴にして冠する趣きがないではないが、錦を着て故郷に歸つたり、猛士を得て四方を守るなどいふ守成的弱みに拘束されず、最後まで積極進取であつた點は、日本人らしくして心氣頗る爽快ではないか。漢の高祖のやうに一家の計をなすに汲々たるものならば、天下を



統一したる翌日から徳川家康を仕末する工夫などに没頭し、朝鮮征伐はしなかつたかもしれない。然るに秀吉は理想の着弾距離の方が、壽命よりも長かつたのである。奉公の志の方が、一家の計よりは旺盛であつたのである。進んでくゝ止まるところを知らず、漢の高祖の如くいやらしい謀略を人生の上に試みずして斃れたのは面白いではないか。日本のために人材を動員し、蒼生の爲に泰平を拓き、國體を明徴にし、皇威を宣揚して、外征の中途に斃れたのは、日本の英雄として國體にも相應しいと云へるでないか。

自分は日本外史を讀みて、秀吉をそのままに語り、妙な處世訓とか邪念とかをそこに交へて居ない。長所も短所も強みも弱みも備へたる日本人秀吉をそのまま描き出して、諸生と共に各自の心境を開拓せんとするものである。

昭和十八年二月

中野正剛

## 目次

序	一
振東塾	一
頼山陽と日本外史	一五
太閤秀吉	二
藤吉出仕	二四
歴史を讀む態度	二六
桐號瓠表	三七
秀吉君讐を報ず	三八
賤岳七槍	四〇

關白天威也	三六
征韓之役	四〇
加藤清正威鏡道に入る	四六
碧蹄館	五五
長期戰、食糧難、龜甲車	五九
京畿大地震	二九
太閤裂冊	三五
蔚山籠城	三〇
太閤臨終後圖を託す	四七

太閤秀吉

大谷吉隆、舊誼を重んず	二六〇
幸村、義に赴く	二九五
託孤寄命	三二五
鐘銘	三三〇
木村重成誓に蒞む	三五三
幸村戦死	三七四
大坂落城	三八八
終章	三九六

## 振 東 塾

開講に先だち學監から塾生の心得として、禮節のこと、秩序のことなど種々御話があつた。振東塾も禮節や秩序を重んじて、嚴肅なる塾風を作らうとの御趣旨と思ふ。

實は日本も徳川時代には非常に御行儀がよく、恰好だけは整然として居つた。然るに明治維新の時に九州から、長州から、殊に鹿兒島から豪傑が押し上つて來て秩序と共に舊儀禮を蹴破つてしまつた。その頃幕府の旗本は固より、江戸詰の諸大名に至るまで、整然たる儀禮があり、それが寧ろ煩瑣に過ぎ、纖弱に流れ、形に囚はれて精神の躍動を抑へつけるやうなものであつた。禮の要は和にありと謂ふべきであるのに禮式の爲に精神の扉が鎖され、人と人との魂の和合が出来ぬといふ憾み

二  
があつた。それに對し薩摩の豪傑などが、何だ禮儀も糞もあるかといった調子で、薩摩下駄で以て江戸文化を踏み破つてしまつたのである。學監が禮節を説かれた御氣持はよく解るが、實は學監の先輩達が薩摩の野趣を提げて來て、形骸に流れた禮儀を蹂躪してしまつたのである。

虚禮を一掃して眞味を出す、その眞味を調節する爲に、ほんとの禮節が入用となつて來る。眞味なき虚禮は野趣に如かずである。私は嘗て茶の湯の先生から面白い話を聞いたことがある。維新前のこと、西郷さんがどこか京都の茶席に案内されたことがある。極めて窮屈さうに大きな體を狭い茶席の中で取りつくろつて居られる。その中に出て來た御馳走が小さな里芋の新芋である。西郷さんがそれを挾まうとするとぼろつと落ちた。もう一遍挾みに行くと又落ちる。今度は膳の外の疊に轉げ落ちた。そこで西郷さんは仕方がないので今度はぐつと手を延ばして、芋を指でつまみ上げ、恥かしさうな恰好をしてムシャク／＼食つてしまつた。茶の湯の先生が其の

姿を見て、その掴み具合が實に率直で、自然で、何とも言へない茶道の氣持に適つたものであると云うたとのことである。

その話を聽いてやはり茶の湯のやうに形式的な禮儀を重んずるものゝ中でも、矢張り極致は心の作用であつて、西郷さんが慎しみながら、併し大膽に無頓着に已むを得ずんば里芋を掴んで食ふ、そこに大きな味があつたらうと思つたのである。禮儀は社會生活の中で己を正しく持し、相手に正しき影響を持たせることであつて形式にこだはつて己を窮屈にし、相手を窮屈にし、その中に躍動する精神の動きを妨げるやうなものであつてはならぬと考へる。

昔、吉田松陰先生が松下村塾の小さい一間で子弟を教育して居られた。松陰先生は禮儀を寛洪にして、眞心の門戸を開くといふやり方であつたが、それで先生が話されると門下生達は覺えず膝乗り出して感激し、膝と膝、肩と肩とが摺れ合つたと云ふ。之に反し先般聽かされた實話だが、此のあいだお役所から頼まれた役人上り

の講師が信州の農村青年を集めて、一場の訓話を試み、お前達は、松下村塾の門下生のやうな氣持で精勵せねばならないと厳めしく話したさうである。するとその中の一人が

「先生、私は段々話を聞いてゐると、どうも現存する社會には間違つたことが非常に多いやうに思はれて来る。松陰先生は大義のためには自ら起ち上つて、敢然社會の矛盾に對して宣戦せられ、幾多の艱難に遭はれて後、牢獄に投ぜられ、遂には安政の大獄に坐して斬罪に處せられた。私達も松陰先生の氣持を受けつげば、同じ道を辿らねばならぬ。吾々は今から縛られるやうなことを始めますと、貴方にも迷惑が及ぶ。」

と突き込むと、其の講師先生が、

「いや、それは左様に簡單には行かぬ。青年は慎重でなければ……」

と逃げを張つたので、一同吹き出したといふことである。松陰先生を真似たとて口

先と身振りだけで、根本の決心がなければものにならんと考へる。

御承知の通り今は内外の超非常時、殊に對外問題では現に重大事が眼前にぶつ、かつて來てゐる。政府はこの難に當つて、青年を指導し、國民を鼓舞し、何よりも先に日本の元氣を振作せねばならぬ。然るにどういふものか役人達は唯法律を細かにし、罰則を嚴にして、間違つたものは承知しないといふ態度で國民に臨んでゐる。さうすれば國民はものをいはずなる。謹慎する。社會の表面だけは極めて平靜となる。それが果して戦時下に好ましいことであるか、我等の期待する非常時下の社會は火の消えたやうな社會ではない。愛國的に湧き立つやうな社會である。社會の活氣を銷沈させて、上から壓力で統一すれば、統一せられた社會の各個人は死んでしまふ。死んだまゝ統一して置けば騒ぎは起らん、その替り躍動しない。躍動する一つの力がなければ、全體主義は死物である。我々は日本社會を構成する各々の個人をして 陛下の御稜威を帯びて躍動せしめ、其の躍動する各個人の活力を綜合し

て、社會的推進力となさねばならぬ。

時局を談ずるには談ずべき席に於て談じ、塾では學問をしたいと思ふ。併し、學問の研究を押し進め、知識を押し究めて、肝腎かなめな所に踏み込めば、知つてゐること、感じたこと、斯くすべしと信じたことは、身を以て之を實踐せねばならぬ。知つた以上、感じた以上、信じた以上、斯くすれば斯くなること、知りながら、斯くすることが大和魂の至上命令でなければならぬ。それが社會的行動であり、國家的行動であり、即ちそれは政治の實踐である。實踐にまでせり詰めない知識は、人生から遊離した知識である。しかしながら眼前に起り来る個々の問題を捉へて、一々研究し、批判するのが學問の要旨であるが、外交も、軍事も、經濟も、盡くこれを研究して行くことは、學徒にとりて實に煩に堪へない。しからばどうすれば要所を抑へてエネルギーを節約し得るか。個々の現象を追ひまはして、どれもこれも調べあげるよりは、胸中玲瓏の鏡を研ぎ澄して何もかも明白に映るやうにするがよい

最も正しき判断は最も普遍なる知識と、最も研ぎ澄したる心鏡に於てのみ、之に到達し得るものである。曇つたり、歪んだりした鏡を持ち廻つて、事々物々を照らすのに努力するよりは、鏡の曇を拂つて、玲瓏たる本質の光を發せしめ、正邪曲直善惡美醜、一として、照らさざるなきに至らしむることが、學問の根本要旨でなければならぬ。こゝで諸君と起臥を共にし、同じ環境の下に書を講じ、學を研め憂ひを同じくし、憤りを同じくし、悲しみを同じくし、悦びを同じうすることが、これが本當の舉國一致とか、全體主義とかの心鏡を會得する所以ではないだらうか。近來所謂革新的な役人達の指導の下に、何々體制、何々機構、何々秩序と云ふやうな言葉が非常に流行する。それを法律命令、官權の威力で兎に角恰好をつける。さうして機械的に組立て、全體の統一と云ひ、統合と云ふが、それは形式だけのことで、其の根柢に何の精神も動いてゐない。それだけでは機械組織であつて、有機組織にはなつて居ない。其の機械組織も單なる模型であつて、運轉の力を缺くも

のである。

八

カイゼルの軍隊はヒットラーの軍隊以上に形式は整つて居り、主権者に對する忠誠は誓はれて居たが、そこに精神の躍動は少なかつた。兵隊が上官の前に立つてゐる間は目一つ動かさない。ドイツの歩哨が立つてゐるのを見ると、人間か人形か分らない位びりつともしなかつた。將校と兵隊とは全體別個の存在であつた。一方は絶対貴族主義、一方は絶対奴隸主義、それで軍隊の秩序を機械的に組み合せて居たから、それは實に整然たる天下の精兵であつた。しかし四年間の戦の後に兵糧が足らなくなり、物資が缺乏し、一般社會が不安になつて來ると、其の軍隊は社會と共に崩壊し去つた。

ヒットラーはさうではなくて、軍隊を同志組織にした。將校は兵隊に命令するが、隊伍を解いた時には、將と兵とは人間としては同志である。同志として親しみ、同志として熱情を燃やし、同志として敬ひ、同志として愛撫する。軍隊を統御するに

は上下の段階は知識的にも、精神的にも、體力的にも、技術的にも、能率的にも眞價實力を標準とするものでなければならぬ。ナチス獨逸の軍隊はかういふ風の立て前であると云ふ。

ソヴェートの軍隊でも、昔のツァーのやり方とは違つて居る。兵隊と將校とは一絡でなくはいかん。劍を執つて號令してゐる時は、兵隊と將校であるけれども、其の友情は同志のそれではなければならない。赤軍精神はかういふやうに指導されてゐるさうだが、今度の戦争ではソヴェートの軍隊は兎に角猛獸のやうな闘志を示して居る。お氣の毒だが之を率ゐる方の人に能力がない、智慧がない。だから獨逸軍は猛獸に對する獵師のやうな戦ひ振りを示して、快勝を續けて居る。併し敵軍の闘志盛んなることは獨逸も之を認めて居る。

専ら規律を尊ぶ軍隊でさへ、其の規律の奥底には友情がなければならぬ。そこで此の塾に於ても規律は必要であるが、人と人とは友情をもつて交はり、先達のものが

九



身を以てこれを率ひなければならぬ。一段人の上に立つものは、一步困難の先きに立たねばならぬ。力はあつても勞役を惜しむやうなことで、駄目である。假令衆に擡んずる力はあつても、尙ほ自ら足らざるを憂ひて、一層同志の爲に努力するの覺悟がなければならぬ。

昔の塾では、塾に入つても當分の間は先生の講義など聴けやしない。雑布を掛させられたり、來客の應接に使はれたりするだけで、先生が出て行く時、お供をさせられるのは餘程よくなつてからである。併しそれで以て自然と見慣れ、聞慣れでその塾風に化せられる。その中講義を聴くやうになる。先生の講義は極く先輩の者だけで拜聴する。その先輩達が各々の部門を受持ちて、初心のものに講義をする。初心のものは仲間同志で輪講をやつて、互に間違を指摘したり、討論をしたりするといふやうな風であつた。

相撲部屋のことを聴かされたが、やはり親方の所に入門すると初めから相撲など

誰も稽古してやりはしない。始めのうちには所謂禪擔ぎで、土俵の掃除をさせられたり、飯を炊かせられたり、親方の背中を流さゝれたりしてゐる。その間に相撲心があれば自然と勘が出て来る。これは常陸山から聴いたことだが、相撲に勘のないものは相撲取りになれない。大抵禪擔ぎをさせてゐる時、眼の使ひ方によつて、相撲取になれるか、なれないかが分ると言つて居た。

私は馬に少し乗るが、これも先輩の話だが、昔の大坪流の先生など、入門しても始めから馬に乗せて呉れはしない。最初は弟子仲間の下働きで、馬の脚を洗つたり運動させたり、飼を食はせたりすることが日課である。少し乗るやうになつても、いゝ馬には乗せて呉れない。驚馬だとか、癩馬だとかに乗せられて、落馬すれば笑はるゝだけである。さうしてゐる中にだん／＼馬のことが分つて来て、一人前に馬に乗れるやうになり、遂には人に教へ得るやうになる。かういふやり方であつたさうだが、それでなくては何れの道にかけても本當の修業にはなるまいと考へる。

この振東塾では一つ眞劍に學ぶといふことが必要であらうと思ふ。人々は皆己の才幹があり、能力があり、特徴があつて、自負して言へば各々の人が何れも或る意味に於て天下の第一人者である。諸君は各々天下の第一人者であられると思ふ。私は天下第一の人に教へる何物をも有しない。しかしながら學ぶ時には己の長所を伸ばすと共に、己を謙虚にして人のものを受け容れ、自分の胃の腑で之を消化し、自分の良知良能で之を反省して見ねばならぬ。そんなことをして居るうち、いつの間にか教へられたことが、自分の血液と融合して、自分のものとなり、更に偉大なる自己が自己の中から育成されて来る。塾の修業はかういふやうに行くべきものだと思は考へる。

私の先生に金子雪齋といふ先生が居られたが、或る時友達と二人で先生を訪ねて行つたことがあつた。その友達は俊敏な男で、始め實業のやうなことをやり、後に雑誌の經營を私と一緒にやつたが、實は金子先生の所へ金策の相談に行つたのであ

る。用談の後に私の友人が先生に對し自分の履歷話をしたのが、次のやうなことがある。

自分は伊庭想太郎の弟子になつてをつた。この人は有名な星亨を刺した人だが、塾生を養ひて漢學を講じ、又擊劍を教へてをつた。或る時先生と一緒に飯を食へて居たところ、飯の中から虫が出て來た。自分はかねて、粗食を自慢にするやうな、塾の蠻風に、不平を懷いて居たから、無遠慮に虫が出て來たから、此の飯は食はないと言つてしまつた。先生はそれを聽かれ、非常に叱られて、その虫をそのまゝ食へ、食はなければ破門すると言はれた。自分は食ひません。……と飽くまで頑張つた。それぢや俺が食ふ、と言つて先生が虫の入つた茶碗の飯を食つてしまつた。さうして自分は破門されてしまつた。舊弊な漢學先生なんて、こんな馬鹿氣たものですといふのが私の友人の言葉である。

所が金子先生、貴様は惜しいことをした。その虫を食つて、破門されずにつつと

鍛ひ上げて居たならば、今頃雑誌の經營に行詰つて、この世間知らずの金子雪齋の所に、金策の相談をしに來なくてもいゝ人間になれてゐたのに、縁なき衆生で救濟出來なかつたのは惜しいことだ。熊澤蕃山が中江藤樹先生の所に入門したいといふので、なんぼ願つても許されない。それでは許されるまでこゝを動かさないといふので、五日間とか門前で蚊に食はれながら坐り込んでしまつた。お氣の毒だといふので藤樹先生の母親の取なしで初めて入門を許されたといふことである。君は苟しくも伊庭想太郎の弟子になつて、學問に志しながらその先生が虫を食へと言つたら何故食はなかつた。第一、人と一緒に飯を食つてゐる時、衆人の前で虫がつたなどと騒ぎ立てるのはお茶ッ婢の仕業だ。さういふことは男のすべきことではない。それをたしなめる爲めに……流石に伊庭想太郎だ……その虫を食へと言つたのだ。その時君が俺は輕卒なことをしたとぐつと、その虫を食つてをればそれで純朴なる一人前の青年だ。それを嫌だと言つて食はないのみか、小理屈を並べるなどは、全

く利巧者の行りかただ、青年は純朴で謙虚でなければ大きくなれぬ。浮薄で利巧な奴は碌な者になり得ないと。こう金子先生は叱つて居られた。

此の塾に於ても一つ間違へば、虫でも食ふといふだけの心の作用を會得して、學問をして見たいと思ふ。時事問題には觸れない。觸れないけれども、心中玲瓏の玉を磨いて置けば、森羅萬象、悉く之に映つて來るのは必然だ。この時局に臨み、自ら踏んで行くべき道が分らないといふことは、その人間の無智といふより無誠意と言はねばならぬ。若し誠意があるなら、時局知識と森羅萬象を正しく映すだけの心の鏡を磨いて置かねばならぬ。

### 頼山陽と日本外史

私は日本外史の講義をすることにしてゐる。外史の中から自分が青年時代に感興

の深かかつた部分を抄録し、それを断片的に講義して來た。先年始めた時には楠正成、新田義貞その他のことを講じて、青年諸君、非常に感銘も多かつたやうである。前回には徳川家康を講釋した。三河武士の鍛錬と、武士道とは大いに味つてもらひたかつた。然るに日本人にはどうも家康の性格は氣に合はぬと見えて、家康のいゝ所を擧げて聽かざるれば、益々腹が立つて來るといふ露骨な人もあつた。そこで今度は滋味のある家康は止めて置いて、今日は豊臣秀吉の講義をしようと思ふ。これは日本外史を讀んで見まして、面白さうな所を拔萃したのであるが、その拔萃は大體年代順になつてゐるのであるから、この各章を次々に讀んでをられると、太閤時代の歴史の筋道も分るだらうと思ふ。

頼山陽の日本外史は幕末時代大いに讀まれ、これによつて勤皇の精神を鼓舞して明治維新の原動力の一つとなつたと言はれてをる位である。今日の歴史家に言はせると、山陽の歴史の中には幾多杜撰な所がある。この史實は間違つてゐる。あの史

實の出處も疑はしいと、色々批判がある。そこで私もそれらの批判する人々の書いた歴史を讀んで見たのであるが、どれ一つとして、しからは山陽を見返すやうなものはなく、これなら絶対に真だといつて、信用することは出来ないやうである。

甲乙丙丁の書物の虫が夫々自家の主張を擧げて他を排撃して居るが、その材料といふものは大抵決り切つて居りまして、川角太閤記、甫庵太閤記、各武將の家に存してゐる記録、諸侯の祐筆の書いたものといふやうなものであつて、それを材料にして論じてをるのである。ではそれらのものが信用置けるかといふと強ちさうではない。黒田家にあるものは、黒田家のためになるやうに書いてあり、毛利家にあるものは、毛利家に都合のよいやうに書いてあり、又前田家にあるものも、さういふやうに書いてあるのであつて、必ずしも信用を置くわけに行かぬ。それでは武將の軍令とか、手紙とかは正しいかといふと、これも亦偽物が多くて、必ずしも信用出來ぬ。日本外史は字々盡く著者の心血によりて輝き、一篇の歴史詩であるから、考

證學者の枯木死灰のやうな穿鑿趣味と合はないのである。それで誰かが生意氣にも外史は眞實の歴史でないと言へば、俗學者流が之に和して、さうださうだと調子を合せねば學者らしくないやうに感ぜられるのである。

獨逸の國家主義經濟學の泰斗リストの著書は經濟學を講じながら、それが滿篇憂國の熱血にかためられて居る。熱血が迸つて居ればとてそれが學問として價値なしと斷定するは、自由主義者の見解である。山陽も外史を執筆する時には、大日本史を水戸で編纂中であつたから、父の關係からそれを資料として見せてもらつたといつて居る。あれ位の人であるから、随分かれこれ研究しながら、熱心に史實を求めただらうと思ふ。随て幾分史實と合はない杜撰の所があるとしても、この頃の小説家の書くやうな、いゝ加減なものでは斷じてない。殊に水戸の大日本史は、徳川光圀が莫大なる金を使ひ、學者を集め、資料を集めて編纂させたのであるが、日本外史は頼山陽が貧乏をしながら一人で書いたものである。そこに私は別個の價値

があると思ふのである。この頃御役所だとか、大政翼賛會だとか隨分金を掛けて資料を集め書物を出したりして居るが、さういふやうにして作つた書物は、普遍的であるかも知れんが、人を動かす力がない。水戸の大日本史でも、山陽の日本外史程感銘を與へないと思ふ。山陽は常に諸侯に仕へず、幕府に仕へず、皇城の地たる京都に住み、正しき自己の信念、その信念に近い生活の中で、勉強しながら書いたのである。

山陽は謀叛人となつて死んだ大鹽平八郎とは非常に交りがあり、共鳴してをつた大鹽平八郎が「洗心洞劄記」を書いて當時の天下の名流に意見を求めた時、佐藤一齋先生の返書の如きは甚だ不徹底である、彼は確かに陽明學に心を寄せた人であるが、幕府の許した漢學は朱子學であつたため、彼は洗心洞劄記を非常に推奨しながらも、自分に掛り合ひが及んではいけなといふつもりか、御趣旨は中々いゝが、さう一派を立てなくても、公儀の思召もあることであるから、學問はもつと廣い

心でやつたはうがいといふ自由主義者のやうなことを言つて胡魔化してゐる。

所が山陽は大鹽の洗心洞割記を一讀して、感激措く能はず、何等の保留をつけずして之を絶讃し、これに關聯して政治などを談じ、一番猛烈な手紙を大鹽に寄せてゐる、流石の大鹽平八郎もこれには顔負けで、痛烈な所を伏せ字にして彼の著書を飾つてゐる。大鹽平八郎ほどの勇者が、現代に於て山陽ほど大膽で誠實な學者はないと言つてゐる。幕府時代のあの言論不自由の中に居りながら、山陽はあれだけの日本外史を書いた。しかも日本外史が容易に彈壓を受けなかつたのは、忠孝を基礎として烈々たる光を放たせながら、一方に於ては日本の皇室を中心とした、勤皇の至誠を披瀝して居るからである。外史より後に書いた日本政記となると、山陽も病弱晩年に近く慷慨激越、大膽卒直捨身の心境に於て書いたものゝやうである。

## 太閤秀吉

今度秀吉の所を取り上げたのは、秀吉は御承知の通り、日本の國威を海外にまで及ぼした最大なる武將であり、同時に政治家である。さういふ點から秀吉を通じて、その頃の武士道を見、世相を見、日本を見たいと考へたわけである。殊に私が秀吉を講釋して見たいと考へたのは、この頃大衆小説が非常に流行り出し、この間新聞に出てゐるのを讀んで見ると、まるで秀吉といふものは色情狂のやうなものになつてゐて、まるで無茶なものである。文士の爛れたやうな生活による昏迷せる頭で、こんな英雄を題材に取つて、想像に想像を逞しうしながら、下らないことを書き聯ねてゐる。彼等の筆緻はまるでモーパッサンである。私は英雄を冒瀆することこれより甚だしきはないと思ふ。考へて見ると民族の英雄秀吉を、あんな風に取扱ふの

は、敵國の思想謀略にかゝつて居はしなないかと思ふ。秀吉は決して色情狂のやうな男でない。所謂朱子學的形式道德に拘束されないで、調子はづれの點もあるが、其の物に屈托せざる雄渾な態度は、それこそ純朴なる日本人的のものである。彼の心事は非常に公明、事々物々の上に現はれたる彼の態度は、彫琢せざる自然の玉の光を發して居るのである。ものを照らし、世に處する、その心の鏡は非常に清く澄みわたつて居るのである。彼は國體の説教者のやうに理論の殻に立て籠らず、實に天性の日本的英雄である。

天照大御神はこんな素直な子孫を御寵愛なさるであらう。秀吉は日本國民として最下層の家に生れ、生活の第一歩から困難の鐵槌に打ちのめされ、併も平然自若、忍び難さを忍びて、明朝活達なる行動に出でながら、自ら偉大なる自己を、乏しき環境の中から作り上げて行つた。その偉大なる秀吉を山陽の筆によつて講じながら、諸君と共に人生を語りたと思ふ。講義をするといつても私は學校の先生ではない。

話すのにもものゝ緒口が見つからぬ、と話にはづんで來ない。そこで此處に誰か勇敢な人があつて質問する。それに應じて私が話をするといふことにすれば一番いゝのだが、誰も彼も發言して討論會になつても仕方がない。そこで先づ頼山陽を借りて來て、外史を讀んで貰はう。

頼山陽は道學者の趣味には合ふまいが、彼の世に處する根本の態度はいゝ、酒も呑んだでせう。若い時には道樂もしたでせう。長崎あたりに流れて行つて、遊廓の帳場に流れ込み、帳面つけをやつてゐたといふこともある。併し彼には烈々たる尊皇の精神、尊皇の大義に立脚した革命精神（嚴密なる意味の革命でない）が躍動してをつた。その取り扱つた人物は太閤秀吉、小説ではない、史實である。最も日本人の性情に近い、一番人氣のある豊臣秀吉である。そこで太閤秀吉と頼山陽と私との三人掛りで諸君に講義をしよう。昔の塾では讀む、その次に皆がつける。讀む、つける。それでやつて行つた。こゝでもその要領でやる。大きな聲でやつてゐると聲

も強くなり、ものを言ふのがはつきりして来る。舌の練習にもなれば、咽喉の鍛錬にもなれば、又深呼吸にもなる。それでは私が讀むから、あとからつけて讀んで貰ひたい。

### 藤吉出仕

豊臣氏は尾張より出づ。尾張愛智郡に中邑有り。邑に銀杏樹多し。因りて或は銀杏村と呼ぶ。享祿、天文の際、村民に彌助といふ者有り。彌助、子無し、其の妻と之を天に祈る。妻、日輪其の懐に入るを夢む。已にして身む有り。天文五年正月朔、一男兒を生む。因りて名づけて日吉と曰ふ。日吉生れて英異なり。八歳にして父を失ふ。其の母、日吉を携へて、轉じて邑人に寄食す。邑人之を思ふ。同閭に筑阿彌といふ者有り。國主織田信秀の僕となり、疾を以て歸耕す。邑人爲めに議して、納れて繼父と爲す。一男一女を生む。乃ち日吉を邑傍の光明寺に託して、僧と爲らしめんと欲す。日吉、機敏にして誦梵を曉らす。人の武事を談ずるを聞く毎に、

乃ち之を傾聽す。慨然として歎じて曰く、「僧は乞丐の徒のみ。大丈夫、亂世に生れ、安んぞ乞丐を學ぶを爲さん」と。是に於て、游嬉、意に任せ、人と評へば、輒ち之を毆撃し、僧をして己を壓苦せしめんと欲す。僧、遂に其の家に逐ひ歸さんと議す。日吉、繼父の己を怒るを恐れ、大言して曰く、「果して我を逐はば、我且に寺を焚き、悉く群僧を擊殺せん」と、僧頗る懼れ、乃ち事に託して辭謝し、衣物を予へ、禮して之を歸す。

豊臣氏は尾張の出である。尾張の愛智郡に中邑といふ村があつて、その村には銀杏樹が多いので銀杏樹村とも呼んでゐた。享祿、天文の頃、この村の民に彌助といふ者があつた。彌助には子供がなかつたから、その妻とも、どうか子供が出来るやうにと天に祈つてゐた。或る時妻は、太陽が自分の懐の中に入つたといふ夢をみた所、間もなく身重となつた。(よく英雄にはかういふ傳説がある。)さうして天文五年の正月一日に一人の男の子を生んだ。それで日吉と名づけた。これは生れた日



がいゝから、日吉とつけたのだといふ説と、日吉神社の近くにゐたゝめ日吉と名づけたのだといふ説とがある。どうせ百姓がつけたのだから、いゝ加減につけたのだらうと思ふ。

日吉は生れつき氣性が人並勝れて賢かつたが、しかし模範少年ではなかつた。八歳の時に父を失つた。母は日吉を連れて、あちこちと村人の家に居候をして歩いて居た。村の者はこれを心配して、どこかに嫁けやうとしてゐた。その頃同村に筑阿彌といふ者があつて、國主の織田信秀の足輕として仕へて居たが、病氣のために村に歸つて農業を營んで居た。村の人達は相談して、入り婿として日吉の繼父とした。その繼父と母との間に一男一女が生れたので、親達は日吉を村の近傍の光明寺に頼んで坊主にしようと思つた。

所が日吉は機敏であつて、少しもお經を讀むことなどはしようとしなない。それには全然興味がなかつた。頭の悪い者程、形式的のことをよく覺える。小學校の優等

生は必ずしも特等第一流の頭ではない。頭が普通にいゝ人は、よく何事でも覺えるが、非常特別の天才的な頭の持主は、教へられることを丸覺えにすることは不得手である。男よりは女の方が、唯、ものを覺えるだけなら勝つてゐるさうである。これはイギリスのバートランド・ラッセルが書いてゐるが、女は人の言つた通りを直ぐ信じ、すぐ覺え易いが、男は先生に教へられると、それを繰り返す時にも自分の意志を混へて來る。電話交換手には女の方が適當で、男の方では其の儘の繰り返しがうまく行かぬ。秀吉が坊さんのお經を其儘丸覺えにするのに興味がなかつたのは當然であらう。人が戰の事を話すのを聞く毎に、いつも耳を傾けて熱心にこれを聽いた。さうして「坊主など乞食の仲間に過ぎない。立派に男と生れながらどうして乞食のことなどを學ぶことが出來やうか」と慨然として歎いて言つた。

「出家とその弟子」といふ小説があるが、それを讀んで見ると、和尚さんはお彼岸の上りが多いやうに、かういふやうに宣傳しよう。あゝいふやうに宣傳しようとい

ふことばかり考へてゐて、ほんとの佛様の事など考へて居ない。坊さんといふものはまるで乞食のやうだ。さうしてそれを見てゐると腹が立つ、良心ある少年は、坊主の子だなど云つて、世間に出るのが恥かしいと云ふやうなことが書いてある。そこで毎日思ふまゝに遊び廻つて、人と喧嘩をすれば直ぐ相手を殴りつけて、和尚をして自分をいやがらせようとした。和尚は遂に日吉を家に逐ひ歸さうと相談した。それを聞き出した日吉は、亂暴はして見たけれども、流石に繼父の筑阿彌に怒られるのを心配して、「本當に自分を逐ひ出すなら、自分はさつと寺を焼いて、残らず坊主共を打ち殺してやる」と吹きかけた。これには坊主達も大いに恐怖し、そこで外のことにかこつけて寺に置くことを斷はり、着物や品物をやつて叮嚀に挨拶して日吉を家に歸した。逐ひ出されるにも只では歸つて來ない。腕白息子の天才的な所が現はれて居る。

日吉、時に甫めて十歳なり。父素より貧にして、共に存すること能はず。復遣して人奴と爲す。至る所、皆數月にして去り、尾張、美濃の間に轉徙す。二十歳の比、遂に遠江に如きて、土豪松下之綱の家奴と爲る。之綱、其の才幹を愛し、事毎に之を使ふ。名を與助と命す。之綱一日、從容として問ひて曰く、「汝は尾張の人なり。織田氏用ふる所の鎧、何様なるを知るか」と與助對へて曰く、「天下の鎧は皆桶皮にして、尾張獨り胴圓を用ふ。臙を右肋に施し、屈伸意の如し」と。之綱曰く、「吾胴圓一領を得んと欲す。汝、吾が爲めに往きて買ひ來れ」と、既ち黄金六兩を附して之を遣る。與助行くゆく自ら計りて曰く、「吾此の金を攘みて仕進に資せん。苟も意を得ば、他日之を償はんこと易きのみ。小節拘るに足らざるなり」と。乃ち尾張に入り、其の叔父に就きて謀る。叔父、之を可とし、因りて織田氏に仕ふるを勸む。

是の時に當り、信秀既に没し、信長嗣ぎて立ち、四疆を攻略す。與助亦以爲へらく、「信長に非ざれば、與に功名を成すに足る者無し」と。是に於て、其の金を用ひて、刀劍、衣服を辨じ、自ら姓名を造りて、木下藤吉と曰ふ。信長の出づるを伺ひ、道側に跪謁して曰く、「臣の父筑阿彌は嘗て君の先公の奴と爲る。臣、幼より他方に流寓して、自ら君の門に達する能はず。願は

くば君、復臣を收めて奴と爲せ」と。信長熟視し、笑ひて曰く、「汝の面、猴に類す。其の心必ず捷ならん」と。乃ち收めて奴と爲す。常に鞋を拵ちて従ふ。其の筑阿彌の子なるを以て、呼びて小筑と曰ふ。藤吉、奉仕甚だ勤め、近臣に依託して、其の使令に給す。信長嘗て晨を侵して獨り出づ。従者未だ屬せざるに、藤吉輒ち之に従ふ。斯の如きこと數々なり。信長漸く之を親近す。

日吉はその時やつと十歳であつた。父は素より貧乏で、日吉と一緒に暮すことが出来なかつた。そこで又人の家の下男として、奉公に出してしまつた。しかしどこへ行つても皆數ヶ月で飛び出して、尾張と美濃との邊をあらゆる轉々してゐた。太閤記を讀みますと、紺屋の弟子になつたり、子守になつたりしてゐるが、どこでも餓鬼大將になつて、亂暴するので逐ひ出されてゐる。勤續二十五年で賞品を貰ふのも偉いけれども、逐ひ出されるものにも又偉いものが居る。それは要する

に主觀的であつて、こつちが悪くて逐ひ出されるのはよくないが、こつちはいゝのに向ふが悪いといふ時には出た方がいゝ。これを履き違へて、どこでも辛棒しないといふのはいけないけれども、勤續二十五年、必ずしも偉いといふことではない。轉々と逐ひ出されるもの、中にも偉い者がゐる。日吉は二十歳の頃、遂に遠江の國に行つて、土豪松下之綱の下僕となつた。中々秀吉の出世といふものは遅い。

人間はそう成功を急がなくてもよからうと思ふ。あつちこつち逐ひ出されるのもやはり學問である。秀吉は寺にゐた頃、お經を一つも覚えなかつたといふものゝ少し位は知つて居たと見え、人に説教する場合、お經にはかういつてゐるといふやうなことを言つたさうである。あらゆることが學問であつて、必ずしも赤門をくぐらなくとも、社會の苦難を嘗めて歩いてをれば、それが立派な學問になる。二十歳まで彼は社會の大學で大分勉強したのである。それまで橋の上に寝てゐた所を、蜂須賀小六につかまつて、泥棒の使ひ走りになつたこともある。泥棒の下郎部屋でど

んなことを見聞きしたか。こゝで餘程高き、純なる心の持主でない、本當の泥棒になつてしまふのであるが、しかし秀吉には、一片歌々の心あり、どうにかして俺は亂世に身を立て、やらうといふ希望があつたので、さういふものには染まなかつた。之綱は日吉の才氣を愛して、事ある毎に日吉を使ひ、名を與助とつけた。

或る日之綱は開き直つて「お前は尾張の者だが、織田氏の用ひてゐる鎧がどんなものであるか知つてゐるか」と問うた。與助が答へて言ふには「天下の鎧は皆桶皮である。桶皮といふのは胴が桶になつて、すぼつと體に入るやうになつてゐるものである。所がたゞ尾張だけは胴圓を使つてゐる。」胴圓といふのは右の脇の所に膝をつけて締めたり緩めたりして體に合はすやうになつてゐるものである。そこで之綱は「自分はその鎧が欲しいからお前買つて來て呉れ」と言つて六兩の金を渡した。與助は行く行く身の上の計畫を考へて見た。一つこの金をもつて出世をしてやらう若し自分が成功すればその時に返せばいゝのだから、小節になど拘はる必要はない

と考へた。

泥棒にも理窟がある。小節拘るに足らずといふのが面白い。事實秀吉は後になつて之綱に一萬石を與へ御禮をしてゐる。尾張に歸つてこのことを叔父に相談した所、その叔父も相當なもので、それはいゝであらう。それでは織田氏に仕へたらいと、思ふと勸めて呉れた。この時、織田信秀は既に死んで、信長が嗣いで立ち、四方の隣國を攻め取つて勢が盛んになりかけてゐた。與助は信長でない、共に功名を成し遂げるに足る者はないと思つた。そこで自分で姓名を創つて木下藤吉といつた。自分の姓名を創るなど、甚だ創造的である。

信長が外出するのを覗ひ見て道端に跪いて「私の父筑阿彌は、以前あなたの御先代の下僕でありました。私は幼時から他國を流れ歩いてゐたので、あなたの御門に參上することが出来ませんでした。どうかこれから私の父同様、あなたの下僕にして下さい。」と言つた。信長がつくづく見て笑つて言ふのは「貴様の顔は猿に似て

ゐる、その心も必ずすばしいであらう。」と言つて下僕にした。藤吉は常に草履を取つて信長のお供をしてゐた。筑阿彌の子であるといふので、小筑と呼ぶことにしてゐた。藤吉の奉公振りは甚だ精勤であつた。近侍の家來に頼み込み、信長の命令を承つて給仕の役をしてゐた。信長が嘗て朝早く、暗い中に獨りで出掛けたことがあつた。供の者はまだ誰もついてゐなかつたので、藤吉は直ぐにお供をした。かういふことが度々あつたことから、だんく信長は親しみ近づけるやうになつた。之綱は形式張りで尊大振つてゐるが、又猫撫聲で、藤吉は偉い、藤吉は偉い、主人優りだ。今に重く取り立て、やると藤吉にも言ひ、人の前でも安値にほめるのである。併し使ふことは使ふけれども中々取り立てはしない。一向に面白くないので誰か偉い人に仕へたいと思つてゐる所へ、丁度尾張りに行く用事が出来た。小節拘るに足らざるなり、他日成功したら返してやらうといふので信長に會ひに行つた。太閤記にもいろいろありますけれども、皆さう書いてある。

しかし信長に會はうと思つても中々に會ふことが出来ない。或る時信長が威勢よく馬に乗つて鷹狩から歸つて來る道端にへいつくばつてゐた。信長はそれを見て何んだまるで猿ではないか。おかしな奴だ。何用があるのかといふ。所が藤吉のいふことが面白い。私は殿様に御仕へ申さうとは思つて居りますが、それはあながち私がおためのみではありません。殿様のおためにもなると思つて來たのです、とやつてのけた。信長は訝かしみながら、一體貴様には何か出来るのかと問うた。さうすると上は天文、下は地理、六韜三略、虎の巻、武藝十八番に至るまで心得ざることなし、私程のものを御使ひにならなければ、御家のおためになりませんぞと大變法螺を吹いた。信長はおかしなことをいふ奴だと思つて、その申出を許し足輕頭の淺野長勝に預けることにした。

淺野は藤吉を家に連れて歸り、お前は殿様の前で大法螺を吹いたやうであるが、一つその學問を試さうといふと、今度は藤吉疊に頭をすりつけて、平つくばり、實

に恐れ入りました。あれは全く嘘なのです。あゝでも申さなければその場で蹴飛ばされて、取りつく島がないと思ひましたので、一時其場逃れにあゝいふことを申上げたのです。私は若い時からあちらこちら歩いて廻り、松下之綱の所に仕へてゐましたし、又その前は泥棒の手先にもなつてゐました。實にはしたない、何も知らん男です。厩の番人でも何でも致しますから、どうか宜しく願ひますといふ。太閤記には忽ち、歎き悲しみ訴へける、と書いてある。そこで淺野も可哀想に思ひ、別當兼草履取に使ふことにした。

秀吉、熟々信長の風采を見ると、まるで松下之綱とは違ふ。安値なお世辭を並べるところか、草履取などには目も呉れない。呼ぶ時には小筑、小猿、こら貴様、奴鳴るより外にもものを言はない。しかし朝は暗い中に起きて馬を攻め、夜は深更まで書物を読んで一時も怠る所がない。戦をすれば電撃必勝、實にすばらしい。その風采たるや秀麗であり、霸氣、言行の間に横溢してゐる。實に惚々しくなつて来る。

そこで藤吉もこの人のためにはといふ氣になつたのである。それでこそ、人を人も思はぬ藤吉が、かゝる大將のためならばと、喜んで草履を取つたのである。朝は四時、五時頃から起きて草履を懷の中に入れて暖める。信長も初めの中は分らなかつたが終にはそれが分り、貴様この草履を尻の下に敷いてゐたなといつて叱つて見た。けれども一向叱られることを何とも思はない。悪ければ改め、足らなければ勵む。それから厩に行けば、馬の飼ひ方をしらないから同僚にその方法を習ふ。

けれども月並の飼育では荒馬乗りの信長の氣に入るやうに馬が力づかない。そこであす殿様が鷹狩をせられるといふやうな時には夜飼をつける。晩の飼の後、夜中にもう一遍飼をやると馬は逆も元氣になる。馬の脚を藁でこするのみならず、そのあとを手で揉んでやる。それから櫛をかけるだけでなく馬の全身を手で撫で廻してやる。かうしてをれば馬は數ヶ月にして生き／＼して来る。毛艶まで變つて来る。信長は鷹狩に行つたり、演習したりする時は随分亂暴に乗廻はすが、手あてがよい

ので馬の勢がまるで見違へるやうに好くなつた。さういふことから秀吉はだんくと重んぜられるやうになつて行つた。

信長は人材を見ることは非常に上手であつた。森蘭丸を呼んで、爪を取つたあとを片付けろと言つた。蘭丸は爪を拾つてあといつまでもぐづ／＼してゐる。どうしたのだと言つたら一つ爪が足りないと言ふ。そこで膝を拂つたらその一つが出て來た。此の素振りを見て、蘭丸の聰明なことを認めたと謂はれて居る。

信長は中々小さい所に目がつくのみでなく、其の眼光が人の肺腑を貫くから、胡麻化さうと思つても中々胡麻化することが出来ない。英雄、英雄を知るといふことがある。今此の塾の中には會社の重役もをられるだらうし、小僧もをられるかも知れんが、人を使つても、使はれても、その微妙なる所に心を用ひないと駄目だと思ふ秀吉は厩の隅で馬の脚を撫で廻はしてゐる。馬が元氣になるから、信長が馬に乗れば御機嫌がいい。信長の御機嫌がよければ秀吉の心も愉快である。

人間の世に立つ所以のものは、本當の感激でなければならぬ。感激より發するの氣持、それが人と人とを結びつけるのである。日本外史はすらく書流してあるけれども、この間の人情を描寫し洵に麗しいものである。諸君が外史を味讀されると、そこの小説家のイマヂネーションによつて作り上げたものを讀むよりは遙かに爲めになる。學校の修身の本にもなると思ふ。

其の明年、信長居る所の清洲城壁、壞ること百歩可り、吏に命じ卒を發して之を補はしむ月を彌りて成らず。藤吉從ひて城下を過ぎ、仰視して嘆じて曰く、「噫危し」と。因りて獨語すること之を久しくす。信長、微に之を聞き、藤吉を呼び、面のあたり詰りて曰く、「小筑、汝何を言はんと欲する」と。藤吉、左右を畏憚して敢て答へず。信長伴り怒りて、其の手を拉きて之を近づく、藤吉乃ち曰く、「方今、君の國、東に今川、武田有り。西に齋藤、淺井、六角有り日に我が隙を窺ふ。然して備を弛ぶる此の如し。有司、君の爲めに謀ること不忠なり」と。信長、默然たり。既にして舍に歸り、藤吉を召して曰く、「汝をして工事を司らしめば、則ち汝能

く速に之を竣へんか」と。藤吉曰く、「能くせん」と。信長曰く、「吾今日、汝に命じて工事を司らしむ」と。藤吉、拜謝し、徑に吏に詣り、告げて曰く、「主公、僕に命じて工事を司らしむ。願はくば徒屬に諭し、僕が令を聽かしめよ」と。吏、意に之を憎み、曰く、「子好く之を爲せ。吾復管せざるなり」と。藤吉乃ち盡く役徒を會し、君命を以て之に酒食を賜ふ。乃ち分ちて十隊と爲し、一隊を以て十歩に充て、身自ら之を奨勵督促す。兩日にして成る。信長適々獵より歸り、見て大に驚きて曰く、「猴奴乃ち能く此の如し」と。因りて俸を加へ、升せて吏と爲す。是の歳、永祿二年なり。

その翌年、信長の居る所の清洲城の壁が百間ばかり壞れたので、役人に命じ人夫を出して修繕させた。所が月を越しても出来上らなかつた。藤吉は信長のお供をして、その城下を通つてこれを仰ぎ「あゝ、危いことだ。」と歎息し、さうして何か暫くの間獨言を言つてゐた。信言は微かにこれを聞いて、藤吉を呼び寄せ「小筑、貴様は何を言はうとしてゐるのか」と詰問した。しかし藤吉は左右の者を憚かつて何も

答へない。そこで信長はわざと怒つたやうな恰好をしてその手を握つて引寄せた。

そこで藤吉は「現在殿様の國の東には今川、武田の強豪が控へて居り、又西には齋藤、淺井、六角が頑張り、互にこちらの隙を窺つて居る。それであるのに軍備を弛めてゐることこの通りである。役人どもは殿様のために謀つて洵に不忠であります」と言つた。所が信長はそれに対して何も言はなかつた。聽て信長は家に歸ると、藤吉を召して、「お前に工事をさせたならば、速にこれを仕上げる事が出来るか」と問うた。藤吉は「出来ませ」と答へた。そこで信長は「それでは自分は今日よりお前に命じてこの工事を司らせる」と言つた。藤吉は御禮を述べて直ちに役人の所に行き「御主人が私に命じて工事を司らしめられる、どうか人夫どもをお諭しになつて、私の言附をよく聽くやうにして下さい。」と言つた。役人は藤吉を憎んで「そんなことはお前がいゝやうにしたらよからう。吾々はもう關係をしない」と言ふ。そこで藤吉は人夫を悉く集めて、殿様の思召しであると言つて一杯飲ませ、人夫



を十組に分け、一組に十間を割り充て、自分がその場に出て勵まし換めて、工事を監督したので、二日間で出来上つてしまつた。人夫を使ふのには一杯飲まさなければ駄目だ。各ん坊では人は動かない。強ち酒を飲ませるのでない。心持を飲ませるのだ。秀吉、中々圓轉滑脱な所がある。又仕事をしやうと思へば、自分でしなければならぬ。こゝに會社の重役もおいでなさるさうであるが、やはり部下の者の中に立ち交つて、自分でやらなければならぬ。自分は威張り返つてをうつて、人ばかりこき使つてゐたのでは、仕事は出来るものではない。秀吉は自分でも大いに仕事をした。信長は折しも獵から歸つて来てこれを見て大いに驚いて「猿め、よくも出来かしたぞ」と言つて大いに褒め、俸祿を増加し、昇進させて役人とした。丁度この歳は永祿二年であつた。

三年、藤吉、又上言して曰く、「清洲城は水に乏し。小牧に徙ること便なり」と。信長已に之

を欲す。而して勞費を憚りて未だ果さず。且つ人の水に乏しきを知るを惡む。乃ち叱して曰く「猿奴何をか知らん。敢て妄言を進む。罪、死に當す」と。凡そ藤吉、事を言へば輒ち叱斥せらる。衆、之を目笑して曰く、「彼の面皮、何ぞ厚き」と。藤吉以て意と爲さず。獨り深く信長に結ばんと欲す。信長の士前田利家、淺野長勝、藤吉と善し、淺野、中邑の人杉原某の二女を養ふ。利家、其の長女を悦び、之を娶らんと欲す。女肯はず。之を強ひて已ます。淺野之を思ふ。藤吉、權に利家に謂ひて曰く、「子、諸を舍け。吾已に之に通ぜり」と。利家笑ひて曰く、「吾未だ之を知らず。苟も然らば、子盍ぞ速かに婚媾せざる。吾、子の爲めに媒せん」と。藤吉も亦甚だ辭せず。遂に柴田勝家に因りて信長に請ふ。允さる。藤吉、家貧し。婚を成すの夕、夫妻、藥を簀に布きて坐し、瓦缸敗盡を以て相酬ゆ。妻、其の常人に非ざるを知るや、之に事ふることを甚だ謹む。後に淺野、近江の人安井長政といふ者を養ひて子と爲し、妻すに其の少女を以てす。是に於て、淺野、加藤、福島、小出の諸人、皆外戚を以て藤吉に屬す。

永祿三年、藤吉が又「清洲城には水が乏しいから、小牧にお移りになつては如何

ですか」と申上げた。小牧といふのは後に家康がこれに據つて、秀吉に一泡吹かせた所である。信長は前からそれを欲してはゐたのだが、たゞ費用が澤山要るので果してゐなかつた。その上、清洲に水が乏しいことが、人に知れることを恐れてゐたので、信長は「みだりにくだらないことを言つたならば殺してしまふぞ」と叱りつけた。人々はそれを見て、何んで小猿の面の皮はあんなに厚いのだらうと目で、笑つてゐた。所が藤吉は一向にそれを氣にしないで、心算かに信長と深く結ばんことを望んでゐた。

此の秀吉の態度は人に使はれてゐる者に取りて特に大切であると思ふ。上の人から叱られても、そんなにいぢけなくてよい。自分がひがむ程に他人は悪く自分を思つてゐない。俺が折角献策するのに、採用しないばかりか叱りつけた。もう俺は何も言はないぞ、といふやうにひがんで來ると、今度は却つて憎まれるやうになる。少々叱られても構やしない。自分の正しいと信じたことは堂々といふ。知つてゐて言

はないのは不忠である。自分の心の寸法に照して考へて見る。俺は悪意で輕薄で發言したのでない。何か理由があつて叱られたのなら仕方がない。何か向ふにも理由があつて御採用にならないのだらう、もう少し研究して又の機會を待たうと。こう云ふ濶達なる心が欲しいものである。信長は中々激しい氣性の持主で、まかり間違へば、どこでも手打ちにする。その信長を憚らずしゃべり出す秀吉は、餘程の信念があつたのであらう。やましい心では物は言へない。中々面白いと思ふ。前田利家と淺野長勝とは藤吉と仲がよかつた。淺野は中邑の人の松原某の二女を貰つて育てゝゐた。利家はその長女を嫁に貰ひたいと思つたが、女が承知しなかつた。しかし利家も言ひ出したからには、中々後にひかない。そこで淺野は非常に心配してゐた。藤吉は氣輕な男だから、冗談に利家に向つて「もうそんな野暮なことはしなさんな、實は私が既に關係してゐるのです」と言つた。利家は笑ひながら「それは知らなかつた。しかしそれが本當であるならば、何故早く結婚しないのか、自分が仲人にな

るから早く結婚すればいい」と言つた。藤吉もこれに至つては甚だ辭退もせず、遂に柴田勝家を通じ信長に願つて結婚の御許しを得た。

藤吉の家は貧乏であつたので、結婚の夕には、夫婦とも簀の上に藁を布き、その上に坐つて、土器の徳利に少し罇の入つた盃でもつて三々九度をした。その妻は藤吉が常人でないのを知つて居たので甚だ謹んで仕へた。夫婦別ありで、謹しまなければ長く持たない。之に仕ふこと甚だ謹めりと云ふのは、其の家庭が唯の愛の巢でなかつたことを示してゐる。家庭は謹しむ所である。秀吉は晩年淀君を妾としたといふことから、いろいろ小説の材料になつて居るが、家庭は中々嚴肅であつた。その頃の大名で一夫一婦の者はなく、秀吉もさうであつたが、正妻を尊重して妾は自分の家には置かなかつた。妻君も中々優れた人で、部下を愛し、秀吉のために屢々忠言をして居る。秀吉が贅澤に流れる時には「葉簀瓦缸の時を忘るゝことなかれ」と言つており、相當の賢婦人であつたと思はれる。後に舅たる淺野長勝は近江の人

安井長政といふものを養子として貰つたので、淺野、加藤、福島、小出の人々は皆藤吉の親戚となつた。

六年夏、信長、兵を河洲に闕し、戲に藤吉を以て將と爲す。藤吉、之を部勒指麾すること、兵法に老いたる者の如し。其の九月、信長出で、洲股に舍す。近臣福富某、其の刀筭を失ひ、藤吉を意ふ。藤吉、急に津島の市に赴き、密かに金を懸けて之を購ふ。一卒有り、來りて刀筭を弼ぐ。藤吉、之を驗するに、乃ち刀筭を盗む者なり。即ち之を執縛し、信長の還るを候ひ卒を携へて要調し、俯伏垂泣す。信長、故を問ふ。藤吉、具に對へて曰く、「臣唯貧し。故に人の意ふ所と爲る」と。信長、之を憫み、爲めに其の懸金を償ひ、遂に賜るに百貫の邑を以てす

六年の夏、信長は河洲で閱兵をした時、戲れに藤吉をその大將にして見た。所が兵の部署を決めて指揮するやり方が、兵法に通曉してゐる者のやうであつた。その年の九月に信長は洲股に出て居た。近臣の福富某が刀筭(こづか)を盗まれたので、それ

は藤吉が盗んだのではないかと思つた。そこで藤吉は急いで津島市に赴いて、窺かに懸賞金を出してそれを買はうとした。一人の足輕がその刀筭を賣りに來た。藤吉がこれを調べて見ると盗まれた刀筭であつたので、その足輕を拐へて縛つてしまつた。信長が洲股から還つて來たので、藤吉は面會を求め、その足輕を連れて頭を下げ、涙を流してゐる。信長が譯を問ふと、藤吉は「私が唯貧乏であるばかりに人、から盗んだのではないかと思はれるやうになるのでございます」と、其の悲憤の情を訴へた。そこで信長も非常に憫んで、懸賞金を償つてやると同時に、百石の村を與へた。百貫といふとどれだけかといふと、百石ださうである。貫は石のことである。さうして百貫を貰へば、四公六民で、百の中の六十が民であるから、上りは四十石といふことになる。

信長方に儉を行ひ國を富まさんとす。薪炭の費多きを患へ、藤吉に命じて之を司らしむ。費、

十の七を省く、因りて之を數事に試みるに、皆効あり。然れども未だ兵に將たらしめざるなり  
藤吉、私かに一旗を制し、少年を集めて自ら従ふ。信長之を親て、其の妄を怒り、命じて其の旗を斫る。藤吉意色自如たり。

その頃信長は儉約を行つて國を富してゐた。薪炭費の多いのを心配して、藤吉に命じて、その消費節約を司らしめた所、十の中、七までも省くことが出來た。民間の事情を知つてゐる秀吉は、中間に居て炭を搾取するものが居るのを知つて居るから直接に山に行つて買出した所、値段がうんと安くなつた。しかしそれでもその買出した炭を、屋敷の中で胡麻化するものが居るので、それを嚴重に監督して配分した。そこで必要な所に使はれる炭の分量は却つて増加したけれども、ムダと着服とがなくなつたので、全體の量は大いに節約された。やはり大學卒業生では出來ない藝當である。民間で苦勞した人だからそれが出來たのである。そこでいろ／＼仕事をやら

して見ると、皆効果を擧げて行つた。しかし信長は未だ秀吉を大將にはしなかつた。藤吉はひそかに一つの旗を作つて、少年を集めて彼等を従へ、餓鬼大將で得意となつて居た。信長はこれを見て大いに怒り、その旗を切らしてしまつた。けれども藤吉は泰然自若として驚かなかつた。藤吉意色自如たりの一句、其の釋氣と自信とが見えるでないか。

信長、既に今川氏に克ちて、尾張を定め、西、齋藤氏を美濃に攻む。洲股河を踰えて兵を用ふ。數々志を得ず。因りて諸將に會し、壘を河西に築き、一將を以て之を守らしめんと謀る。諸將人人自ら危み、敢て當る者無し。信長、密に之を藤吉に謀る。藤吉對へて曰く、「孤壘、敵地に斗入す。我が兵必ず往くを欲せず。即し往くも、其の地形の險易を語んぜず、一敗せば復往く者莫からん。其の土人に因りて之を用ふるに若かず。臣嘗て美濃に寓し、其の豪俠・大盜と相識る。宜しく誘ひて我が用を爲さしむべし」と。因りて指を屈して其姓名を擧ぐるに、蜂須賀小六、稻田大炊、梶原隼人、青山新七以下六十餘人を得たり。其の黨屬千二百人あり。信

長曰く、「吾も亦此の輩有りと聞く。誰か之に將たる者ぞ」と。曰く、「臣願はくは之に當らん」と。信長、之を許す。九年九月、卒を發して壘を築く。敵將の近邑を守る者、八千人を以て、出で、之を沮む。我が兵且つ戦ひ且つ築く。數日にして成る。是に於て、藤吉に投ぐるに甲士五百を以てし、戒めて之を遣る。藤吉乃ち識る所の者を招聚す。壘兵凡そ三千可り、敵、誘出して之を陥れんと欲し、輕卒を以て戦を挑む。藤吉肯て出でず。即夜、其の衆を聚め、議して曰く、「敵必ず疲れたらん。且つ我を以て怯と爲し、復備へを設けざらん。襲ひて破るべきなり」と。乃ち小六等をして、數十人を以て敵城を襲はしむ。戒めて曰く、「敵をして我が壘に尾入せしむること莫れ」と。大炊曰く、「公憂ふる勿れ。門を開き、二三人を容るべくして以て之を待て。臣請ふ、殿せん」と。藤吉曰、「前言は主公の意を以てするのみ。危道を行はずば、以て大功を爲す莫けん。自ら固くして士を棄つるは、吾が爲さざる所なり。公等之を勉めよ」と。衆踊躍して出づ。頃くして邑中火起り、大に轟し。藤吉、又、兵を遣して之を援く。衆、大に獲て至る。乃ち首虜を信長に效す。信長、藤吉に一旗を賜ひ、壘傍に就きて、三千貫を賜ふ。名を命じて秀吉と曰ふ。

信長は今川氏に勝つて尾張を平定したので、西の方美濃の齋藤氏を攻めて居た。洲股河を渡つて度々戦争をしたけれども成功しなかつた。そこで河の向ふ側に堡壘を築いて、一將をもつてそれを守らせようとした。しかし諸將は皆その危険であることを思つて、敢て當るものがなかつた。そこで信長は密に藤吉に謀つて見た。藤吉が答へて言ふのに「孤壘は敵地に突入してゐますので、我が兵は誰も行くことを欲するものはないでせう。又、假令行つたとしても、その地形の險しいか、否かを諳んじて居なければ、必ず一敗し、再び行くものはないと思ひます。だからその土地に住んでゐるものを用ふるのが一番いゝと思ふ。私は嘗て美濃に居たことがあり、その豪俠や大盜を知つて居ります。これを我が軍に誘ひ用ひるに、如くはないと思ひます。」と言つて蜂須賀小六、稲田大炊、梶原隼人、青山新七以下六十餘人の名を擧げた。

ヒットラーは勇敢に進むやうであるが、ウクライナに入る時には、ウクライナの同志が居る。さうして自分の分らないことは何事も人に聽く。どうも日本にはそれが盲く行かぬやうである。殊に役人様は人民が賢いことを賞めてはくれずに、却つて怒りつける。その地位にあらざるものが餘計なことを言ふ、怪しからんと言ふ。衆智を集め、大衆の勢を利用して事をやらないから、社會が火の消えたやうになるのである。信長は「俺もそんな者どもが居ることは知つて居たが、一體誰が彼等を率ゐるだらう」と言つた。すると藤吉は「どうぞ自分をそれに當らして下さい。」といふので、信長もこれを許した。九年の九月、兵を派して壘を築かした。敵將は近くの村を守つてゐる八千人をしてこれを妨碍せしめたので、我が兵は一方では戦ひ、一方では堡壘を築く、といふやうにして數日の中に造つてしまつた。そこで信長は藤吉に鎧をつけて武装して居る正規兵五百を授けた。其の上藤吉自身で知つてゐる者を招き集めたので、堡壘を守る兵士は合計三千にもなつた。敵は誘ひ出してこれを陥れやうとして、輕装した兵隊で挑戦して來たが、藤吉は中々計略に引掛らなかつ

た。その夜藤吉は諸將を集めて會議を開いて言ふのに「今敵は慥かに疲れてゐるであらう。又我が方を卑怯だと思つて防備を設けてゐないであらう。今こそ出で、打ち破るべきだ」と言つて、小六等數千人の者に敵の城を襲ふことを命じ、なほ城に歸つて來る時、敵が我が壘の中につけ入つて來ないやうにしろと注意を與へた。大炊は「大將心配ありません。門は二三人が入れる位に狭く開けて置いて下さい。私が殿になつて歸つて來ますから」と言ふ。そこで藤吉は「前に自重せよと言つたのは御主人公の意思を傳へたのである。抑々危険を冒さなければ大功は立てられるものではない、自分だけ安全地帯を固めて居て、部下を犠牲にするなど自分の欲しない所である、俺もやる。お前達さあ大にやつて呉れ」と言つた。皆の者は大に喜び踊り出して行つた。暫くすると村の中に火事が起つて大變喧しくなつて來たので、藤吉は機會は熟せりとして、更に兵隊を出してこれを援けた。それで皆のものは大勝して歸つて來た。そこで信長の所にそれらの首と捕虜とを持つて行つたので、信長

も大いに喜び、藤吉に一つの旗を與へて堡壘の傍に立てさせ、三千石を與へた上、秀吉といふ名前をつけた。

盗人にも仁義がある。智仁勇一つ缺けても泥棒にはなれない。智仁勇といふのはどういふことかといふと、この屋敷のどこに金があるとか、どの邊に中庭があるとかいふことが一瞬にして分る、これが智である。泥棒に仁義があるか、仁は無論ある。取つたものを公平に分けるのが仁だ。それから屋敷に踏み込む時には先んじ、逃げる時は一番あとから逃げる。これが勇だ。これだけの資格がなければ泥棒の親分にはなれない。蜂須賀小六、稻田大炊など、藤吉が大將になつて來たのを見て、何だ昔俺等の使つて居つたものではないか。今では偉い顔をして居るが、きつと臆病であらうと思つて居る所へ、お前は向うの城を攻撃して來い。しかし歸つて來る時は、敵に追尾されてはいかんぞと言ふのであるから、愈々臆病だと思つて、大將、心配はない。門の入口を二三人しか入れないやうにして置きなさい。私が殿になつて

歸つて來ますからと言ふ。そこで藤吉は、今言つたのは御主人公の言葉である。危道を行はざれば、大功をなす能はず、俺は一身の安危など考へない。夙に覺悟をして居るといふのである。果せるかな、潮合を見て更に援兵まで出して居る。秀吉は智慧ばかりではない。大いに勇氣がある。秀吉は正に天成の英雄である。

美濃の豪傑大澤某、宇留間城に據る。信長の患ふる所たり、秀吉、計を以て之を降し、携へて信長に調す。信長大に喜び、其の夜密に秀吉を召して曰く、「大澤は叛服必ず可からず速かに之を殺すに若かず」と。對へて曰く、「叛かば則ち之を誅せんのみ。今にして之を殺さば復來る者無からん」と。聽かず。秀吉、舍に歸り、刀を佩びずして、大澤を召して曰く、「吾、子の身に於て安んぜる所あり。子、第速かに亡げよ。吾、子の爲めに留りて質と爲らん」と。大澤即ち亡げ去る。諸豪傑之を聞きて、多く秀吉に屬せんと題ふ。竹中重治といふ者、奇計を好む。齋藤氏に従ひて遇せられず、亦來り屬す。

美濃の豪傑大澤某が宇留間城に頑張つて居たので、信長はいつもそれが氣掛りで心配してをつた。秀吉は武力で取らないで、計略をもつて降參させ、大澤を連れて信長に面會させた。信長は大いに喜んだ。その晩こつそりと秀吉を呼んで「大澤は又いつ叛くか分らないから、速くこれを殺したはうがい」と言つた。秀吉は「叛いたら其場合殺せばいいのです。今彼を殺したならば、もう他の者は降參して來る者がなくなるでせう。」と言つた。しかし信長は聽かない。秀吉は家に歸つて、刀を佩びないで大澤の前に出で、「折角お前を降參させたけれども、俺はお前の一身を保護し切れないから早く逃げてしまへ。その替り俺はお前のために人質になつて留つてをるから」といつて、大澤を逃がしてしまつた。これを聞いた天下の豪傑どもは、秀吉に仕へたいと願ふやうになつて來た。竹中重治といふ者が居たが、彼は危計に巧みなる謀將である。併し齋藤氏に重く用ひられないので、遂に秀吉に仕へるやうになつた。



大將のよつて立つ所は信義でなくてはならない。秀吉のやり方はいつもさうである、薩摩征伐の時の秀吉の島津に對する態度が非常に寛大であつたために、大變島津家を感激させてゐる。又西郷さんの東北征伐の時もさうである。敵も味方もない。抵抗すれば飽まで敵としてやつつけるけれども、やつつけたあとはこれを敵として扱はない。こちらが一の力を持つてゐる際、敵を潰さず其の一の力を取れば二になる、こちらが三の時、三の敵を潰してしまへば、元の木阿彌だが、それをこちらへ取れば六になる。秀吉の攻略には天下を我が物にしようといふ大きな襟度があつた。中庸といふ本には智仁勇といふことを言つて居る。所が孫子の兵法には、智仁勇だけではいけない。平時にはそれでいゝけれども、戦時に於ては信と嚴が在る。孫子の兵法は、智仁勇嚴信である。信といふのは、秀吉が大澤を自分の命にかけても助けてやつたやうなことである。又部下が功名を樹てれば、必ずこれを賞するといふやうなことである。嚴は嚴しい。號令嚴命で、間違へば叩き斬つてしまふとい

ふやうなことである。それを秀吉は兵法の書物を讀まずして、實生活の中から體驗してゐる。

私は秀吉を餘程の天才であると思ふ。今度の歐洲大戰でも、ドイツがウクライナを取り、コーカサスをとり、モスコから赤色ロシアを叩き出して、あとはどこでケリがつくかといふと、それはヒットラーがこれを如何なる襟度と、手腕とで處分するかと云ふことで決するのである。アメリカ人のユダヤ的計算によると、ドイツがコーカサスを取つても、これまでロシアから供給を受けて居た以上の石油を取るにはあと二年間は掛らねばならぬ。又ウクライナで土地を耕して穀物を穫り入れやうとするには、百姓に協力させなければならぬ。今度ドイツが飽なき要求をウクライナに強制すれば、百姓はだんだん騒ぐやうになる。窮乏すればバルチザンが必ず猖獗を極めて來ると、こんな觀察を下して居る。成る程取つた領土が役に立つか否かは、政治的能力によるのである。

兵隊を廣い意味での警備に使へば戦争には弱くなる。警備は戦争ではない。兵隊を警察官のやうに使つてをれば、警察官より餘計墮落する。兵隊政治は墮落政治になる。さうすると平和確保の能力を失つて来る。ヒットラーは廣大なる占領地域に守備兵を置くと、戦闘力が弱くなるといふことを知つてゐる。だから兵隊には政治に干與させないで、隔離せる起點に集結させて置いて、間違つたならばいつでも叩きつける、準備をして置くといふやり方である。秀吉は昔の手下であつた土賊の親分でも利用する。歸順するなら相當危険な大澤某のやうな豪傑でも、之を呑み込んでしまふ。併し斯くの如き者に對しても、信義を全うする爲には、自分の命をかけるのである。秀吉は必要に應じて電撃戦もやる。併し敵を叩く時には叩いて、あとは殺すより、如何にして之を使はうかと考へて居る。

今日秀吉のやうな男が居たならば、英雄的計略の下に、大いに活人剣を用ふるであらうと思ふ。彼は天成の軍人であるが、又天成の政治家である。而して何れの方面に其才を發揮するにしても、其の根柢をなすものは、彼の性格の好さである。性格は戦略をも政治をも決定するのである。大澤某に對する態度の如き、謀略班の將校も大いに味はうべきでないか。秀吉を講ずるに當り、「藤吉出仕」と云ふ一節を設けたのは、外史にそんな一節があるのではない。微踐より踏み出した、英雄の第一歩を叙述せんが爲め、私が勝手に抄録し、勝手に見出しをつけたのである。

### 歴史を讀む態度

秀吉は日本の武將として、又政治家として、或る意味に於ては殆ど唯一の世界的關聯を有する輪廓の大きな英雄である。而もその偉大なる輪廓の中に、日本人そのもの、長所を發揮し、短所も發揮し、長短共に日本人の氣に入る人物である。日本精神なるものが、この學ばざる、書物の上でつちあげられざる、理論に依つてこれ廻

されざる、自然其儘の人格によりて遺憾なく表現されてゐる。私は諸君と共に日本精神の眞髓を會得せんが爲、この日本の英雄秀吉をかり來りて講釋を進めたいと思ふ。秀吉の本質をつきつめると、彼は非常に眞直な麗しき性情の持ち主である。その性情の自然より發する彼の行動、それを天下無双の山陽の靈筆に依つて書綴つて貰つたのを私が講釋する次第である。つまり諸君と私と此の修養道場に膝つき合せて大に話したいが、その話の題材を豊臣秀吉に求め、山陽先生を助手としてと云ふと濟まないけれども吾々の談論を進めたいと思ふ。

最初に秀吉の出身、身を立てる最初からのことを話したが、秀吉は貧乏人から育つて寺の小僧となり、町家の丁稚となり、轉々として職を變へ、遂には宿なしとなり、矢矧の橋の上に寝て居つて、土賊の蜂須賀小六に見出されて、泥棒の弟子になつたこともある。それから遠江の國まで流れて行つて、今川義元の部下である、松下嘉兵衛の下僕となり、更にそこを捨て、信長の草履取となり、次々に世の中を流轉して

居る。併し此の流離困頓の生活の内容を覗いて見ると、彼は常に燃ゆるが如き向上心を抱き、それが時代に對する憤懣となり、失業となり、轉業となり、放浪となるのである。彼はこんな生活に幾度か打のめされ、幾度か誘惑に掛るやうな境地に置かるゝが、そこに彼が一片耿々の心、常に底光りを失はず、彼が持つて生れた潤達なる精神は、泥中にありても汚されざる蓮の花の如く、あらゆる世路の辛酸を嘗めながら益々其の玉質に磨きをかけて行つた趣きがある。彼の地金が好かつた、彼の境遇は、彼の地金を鍛鍊して百鍊の精鐵となしたのである。

私は何遍も言ふことであるが、日本刀は精銳無比、殊に古刀の切味は、どんないゝ西洋の刃物を持つて來ても及ばない。研究好きのドイツ人がどうして日本刀はそんなに切れるだらうかと思つて、日本刀を横に斷ち切り、縦に斷ち切り、あらゆる断面を顯微鏡に掛けて調べて見たさうである。そうすると古備前のいゝ刀になると、鐵の層が四十萬枚とか六十萬枚とかになつてゐるのである。それは一本の鐵を火に

入れて吹子に掛けて赤熱し、これを金床の上で二つに折り重ねて、鐵槌で引つばたく、さうしてこれを水に投ずる。それを再び又火に入れて吹子で吹く。そこで鐵は再び灼熱する。今度はそれを更に二つに折り、重ねて鐵槌で鍛ひあげる。そこで鐵の層は四枚となるのである。それを火に入れる。又々折り重ねて鍛ふ、そこで鐵層は八枚となる。それから次に十六枚、三十二、六十四、百二十八枚といふ風に段々鍛つて行く、それが三百、五百、千、二千と倍加して行くので、遂には四十萬枚の鐵層を成すに至るのである。それまで鍛ひあげる間には鐵は火に入れられる、金床の上で叫ばれる、水を潜る。この刀を鍛ふ人が槌を振ふ際に、一遍でも手元が狂ふと、刀の出來が宜しくない。刀の肌は何處か悪い所が出て来る。四十何萬枚、或は六十何萬枚の鐵層を叩き上げるまで、一つの槌の打ち方にも丹精をこめねばならぬ。一度打ち下す槌にも魂が籠らねばそれだけ刀の出來が悪い。

併も槌を打ち下すのは人である。それ故に名匠は精神を鍛ふ爲に精進潔齋する、

心を清め身を潔める。さうして打ち下す槌に精魂を打ち込む。それで初めて百鍊の精鐵となり、三尺の秋水となる。日本刀は物心一如の典型的藝術品である。私は刀を鍛ふ秘訣は人間の修養にも當て箴め得ると思ふ。諸君の心身を鍛ふものは實社會の辛苦艱難の鐵槌であつて、それは實に無情冷酷のものである。

名刀を鍛ふ場合には名匠が精神をこめて親切に鐵槌を打ち下してくれるが、社會の鐵槌には親切がないどころか、思ひ遣りすらもない。諸君の方で刃を鍛ふ名匠の精神と、鍛はれる鐵の覺悟とを兼ね備へなければならぬ。諸君は火を潜り、水を潜り、鐵床の上で叩かれねばならぬ。諸君は熱情を以て心身を灼熱させ、社會の冷酷なる鐵槌を眞ともに受けねばならぬ。灼熱せぬ鐵は、鐵槌で打たれると碎けるやうに熱情なき青年は困難に直面して、修養の經驗を積むことは出來ぬ。たぎりたつ情熱素直なる心、實社會の幾辛酸を嘗めながら、益々堅剛の志を抱き、從容として環境を克服し得る者のみが有爲の人材となり得るのである。

實戦の場数を踏み體驗を積み、其の心身が數十萬枚の鐵層になるまで鍛ひあげると、始めて人觸るれば人を斬り、馬觸るれば馬を斬るの利器となるのである。否唯徒らに斬れるばかりでなく、眞の名刀の如く姿から、煮えから、にほひから、何とも云へぬ尊き氣品を備ふるに至るのである。人間も此處まで鍛ひあぐれば眞の達人である。人間の品格とか、識見とか、切味とか、才能とか、總ては千辛萬苦の中に修練大成されるものである。天性偉いだけでは、ほんとのものにならない。當代の秀吉とも謂はるべき獨逸のヒットラア總統は何と言つて居るか。

「私が不屈の人間となつたこと、また將來ともに不屈であり得ること、それはこの時代の賜物である。而もそれにも増して尙ほ當時に感謝することは、この時代が私を安樂な生活の空虚から引離して呉れたこと、優しき母の甘へつ子をその軟らかき褥から引下し、新たに悲痛といふ夫人を母として與へて呉れたこと、厭がつて逃れようとする者を、敢へて艱難と貧困の中に投げ込み、而して後年彼れがその爲に戦

はねばならぬ所のものを教へて呉れたことであつた。」

とはマイン・キャンプの中で、轟々と胸に迫る文句である。十三歳にして父を失ひ、それから二年後には更に母を失つたヒットラアは、十五歳か十六歳かの身を以て、「手には着物や下着類を詰めた行李を下げ、胸には不動の決意を秘めて」單身ウインに出かけて行つた姿は、秀吉の生ひ立ちに似通ふものがある。

秀吉は天才であらう。併し此の天才を物にしたのは、卑賤に生れて世路の艱難に揉まれねばならなかつた彼れの境遇である。彼は流轉生活の間、甚しきは土賊の乾分にさへ成りさがつた。彼は乾分であつたか、召使であつたか知らぬが、確かに蜂須賀小六の身内であつた。由來大名の仲間部屋などは博奕を打つ、酒を飲む、遊びに出かける、あらゆる下司なことをやる修羅場である。大名の仲間部屋でさへそれである。況んや土賊の若者部屋に至つては、其の光景想像に餘るものがある。彼は年少にしてこんな環境の中に抛り込まれたのである。彼は其の中にあつて、別に屈

托もしなかつたであらうが、先天的に純なる彼の氣持は中々そんなものに同化されない。泥の中からでも榮養は取るが、それから抜け出でて蓮の花の如く眞面目を發揮する。

太閤秀吉は陣に臨んでは神出鬼没、信長に仕へては一を聞いて十を知る叡智の働きがあつた。これは懸命に努力精進する者でなければ、さうは行かぬ。仲間部屋で博奕に夜を更かしたり、酔いしれたりして居るやうでは、こんな藝當は覺束ない。人間は現前の刻一刻が全生命であり、修養の活舞臺である。あらゆる環境に對して最善を盡し、全生命を躍動せしめながら、其の精神の最高峯に於て死ぬ人が偉人である。

西郷隆盛が城山で死なれた時、彼の心境は生涯の中の最高頂に達して居つた。キリストは十字架に懸けられて息が絶える時、人と神との境を突破して神になつた。これではなければ英雄ぢやない。聖人でもない。一度び英雄の功績を顯はした人もそ

の英雄的心境が維持されなくなつた時には、もうそれは英雄の墮落である。聖人が偽善者に墮落するのも其刹那である。世の中には往々にして精神の方が先に死んでしまつて、肉體の生命と世間の虚名だけが、残つて居る人もある。拮据經營して金が出来ると、其の刹那にがっかりして、墮落する人もある。勤勉努力して高官に上りそれで安心して生きた死骸となつて居る人もある。それではいかぬ。人間は精神活動の最高頂に達した時に死にたいものである。

秀吉は天成の英雄であり、其の年少にして努力するや、其の精神は最高頂に張切つて居つたが、功成り名遂げたる際には、一面に於てやはり成上りのやうな他愛なさがある。書物を讀まずして奮闘努力の間、自然に人生を達觀したやうな趣があるのは、彼の自然の面白さがあるが、勉年には修養なき匹夫に見るが如く、幾らか心身の緩みがあつたのではなからうか。併し彼は決して最後の瞬間に至るまで、小説に書かれたやうな附甲斐ない男ではなかつた。

十萬の大軍を大陸に送りながら、其の責任者が随分贅澤三昧をやつて花見の宴を催して狂態を演じたやうなことも歴史に傳はつてゐる。併し、實情を調べて見ると、醍醐の花見も一篇の哀史である。朝鮮征伐が行詰つて、徒らに兵を引けば、彼に逆襲さるゝ虞れさへあつた。その日本の行詰つた状況を敵に知らさない爲に、あの豪華な花見をやつたのである。一杯の酒を飲むのは、一杯の苦汁を嘗めるよりも、辛かつたらう。三月に醍醐の花見を催したが、四月には朝鮮の兵を引上げて居る。さうして五月には不起の病に打臥したのある。斯くて、八月には果かなく死んだのである。

英雄の傳記は身を其の境地に置きて其の行間を読み下す時、大概は血ににじむやうな悲劇である。悲劇の主人公が居城たる伏見で息を引取る時、最後に残した言葉は『十萬の將兵をして、大陸の鬼とならしむること勿れ』といふのであつて、其の國內の後圖を指示せし言葉と共に、責任感に溢れて居る。自然的英雄秀吉の生活の

中には、日本人らしき長所と短所とが躍動して居つて、その自然の味はひを味はへば、自づから日本精神を味得ることが出来るでないか。

私は秀吉を講ずることは、餘り理窟に流れざる日本精神の涵養法だと信ずる者である。頼山陽の秀吉を讀んで居ると、自然に浸込み來る日本人らしさを感じる次第である。青年諸君は少し調子を下げると、何時の間にか自然に世の中の悪い風に浸込んでしまふが、そこに一寸引き締めて志を起し、靜かに書物を読み、古人の言を味はへば、自然に諸君の品性と情操とを潤ほすものがあるのである。

外史の文章は實にうまい。このうまい味はひは講釋しても會得出來ない。さあ、この前もやつた通り、一緒に高聲でお經を讀むやうに調子を揃へて讀んだ方がよい。少くとも聲を出して居れば睡くならない。唯深呼吸するよりも何か覺えるだけは確かによい。讀んで居る中に、自ら山陽の筆の潤ほひに、涵養される所があるだらうと思ふ。前置はその位にして次に進む。

## 桐號瓢表

秀吉、桐を以て號と爲し、金瓢を以て馬表と爲す。一捷毎に一瓢を加ふ。曰く、「吾必ず積みて千に至らん」と。因りて千瓢と稱す。織田氏の軍を出すや、桐號瓢表、敵望みて之を避く前後、封を加へられて、總て三十二萬石、秀吉、私に其の謀臣と議して曰く、「主公は、外優裕にして内猜吝なり。吾大封を受けば、必ず終を保つこと能はず」と。因りて從容として信長に白して曰く、「臣敢て請ふ、二郎を養ひて子と爲し、之に讓るに臣の祿を以てせん」と。信長喜び、因りて問ひて曰く、「汝の祿は如何」と曰く、「君、臣に西征を命ぜば、西國の二三州、日を指して取るべし。取らば輒ち君に獻じ、臣は其の餘りを請はんのみ」と。信長乃ち其の少子秀勝を以て、秀吉の養子と爲す。

秀吉は桐を紋所とし、金箔を塗つた瓢箪を馬表とした。一度、戦ひに勝つ度にそ

の瓢箪を一つ加へた。さうして「自分はきつと千まで増さう」と言つた。それで千成瓢箪といはるゝに至つた。織田氏が軍隊を出す毎に、桐の紋所に瓢箪の馬表といへば、敵は望み見れ、恐れてこれを避けた。かくて前後、封を加へて二十二萬石取るやうになつた。秀吉はひそかに竹中などの謀臣と、相談して「殿様は表面は如何にもゆつたりとして心廣く見えるが、内心は疑ひ深く吝嗇である。然るに自分はこんな大きな封土を得てゐる。きつと一生無事で終ることは出来ない」と言つた。或る時落ちついた貌で信長に申上げた。「私は是非御願ひ致したいことがあります。次郎君を養子にして、私の祿を譲りたいと思ひます」と。信長は非常に喜んで問ふには「お前の祿はどうするのか」と。すると秀吉は「殿が私に西國征伐をお命じになれば、西國の二つ三つの國は、日限を切つて取ることが出来ます。取りましたならば、早速殿に献上し、私はその餘りを戴きます」と言つた。そこで信長は秀勝を秀吉の養子とした。



中々秀吉は大志を持つてゐるから、二十二萬石ぐらゐを子孫に傳へようなどとは思つてゐない。主人の懐加減を察し、氣持も考へて其の知行を信長の子に差し上げませうと言ひ出したのである。無慾なりと言ふよりは、其の志非凡なりと云ふべきである。月給が朋輩よりも十圓安いと言ふて憤慨するやうな連中とは人間の輪廓が違ふのである。

是の時に當り、毛利輝元、山陽、山陰十餘州に割據し、浮田直家、備前、美作を以て之に附く。播磨の人赤松義祐、別所長治、小寺政職等、其の兵を被るを恐れて、款を織田氏に送る。政職の使者黒田孝高、器略有り。秀吉に因りて毛利氏の撃つべき狀を説きて曰く、「臣請ふ、之が郷導を爲さん」と。秀吉、具に之を信長に語る。信長、終に意を決して西征す。五年、秀吉を以て征西大將と爲し、播磨を取りて自ら封ぜしむ。十月、秀吉入りて辭す。信長、授くるに

記職を以てし、曰く、「功成らば、則ち中國を擧げて汝に予へん。汝遂に進みて九州を取れ。其の援師の如きは、當に請に依りて之を遣すべし」と。秀吉、拜して對へて曰く、「君、臣が鄙陋を捨てず、勳奮の諸將を舍きて、大任を臣に命ず。臣敢て力を竭さざらんや。臣、記職の賜を辱くす。是れ君、臣をして專制を得しむるなり。叛くを討ち服するを撫で、機に臨み變を制して、中國を定めんこと、臣の度内に在るのみ。君の近臣森、矢部、福富の諸人、功を積み勞を累ぬれども、未だ報する所有らず。中國已に定らば、願はくは以て此の輩を封ぜよ。臣は則ち直ちに進み、勢に乗じて遂に九州を下さん。九州下らば、則ち願はくは其の一歳の入を賜へ、糧仗を蓄へ、舟艦を造り、海を濟りて朝鮮に入らん。君、臣の功を賞せんと欲せば、願はくは朝鮮を以て請ふことを爲さん。臣乃ち朝鮮の兵を用ひ、以て明に入らん。庶幾はくは君の威靈に倚り、明國を席卷し、三國を合せて一と爲さん。是れ臣の宿志なり」と。信長笑ひて曰く、「秀吉又復大言するか」と遂に便宜、事に從ふを許す。

この時毛利輝元は山陽、山陰の十餘ヶ國に割據し、浮田直家は備前、美作をもつ

て輝元について居た。播磨の人赤松義祐、別所長治、小寺政職が輝元に攻められることを恐れて織田氏に款を通じて居た。政職の使者黒田孝高は中々器量があつて、策略に長じて居た。黒田家はこゝでも明白であるやうに播磨の出である。筑前の黒田家でも播州さむらひと云へば幅が利けたさうである。私の家は士族と士族との中間ぐらゐの輕輩の家であつたが、それでも祖父などは俺のうちは播州からの隨身である威張つて聞かせてゐた。

此の黒田孝高即ち如水は秀吉に願つて、毛利氏撃つべしとの策を献じ、「私にどうぞ道案内をさせて貰ひたい」と言つた。そこで秀吉は詳しくこれを取次いで話したので、信長も終に決心して、西のかた毛利氏を征することに成つた。天正五年、信長は秀吉を征西大將として、播磨を取つて秀吉自分の領地とすることを命じた。十月に秀吉は信長の所に行つて暇乞をした。信長自分の紋所について居る職を授けて「うまく成功したならば中國を擧げて全部その方に與へよう。さうしてなほ進ん

で九州を取れ、援兵はお前が請求すれば幾らでも出してやる」と言つた。

秀吉は有難く拜して答へて言ふには「殿は私の身分の卑しいのにも拘らず、他の舊い勲功ある大將を差し置いて、この大任を私にお命じ下さいました。私はどうしてあるつたけの力を盡さないでゐられませうか。私は御紋所の入つた幟を戴きました。これは詰り私に大將としての専制の權を與へて戴いたものと思ひます。そこで叛く者は征伐し、服従する者は愛撫し、臨機應變に事を處理して行くのは私の胸三寸にあり。殿の近臣たる森、矢部、福富などといふ人には、功勞を重ねてゐながら、まだその勞が酬いられて居ないやうであります。若し中國が平定致しましたならば、どうぞその地をそれらの人々に與へて下さい。私は更に勢に乗じて九州に下ります。九州が降参しましたら、どうぞその時は一年分の歳入を私に下さい。私はそれで武器兵糧を蓄へ、軍艦を作り、海を渡つて朝鮮に攻め入ります。殿が私の功勞をお賞め下さるならば、どうぞ朝鮮を下さるやうにお願い致します。私はそこで

朝鮮の兵を用ひて明に攻め入ります。冀くば殷の御威光によつて明國を席捲し、日本、支那、朝鮮の三國を合せて一つと致しませう。これが私の年來の志であります」と言つた。

そこで信長も笑つて「秀吉は又例の大言壯語するのか」と言つた。そこで一々信長に伺ひ立て、仕事をせずとも、便宜に従つて處理をすることを許した。

北支事變に手を下す時には、上海、南京の攻略を覺悟してかゝらねばならぬ。日支事變を根本的に解決せんと欲せば、米英の心臓を刺さねばならぬ。秀吉の眼光が大東亞に徹し、其の經綸が泉の湧くが如くなること、實に英雄の英雄たる所以でないか。

秀吉、五歳を以て五國を定む。十二月、安土に赴きて、即夜信長に謁す。信長呼びて之を前め、其の面を撫して曰く、「汝の面目、昔日の藤吉に非ず。明日、我且に客禮を以て汝を饗せん

とす」と。且日、秀吉、寶刀一、鞍馬百、土物五千を獻す。布旅して地を蔽へり、信長、城樓より之を視、欣然として左右に謂ひて曰く、「此れ大膽藤吉の獻する所の者か」と。饗して之を遣る。

秀吉は五年間で丹羽、但馬、因播、播磨、攝津の五國を平定した。天正九年二月安土に行つて、直ぐその晩信長に謁見した。信長は「さあ、こつちに來い」と言つて前に進ませ、その顔を撫でながら「お前の顔はもう昔の藤吉ではない。明日は客分の禮でもつてお前に御馳走をしよう」と言つた。翌朝、秀吉は寶刀一振、鞍を置いた馬百頭、土地の名産五千品を献上し、それを地上一ぱいに陳列した。(布は敷く旅は陳べるである。)信長は城の櫓からそれを見下し、上機嫌で、左右の近臣に伺つて「これは大膽な藤吉の献上品か、さても大したものだ」と言つて厚くもてなして遣した。

秀吉は抵抗すればやつけたし、降参すれば愛撫した。さうして土地を取れば人に與へた。中國を取れば仲間の爲めに之を請ひ求め、日本を統一すれば朝鮮、朝鮮を征服すれば明、明を統一すればそれを献上し、天竺から世界に經綸を進めると云ふのが大膽藤吉の理想であつた。三略の一節に曰く「城を獲れば之を割き、地を獲れば之を裂き、財を獲れば之を散ず、……、得て而して有する勿れ、居りて而して守る勿れ、拔て而して久しうする勿れ、立て、而して取る勿れ、爲す者は則ち己れ、有する者は則ち士、焉んぞ利の在る所を知らん。彼は諸侯たり。己れは天子たり。城をして自ら保たしめ、士をして自ら處せしむ。」と。どうも老子の處世哲學のやうにもあるが、「うしはく」ことなくして「しらし」給ふ皇道世界理念に似通ふものがある。

城を攻め取つても土地を占領しても、其の處分を降参した敵に任せてやる。財寶を取つたなら、分配して人々を賑はしてやる。皇軍の將帥はそのぐらゐの氣持がな

くては國を盛んにすることは出来ない。支那事變でも領土はいらない、償金はいらなといふのは、金や土地よりも更に人心を擧げて之を取らうと云ふのである。ヒットラー總統も同じやうなことを言つて居る。ウクライナはウクライナの民俗に従つて治めさせる。占領地帯はドイツの優越權の下に、各々人民をして塔に安んぜしめると。これは秀吉の遣り口と同一である。そこで三略は曰く、物を得ても自分のものにするな。城を取つても消極的に之を守ること考へるな。敵の城を抜いたならば、自分で其城を守るより、守るに足る人物をして之を守らしめよ。自分の方が力の主體である。

人から立て、貰つた者は、立て、やつた者の從屬物である。他人の力で立て、貰つてゐるのだから、其の力に奉仕する爲に最善を盡さねばならぬ。有する者は被委託者であり、それを支配してゐるものは自分である。利益から言へばどちらにあるか解らない。貰つた方が有難いか、支配してゐる方が有難いか、吝ちくしなくて

も利のある所はよく分つてゐる。城を貰つたり、金を貰つたりするものは諸侯であるが、それをやるほうは天子である。大東亞共榮圈の建設も、此の氣持でやらねばならぬ。米英勢力を一掃し、大東亞の全地域に、民衆をして各々處を得しむるは皇道の偉大なる所以である。

天下を制するものは、各々の人に安堵をさせなければならぬ。吝ちな了見では天下を統一することは出来ない。これは兵法の書物にあるのであるが、秀吉は書物は讀まないであらうが同じやうなことを言つて居る。秀吉は天性の兵法家であり、英雄である。

### 秀吉君讐を報ず

初め光秀、事を以て怨望す。是に至りて、亦往くを欲せず。信長迫りて之を遣り、丹波に歸り

兵を治めて西せしむ。是の時に當り、高松城の水に漸されざること數尺、東西の軍相去ること百歩可り、毛利氏、東軍大舉して且に至らんとすと聞き、遂に使をして和を議せしむ。秀吉未だ之を許さざるなり。六月、人有り、京都の使者と稱し、馳せて軍門に入る、秀吉之を覽るに、知る所の宗仁といふ者の變報するなり。曰く、「光秀反し、丹波の兵を以て、右府を本能寺に攻めて之を弑す」と。右府とは信長なり。秀吉、大に驚く。而れども未だ宣言せず。明日、數十騎を率ゐて堤防を巡視す。是の日、城陥り、城將は自殺す。而して毛利氏、猶ほ軍を張りて去らず。明日、使者を遣し、來りて前議を治めしむ。秀吉、之を卸けて曰く、「當に明日を俟ちて之を議すべし」と。明日使者復至る。秀吉、自ら度るに、「事終に泄れん。我より之を發するに若かず」と。乃ち具に使者に告ぐるに變故を以てし、返り報せしめて曰く、「事已に此に至る。公等、猶ほ我と和するか。若し我を撃たんと欲せば、則ち今日に若くは莫し。公等、徐に之を計れ」と。

初め光秀は事を以て怨みを抱きながら形勢を觀望して居つた。これは前にもある

通り信長の光秀に對する仕打が餘り苛酷であつた。信長は宴席で光秀に酒を強ひて、光秀に飲むことが出来ない、大に怒つて其の頭をなぐりつけ、人の前で引摺り倒した。又或時は光秀が好まざるにも拘らず徳川家康に對する饗應係を申付けて光秀の自負心を傷くるのみか、その御馳走の仕方が悪いと言つて嚴しく叱責した。これ等の話は別としても、光秀は色々なことで豫て大に信長を怨んで居る。そこで茲に至つて亦往くことを欲しない。往くといふのは何處へ行くのかと言へば、秀吉の援兵として中國征伐に行くことである。秀吉は信長に對し中國征伐の援兵を求めて居る。そこで信長は光秀に命令して援兵を出させやうといふのである。

これも考へやうによつては光秀の軍を秀吉に参加せしめ、其の支配下に置くやうなことで大に光秀の憤懣を長じたのである。併し信長は光秀を援兵に出して、自分も亦秀吉援助の爲出かけて行かうといふ積りであつた。そこで信長は進んで本能寺に陣したが、中國に出征すべき筈の光秀が急に變心して、京都に乗りこみ、信長を

本能寺に弑した。そこで文章通りに説明すると、光秀は往くのが厭である。信長が強ひてこれを丹波に歸し兵を治めて、西の方中國征伐に行かせた。

この時に當つて秀吉は高松城の水攻めをやつてゐる。川を絶ち切つて城のぐるりを水にして、高松城の頭が數尺しか出てゐない程水に浸された。かくて敵は段々高い所に追詰められ、軍の相距ること百歩ばかりといふ情勢である。此時毛利氏は東軍が大舉して將に至らんとすと聞き、敵はぬと思つたので使を出して、講和の話をやらせて居つた。秀吉はまだこれを許さないで居る。そこに六月になつて人あり、京師の使者と稱して秀吉の軍門に走り込んで來た。秀吉がこれを見ると、豫て知つて居た宗仁といふ男が變報を持つて來たのである。光秀は謀叛をした。丹波の兵を出して中國には行かずして京都に行き本能寺を攻めて右府を殺したといふのである。右府といふのは信長が右大臣の位を得て居るからである。秀吉は大いに驚いた。併し未だ戰の最中だから信長が殺されたといふことを發表しない。翌る日秀吉は平

氣な顔で數十騎を率ゐて水攻めしてゐる堤防を見廻つた。その日に城が落ちて大將は自殺した。而も毛利氏はなほ軍を張つて去らない。前から講和を申込んで居つた毛利がその翌る日に使者を遣はして、前の話を一つ取極めようとして來た。秀吉はこれを排け明日になつたら相談しやうと答へた。かういふ時にうろたえた所を見せず、わざと落付いて明日相談しようとしたのである。明日使者が又やつて來た。そこで秀吉自ら心で量つて見た。

信長の變事はどうせ何時か洩れるだらう。寧ろ我よりこれを打明けた方がましである。そこで具さに使の者に變事が起つたことを告げて、お前歸つたら毛利にかう言へ、事已に此に至る、あなたの方はなほこんな状態になつても猶ほ行きが、り通りに和睦を欲するか、若し我を撃たうといふならば即ち今日が絶好の機會である。討つならお出でなさい、お相手申さう、和するか戦ふか、利害を考へて御自由になさいと言はした。

使者返り報す。輝元に喜び、諸將に謀る。諸將皆曰く、「我信長と和す。秀吉と和するに非ず。今、信長死す、彼の軍情沮廢し、危疑萌起せん。我此の時に乘じて之を掩撃せば、必ず秀吉を獲ん。最れ天、我が家に幸するなり。失ふ可からず」と。隆景曰く、「吾の見る所は此に異なり。信長の死は、天の我が家に幸するに非ず。乃ち秀吉に幸するなり。何となれば、則ち應仁以來、七道分離し、争亂相踵ぎ、今日に至りて極れり。天將に一豪傑を生じ、以て天下を掃蕩せんとす。吾、秀吉の舉動を視るに、是に非ざるを得んや。信長既に死す。其の子弟將佐、孰か秀吉の右に出づる者ぞ。夫れ和議、外に發し、變故、内に起る。常人をして之に延せしめば、必ず深く其の事を秘して、速かに前議を成さん。今、正しく告げて隠さず。吾の從違に任ず。其の量豈に測るべけんや。吾、人をして其の陣を候視せしむるに、平日に異ならず。今、之と戦はば、我は曲、彼は直、我を讎とすること必ず深からん。敢死して來り戦はば、能く必ず之を獲ることを保せんや。苟も之を獲ずして、其をして脱歸し、異日、雲上龍變せば、我、遺類無からん。吾を以て之を計るに、前約に従ふに若くは莫し。彼、禍難に遭際し、我の約に違はざるを多と

せば、必ず厚く我を遇せん。功名富貴、將に我と共にせんとす。是れ我と彼と慶幸を同じくするなり」と。

そこで使者が秀吉から言はれた通り歸り報じた、すると毛利輝元が非常に喜んで、諸將に評議をさした。その諸將達が皆言ふには、我は信長と和するのだ、秀吉と和するのぢやない、今肝腎の信長が死んで居る。彼の軍情を見ると、士氣沮喪し、危ぶみ疑ふ氣分が萌してゐる。我この時に乗じておつかふせてひつばたくならば、必ず秀吉を討取ることが出来るだらう、これは實に天が我家に幸を下したのである。この機會を失つてはいけないと皆言つた。

そこで智者と言はれる小早川隆景、これは毛利元就の息子の中の末弟である。元就が臨終の際、兄弟を枕邊に集め、兄弟の數だけ矢を束ねて之を折らしめ、兄弟の必要を説いたのは有名な修身訓である。此の隆景が後日朝鮮征伐の時、碧蹄館で一

戦して明の大軍を破つた名將である。彼は群議を斥けて曰く、拙者の見方は少し違つて居る。信長の死せるは天が我家に幸ひしたのでぢやない。これは秀吉に幸ひしたのである。何となれば應仁の亂以來日本の全國七道は互に分離して、争亂が相次いで起り、今日に至つてもう極まる所まで來て居る。かういふ時には天は將に一豪傑を生じ、以て天下の大祓ひをやらせようとして居るのだ。我、秀吉の舉動を見るに彼はまさにこの一豪傑である。そうでないとどうして言へるか。信長が既に死んで信雄、信孝、長益等の子弟達や大將、輔佐の者共、誰か秀吉の右に出るか。秀吉が隨一だ。一體全體、和議が外に發し、而して變故が内に起つて居る。外は和議、内には變故、普通の人間がかういふ機會に臨めば、問題を處理するにはどうするかと言ふと、その事をひた隠しに隠して置いて、敵には言はずに速に前からの和議を成立せしめるだらう。自分の主人の殺されたことを言はずして和議してしまふだらう。然るに今堂々と正しき事實を告げて隠さない。さうして従ふか違ふかこつちの自



由にせよと言つて居る。その器量の大きさはとても測り知ることには出来ぬ。そこで人を遣はして秀吉の陣屋を斥候させて見たが、かゝる危急の場合にも拘らず、平日に異らず陣容整然として居る。今これと戦はば、こつちは約束を違へるのだから曲は我にあつて直は彼にある。彼は非常に我を讐として憎むだらう。そこで必死の勢ひで向ふが来り戦つたならば、よく此方側から秀吉をやつ付けて彼の首を得ることが出来るかどうか。そんなことは保證が付かぬではないか。やり損ふかも知れない。若しとつちめることが出来ないならば彼は逃げて歸つてしまふだらう。歸つたならば彼は常人ぢやない。他日雲を呼び龍となつて現はれ來たなら我は其の仕返しを受け一家遺類なきまでに全滅させられるだらう。自分の考へでこれを計るならば、綺麗さつぱりと前の約束通り媾和する方がよいだらう。彼はこの災禍と困難とに遭つて居る際我の約に違はざるを感謝して、必ず厚く我を待遇するだらう。功名も富貴も特に彼は之を我と共にしようとするだらう。かうなれば我は彼と幸ひを同じうす

ることになるだらう。

これが隆景の主張である。小早川隆景は智將であつて、敵の強さを知り、己れをも知つて居る。こゝは秀吉が主人を失つて居るのだから、こんな者を討つのは武士道ぢやない。又討たうとしても、彼はさる者やり損ふかも知れぬ。隆景は敵の力をよく知つて居る。而して同時に道義をも知つてゐる。

毛利元就の死ぬ時に彼等兄弟を戒めてどうもお前達を見るに賢明ではあるが、天下の器ぢやない。又この中國は以て天下に君臨すべき地の利を得て居ない。決して天下に望を起すな、この立場を守つて最善を盡せといふのが元就の家訓である。小早川隆景は秀吉のやうな英雄ではないが、智勇兼備の名將である。

道義を重んずれば柄にない野望を起さない思慮ある大將であつた。養子の秀秋は關ヶ原の戦争で當然秀吉方であるべき男だが、裏切をして家康方に附いたので、西軍敗北の直接原因を作つた。此の秀秋は秀吉の妻君の北政所の弟の息子である。

隆景は四邊の情勢から勵められて此男を養子にした。隆景は魯鈍な者を養子にするのは小早川の耻になる、これは困つた養子を引受けたものだと言ひた位である。隆景は仲々人を見る明があつた。彼は朝鮮征伐では日本軍の爲に掉尾の大勝を博して居る。明軍の大將李如松が大舉して攻めて來た時、小西行長は砂を噛んでも戦ふと敦閑いたが、小早川は、俺の兵隊はさう無闇に進軍出來ない。碧蹄館あたりに止まつて邀へ撃たう。何故かと言ふと自分の軍隊は砂を噛んでは戦争は出來ぬ。矢張り米を食はにやならぬと。此の言ひ分は小西に比して威勢がわるい。小早川は臆病だとも難ぜられた。然るに果せるかな小西は大敗して、身を以て逃れ、京城の總軍司令部からは全軍退却せよとの命令が出た。然るに小早川は儼然として言うた。自分先般砂を食つては戦は出來ぬと言つたが、失禮ながら自分の軍は米を食つて自信ある陣地に着いて居るから、御命令でも、こゝを退却する譯にはいかぬと。乃ち立花宗義等と共に踏み止まり碧蹄館の一戦をやつた。

全く背水の陣であつて、流石の敵軍を全滅させた。其頃朝鮮征伐は段々下り坂になつて日本の旗色が漸次振はなかつたが、碧蹄館の大勝利は大に日本軍の爲に氣を吐いたのである。

話は本筋にもどるが、此の中國征伐につき、歴史家は色々なことを書いて居る。秀吉は本能寺の變をひた隠しに隠したまゝ、媾和を結んだ。そこで毛利方では媾和を結んで置きながら追撃しようとした所が、小早川がこれを止めたといふことが書いてある。こんな風に種々の異説があるが、私は前後の情勢から判断し秀吉らしく正面から事實を打明けてかゝつたのが本當だらうと思ふ。既に明智光秀は密使を放ちて秀吉を潰さうぢやないかと言つて來て居る。いゝ加減な嘘で胡魔化せるやうな情勢でない。そこで堂々と事實をぶちまけた。

俺は主君を喪うて窮境には立つて居るが、一つ腹と腹との相談をしやうぢやないか。若し背くならムザとはやられぬゾ、といふのが秀吉の面魂である。變事が起つ

ても悠々として豫定の如く數十騎を従へて堤防の巡視をやつて居る。隆景の賢明なる眼で見ると天晴なる秀吉の器量である。こんな男に背いてはいかんといふのが隆景の見識である。そこが名將と凡將との見解の相異である。馬鹿と賢いのは違ふ、中々面白いと思ふ。

輝元、之を然りとし、乃ち質を送りて和を成し、且つ之を弔ふ。是に於て、秀吉、還りて光秀を討たんと欲す。因りて毛利氏に乞ひ、弓銃各々五百、旗三十、騎士一隊を假る、輝元、其の言の如くす。秀吉、諸將士を會し、泣を垂れ之に謂ひて曰く、「吾、右府の恩を受くる、物の比すべき無きは汝が輩の知る所なり。今日、死を致して仇を復するは、吾に非ずして誰ぞ。天下の事、此の一擧に在り。汝が輩、其れ我の爲に之を勉めよ」と。乃ち兵を引きて途に上り、程を兼ねて疾く行き、尼崎に至る。

輝元は初め敵の不幸を喜んだけれども、隆景の言ふことが尤もだといふので行き掛りの如く和議を成立せしめ、その上人質を送つて誠意を示し、敵の不幸に對し、お氣の毒だと言つて弔辭を寄せた。そこで秀吉は歸つて光秀を討たんと欲し、頗る無邪氣に毛利氏に援助まで乞ふて居る。弓、鐵砲各々五百、旗三十、騎士一隊だけ貸して戴きたいと云ふのである。威勢を添へる爲である。旗三十本、音に名高き毛利の旗印は眞に貴重なものだ。毛利、秀吉の聯合軍の如く見せかけるわけである。輝元は直ちに秀吉の言に應じた。

秀吉は諸將士を會して涙を流して言ふに我右府の恩を受けて譬へやうもない。これはお前達のよく知つて居る所だ、今日に至つて命を捨て、仇を復する。俺でなければ誰がやるか、俺が是非やらなければならぬ立場の人間だ。そこで天下のことはこの一擧にしてやつてしまふのだ。お前達は俺の爲に一つしつかりやつて呉れと。即ち兵を率ゐて出發し、二日の道を一日で行く程に急行し、尼崎に馳せつけた。

俗説には此の際に黒田如水が秀吉の肩を叩いて、實に結構なことになりました、あなたに天下が轉げ込んで來ましたと言つたら、秀吉が笑つて黙して居たといふやうなことが書いてある。併しこんなことは途方もない嘘である。黒田孝高（如水）は中國征伐の時に初めて秀吉に従つてその嚮導になつて居る。それが主君を失つたばかりの秀吉に向つて、親方が死んでうまいことになつたと、そんなことを言ふ程おつちよこちよいぢやない。またそんなことを言へる場合でない。これは後人が如水を智者として描き出す爲の嘘である。秀吉もあの場合一生懸命である。我は唯ならぬ右府の恩を受けて居る。俺の外に誰が主君の仇を報じるか、さア行かうと、これは必死の覺悟である。かういふ所が實に秀吉が天真爛漫で綺麗な所がある。

信長の客將たる徳川家康は京都の近くに來て居つたけれども、本能寺の變を聞いて岡崎に歸つてしまつた。信長の老臣柴田勝家は北國で上杉景勝の征伐をやつて居る。此の勝家は信長の爲には恩顧のある大將だから弔ひ合戦をやりたかつたらうけ

れども、北國では邊鄙で地の利が悪い。かれこれ自分の立場を顧慮して兵を出すことが出来なかつた。秀吉も後ろに毛利氏あり、左右には味方の中にも敵ばかりである。然るに矢猛心の一筋に驀地に乗り出し、一先づ自分の居城たる姫路に歸つて軍裝を整へ、尼崎に馳け付けて山崎の合戦で明智光秀をやつつけてしまふまで、十三日しか掛つて居ない。實に迅速である。決斷も早い、動員も早い、行軍も早い。タックは持たないけれども、ドイツの電撃作戦のやうなことをやつて居る。

此の秀吉の戦法はやはり信長から無意識の中に習つて居るのである。秀吉が信長に仕へてまだ微賤の時に有名な桶狭間の合戦に出合つた。信長はあの際熱田から桶狭間まで一舉に馳けつて、勝ちほこつたる今川義元の本陣に殺到して一舉に其の首級をあげた。秀吉はこれに就て餘程感銘が深かつたと見えて、屢々此の手口を學んで居る。

賤ヶ嶽の戦争にも、秀吉は大垣から木之本まで一夜の中に十三里駆けつけて賤ヶ

岳に佐久間盛政をやつつけた。これらは信長の遺鉢を繼いだ戦法である。秀吉は主君たる信長を崇拝して心から畏服して居る。秀吉はどつちかといへば生れ付きの武將ぢやない。草履取りから成り上つた天才なので、戰場だけの駈引では、腹込みの武將たる信長や家康に叶はない。信長は秀吉の爲に重恩の君主であり、又戦争の恩師である。秀吉は信長に對して感激に満ちて居る。信長が死んでもつけの幸ひだと云ふ奴を決して容赦しない筈である。流石に秀吉である。他の大將達が躊躇遂巡して居る時に單騎鞭を擧げて馳せ上つた。本當の英雄でなければ出来ぬ。私はそこに日本人らしい純情と赤誠とを見るのである。

秀吉、使を遣して光秀に告げて曰く、「明日山崎に會戦せん」と。光秀之を諾し、乃ち將士を聚む。其の將齋藤利三、洞嶺に在り。諫めて曰く、「秀吉の大衆新たに来る其の鋒甚だ鋭なり戦はば必ず利無からん。且く之を避け、退きて坂下に入り、以て後圖を爲すに如かず」と光秀

怒りて曰く、「天下右府を視ること、鬼神の如し。吾一撃にして之を獲たり。天下、誰か能く我に敵せん。汝速に來り戦へ。何ぞ藤吉を畏れんや」と。利三已を得ずして來り會す。遂に見兵一萬六千を以て、分ちて六隊と爲し、夜半、雨を冒し桂川を渡りて、山崎に至る。筒井順慶、大和の兵萬人を擧げて、洞嶺に軍し、其の後援を爲す。黎明、秀吉、諸將を統べて至る。高山友祥先鋒となり、中川清秀・池田信輝・丹羽長秀・織田信孝次を以て相屬す。兵各と數千、秀吉自ら騎卒二萬に將として、其の後に居る。已にして兩軍皆陣す。秀吉、北のかた天王山を瞻て、指して左右に謂ひて曰く、「今日の戦、敵をして先づ此を獲しめば、吾が利に非ざるなり」と。言未だ畢らざるに、賊の旗幟登る。乃ち堀尾吉晴に命じ往きて之を奪はしむ。吉晴、聲に應じて起ち、單騎馳せて之に赴けば、則ち賊兵先づ上る者已に千餘人なり。吉晴、其の兵を顧みるに、能く屬する者十五六騎、弓銃手二十人。進みて其の後を躡す。賊の弓銃、前に在りて用ふべからず。吉晴の全兵、堀秀政と皆至り、大に呼びて奪撃す。賊兵遂に山を棄てて走る。吉晴等代りて陣す。友祥、先鋒と爲り、山崎の南門を關して、他隊の先づ進むを聽さず。天王山の軍聲起るを聞き、乃ち門を開きて進み、賊の左陣と大に戦ひ、殺傷相當る。清秀、坂を躡

えて進む。賊の左陣進む能はず。信輝も亦、川を濟りて、其の右陣を衝き、合撃して大に之を破り、其の三將を斬る。洞嶺の軍、勝敗を觀望し、戦はずして走る。秀吉、北ぐるを追ひて、直ちに光秀に逼る。光秀怒りて親ら戦はんと欲す。比田某、其の馬を叩へて曰く、「敵鋒犯す可からず。請ふ、且く勝龍城に入らん」と。光秀、惶惑して曰く、「勝龍は安くにか在る」と。比田、騎して前導す。我が兵前後に充塞す。比田等戦ひ且つ走り、纔に城に達することを得たり。闇に上りて望めば、則ち我が兵已に城を圍むこと數重なり。城兵稍稍散亡し、餘す所僅に百人のみ。即夜、光秀、十餘騎と圍を潰して北に出で、馳せて坂下に向ひ、小栗棲に至る。土兵四もに起り、林中より槍を以て其の肋を刺す。馬より墜ちて死せり。

秀吉は尼崎まで信長の死後十二日目にやつて來た。中國で一、二日暇を取つてゐるから驅付けたのは十日以内、實に神出鬼没である。光秀の方は、これは幾らかインテリである。學問も出来る。光秀の書いた武將に對する感狀などを見ると、日本風の文字ぢやない。支那風の文字である。大分高尚な支那のお手本で習つた文字で

ある。その筆蹟や文句から見ても學問が餘程あつたらしい。死にかけてにも立派な偈を作つて居る。

逆順二門無く、大道心源に徹す。五十五年の夢、覺め來りて一元に歸す、などいふ風懷は一寸そこら邊の連中とは趣が違ふ。光秀は學問もあれば品行もよい、併し其の品性には何處か陰氣なやうな所がある。さればと言つて相當有能である。先づ少し八釜しい手の込んだインテリで、肚の底は少し邪惡であつたかも知れない。光秀の妻君は中々の賢夫人である。光秀が未だ志を得ない頃、友達を集めて今で言へば座談會を屢々やつて居た。その座談會には御馳走もしなければならぬ。併し浪人の光秀には貯へもなければ座談會に出すべき御馳走もない。光秀は途方に暮れて居たが、その晩になると奥さんが案外な酒肴を準備してもてなしてくれた。光秀は同志に對して面目を施し非常に細君に感謝した。細君は頭に手拭みたいな物を被つて居る。どうしたかとたゞして見ると、實は緑の黒髪を切つて賣つて居たのである。

光秀の娘は細川忠興の夫人になつて居つて、關ヶ原の時に自殺した。中々貞淑な人で父の非業の最後を悲しんだのであらう。宗教に入つて眞劍な信者となり、壯烈な殉教者として名を残した。親類筋の明智左馬之助光春は山崎の合戦を救はんとし大津まで馬を進めたが、秀吉方の堀秀政に出で合ひ、始めて光秀が妻子を残したる坂下城の危きを知り、單身馬を躍らして琵琶湖を横切り、大津から唐崎まで所謂湖水渡りをやつて坂下城に入つた。又此外にも光秀の陣營を見渡すと相當屈強の勇者を従へて居る。光秀は唯者ではなかつたらうが、どうも性質に割り切れぬ厭な所がある。そこが信長と相容れない。秀吉はこれに比べると學問もないが屈托もない。天空海濶でカラリとして居る。彼の人格にはわざとらしい所がない。彼の心の朗らかさが自然に人を引きつけるのである。秀吉と秀吉とはかういふ相違があつたらうと思ふ。

光秀は信長を殺して天下を取り、種々手を盡して信長の將校連に渡りを付けやう

としたけれども、一向旨く運ばない。光秀の性格に暗い所があり、容易に人に許さぬので人も亦彼れに許さないのであらう。細川忠興の妻君には自分の娘が行つて居るから、細川家位は味方に付かうと思つたけれども、これも旨く運ばない。其の往復の文書など一向煮え切つて居ない。それから筒井順慶なども、味方に付くやうな付かぬやうな恰好で洞ヶ峠に陣して居る。實際の手筈はこんな工合で一向運ばないのに、そこはインテリだから將軍として朝見の儀はどんなにするものか、衣冠束帯はどんな古式に則るべきかなど下らないことばかり學者を集めて研究して居る。

然るに相手の秀吉は即斷果決已に尼崎に攻め上つて來て居る。光秀の方では中國から秀吉が引上げて來るのだから、戰爭になるのは少くとも五十日、百日の後であらうと思つて居つた所が、神出鬼没の秀吉はもう既に尼ヶ崎にやつて來た。机の上で習つた兵法の先生と、草履取りから叩き上げた秀吉の軍さ振りの違ふ所である。秀吉は突嗟に尼崎に馳け付け、使を遣はして明日山崎で一つやらうぢやないかと申

込んだ。そこで光秀は承諾して將士を集めた。所が洞ヶ嶺に陣して居た齋藤利三が諫めて言ふには、秀吉は新來の勢ひでその鋒先が甚だ鋭いから戦へば利益がない。こゝは其の銳鋒を避け退いて近江の坂下に入り以て後圖をなすがよからうと。どうせ決戦の準備が出来て居なかつたから、一先づ坂下に退いて形勢を見て居つたら、秀吉の方にも内輪の危難を孕んで居る。信長の舊將領が決して秀吉の下に統一さるゝものでない。あゝなつた場合齋藤利三の意見も一見識である。併し光秀は曰く、天下では織田を見て鬼神の如く恐れて居る。然るに我は一撃してこれをやつ付けた、天下誰かよく我に敵するか、汝速かに來り戦へ、何ぞ藤吉を畏れるやと。

敵將を指し秀吉と呼ばずして、藤吉と呼ぶ所に、光秀の格式はつた氣取りがある。草履取りの藤吉如きがなんだと云ふのである。利三已むを得ず光秀の命に従ひ來り會した。そこで遂に現にある所の兵一萬六千を以て、分けて六隊と爲し、夜半雨を留して桂川を渡り山崎に行つた。筒井順慶は大和の兵萬人を擧げて洞ヶ峠に軍し、

その後援となつたのである。秀吉夙に行動を起し夜の引きあげに諸將を統べて戦地に出かけた。高山友祥が先鋒、中川清秀、池田信輝、丹羽長秀、織田信孝等、次々に相屬し各々兵數千を従へて居る。秀吉は自ら騎兵及び歩卒二萬を引つれてその後方に居る。

既にして兩軍皆陣地に就いた。秀吉北の方天王山を見て指さして左右に謂ひて曰く、今日の戦、敵をして先に此の天王山を取らせたら、我方には有利でない。この邊は地勢起伏し、天王山を取つて見下すと一目瞭然たるものあり、攻防共に有利の地に立つことが出来るのである。そこで慧眼なる秀吉、これを取られたら我の利益でないと言つたのである。

然るに相手もさる者、その言葉の終らざるに賊の旗印は忽ち天王山に現れた。そこで秀吉は堀尾吉晴に命じて、これを奪ひ還させた。吉晴聲に應じて起ち、單騎で驅付けた。賊兵既に先んじて上る者千餘人である吉晴願みて自己の兵を數へると、



よく屬する者十五六騎、弓、鐵砲を持つて居る者が二十人である。吉晴はすかさず此の寡兵で敵の後をつけねらつた。丁度工合のよいことには敵は山を登りながらその弓、鐵砲を先に立てゝ居る。それを後ろから追尾されても鐵砲は撃つことが出来ぬ。ニ體こんなノロマな戦の仕振り、と云へばない。前に弓銃を置いた時には後ろにも弓銃を置くのが定石ださうである。そこに吉晴の兵、堀秀政の兵皆やつて来て、大呼奮撃するのである。光秀方の兵は鐵砲は前にあつて使へないのに、後から弓、鐵砲で撃ちまくらるので、逃げるより外に仕様がなないので、山を棄てゝ逃げてしまつた。そこで吉晴等が代つて天王山に陣した。一方高山友祥は秀吉の先鋒となり山崎の南門を鎖して續々攻寄せて来た他の隊が進入することを止めてしまつた。さうして天王山に軍聲起りて戰機熟すると見るや、時分はよしと門を開いて進んだから、後續部隊が次々に進み賊の左陣と大いに戦つた。そこで戦死負傷互に相半ばする有様となつた。清秀は坂を越えて進む。賊の左陣は進むことが出来なかつた。

信輝は又川を渡つてその右陣を衝き、左右合撃して大いに敵を破り、その三將を斬つた。さうすると洞ヶ峠に陣した筒井順慶の軍は勝敗を觀望し、戦はずして逃げてしまつた。これが有名な洞ヶ峠の日和見である。

秀吉逃ぐるを追ひ光秀に迫つた。光秀怒りて自ら戦はんことを欲したが、比田某その馬を叩いて曰く、敵の鋒先は逆も犯すことが出来ぬ。請ふ直ぐ勝龍城に入れと。光秀惶れ惑ふて曰く、勝龍は何處にあるかと。比田、馬に乗つてサアこちらへと云つて案内した。然るに秀吉の兵が前後に滿ちて道を塞いで居る。比田等は戦ひながら血路を開いて走り、やつと城に達することが出来た。閣に上つて望むと秀吉の兵は城を數重に圍んで居る。城兵の状態はどうかと云ふと、段々逃げて餘す所僅か白人しかない。その晩、光秀は十四騎と圍みを破つて、北に出で馳せて坂下に向ひ小栗栖村を通り掛ると、土民が四方に起つて襲ひかゝつた。これは大將を仕止めれば恩賞に預る、刀も取れるし、甲冑も懷中も、馬も取れるからである。光秀は其の

土賊の爲に槍で胸を刺され馬から落ちて死んだ。

光秀は如何なる理由があるに拘らず、臣として君を弑するやうな大それたことをやつた。これにはさすがに戦國亂世の人情も許さざる所があり、非常の不人氣で、光秀は忽ち雰圍氣に押されて自信を失つてしまつた。然るに秀吉の大軍は中國から引返して、十日ばかりでもう尼ヶ崎に押し寄せて居る。光秀の臣齋藤利三が坂下に籠城して形勢の變化を待たうと云ふたのはあの場合恰好の對策であつたらう。そこに自信を喪ひかけたくせに、世間態と己惚れとに禍せられた光秀は、怖ぢ氣だちながら決戦の策に出でた。

兵書の教ふる通りに先づ天王山を狙つたのはよかつたが、インテリの作戰で實戦には手落ちが多く、弓隊や銃隊を先頭にして、山の中途に後ろから追ひすがる敵の弓銃隊に攻め立てられ、たやすく敗北を取つたのは甚だ醜態である。全軍敗北となつた時に、自ら武器を執つて戦死の覺悟をしたのはよかつたが、今度は比田某の諫

めを容れて勝龍城に落ち延び、そこも支へずして坂下城目ざして逃げ行く際、自分の城下に近き小栗栖村で土民の手にかゝつたのは重ねぐの醜態である。

大將の修練が足らず、覺悟が悪いと、臣下の諫言を聽く可き時に聽かずして聽く可らざる時に聽くやうなことになるのである。諫める者に責任はない、大將の心の迷ひがこゝに至らしむるのである。

## 賤岳七槍

勝家之を聞きて、兵を發して南に出づ。二月、佐久間盛政をして、歩騎二萬に將とし、出でて柳瀬に陣せしむ。前田利長、先鋒たり。火を關原に縱ちて、退きて木本に陣す。秀吉乃ち氏郷以下の七將を留めて一益に當らしめ、自ら諸軍を引ききて柳瀬に赴く。自ら老兵十餘騎と山に上り、北軍を望みて曰く、「是れ速戦を以て勝つ可からざるなり」と乃ち兵を勒して十三隊と爲

し、湖山の形勢に據り、連珠砦を築きて、自ら長濱に屯す。三月、勝家、悉く兵を引ききて柳瀬に至る。我が兵、壁を堅くして出でず。丹羽長秀來りて之を助く。四月、信孝、復兵を擧げて勝家、一益に應ず。其の十七日、秀吉、其の軍を以て、南、信孝を攻めて大垣に至る。盛政、進みて諸壘を撃たんと欲す。勝家許さず。是の時、柴田勝豊、疾を養ひて京師に在り。其の部下山路將監といふ者叛きて、北軍に降り、盛政の營に在り。衆中、盛政に謂ひて曰く、「聞く、『神戸君、兵を擧げて我に應じ、秀吉往きて之を撃つ』と。子豈に赴き援けざるを得んや」と。盛政曰く、「固よりなり。道路阻絶して、敵、其の間に充塞す。我、將に之を如何せん」と。將監進みて其の耳に附し、語りて曰く「敵の諸壘皆固し。獨り中川清秀の壘は、賤岳の麓に在り。我を去る尤も速し。而して其の備固からず。吾、兵を潜めて之に趨き、其の不意に出では、必ず志を獲ん。秀吉は、大垣に在り。速かに來ること能はず。子、急に撃ちて失ふ勿れ」と。盛政大に悦ぶ。十九日、往きて勝家に告ぐ。勝家曰く、「可なり。吾、利家と留りて諸壘に當らん。汝則ち往きて撃て。撃ちて勝たば、速かに還れ。慎みて留る勿れ」と。盛政乃ち從弟勝政と萬人に將として、夜に乗じて余吾湖の東に至り、湖に循ひて馳せ、曉くる比、岳麓に至る。

中川氏の卒、方に馬を湖に飲ふ。盛政の先鋒、執へて之を斬る。其の一人逃れ返り、急を告ぐ。清秀、高山友祥と、數千人を以て出でて戦ふ。盛政、其の部將は謂ひて曰く、「長篠の戦に、萬の巢を火きて捷つ。是れ做ふ可きなり」と。人を遣して其の壘下の營を燒かしむ。我が軍顧みて敗る。友祥走り、秀長に依る。秀長等、惶急して、敢て援けず。清秀、苦戦して遂に死す。盛政既に勝ち、因りて留りて還らず。勝家、之を召還す。盛政答ふるに、日傾き兵疲る。當に明を俟ちて還るべきを以てす。勝家曰く、「直路一里に過ぎず。何ぞ亟かに還らざる」と。盛政笑ひて曰く、「老怯の過慮、何ぞ意と爲すに足らん」と。使者五反して、日已に暮る。

山崎合戦の後の秀吉の聲名は隆々たるものである。その合戦には參加し得なかつた柴田勝家とか、參加したが餘り力にはならなかつた織田信孝とか、さういふ連中が秀吉の隆々たる名聲に對して快からざるものがある。織田信孝は岐阜に據り、瀧川一益は伊勢に據り、柴田勝家は越前に據り、各々秀吉を謀らうとした。柴田勝家は最も剛の者であるが北國の雪に沮まれて居る。秀吉は先づ手近の瀧川一益（伊勢

長島に在り) を伊勢に討つて合撃の機先を制せんとし龜山を取り、嶺山を攻めしめた。そこでこの情勢を見て取つた柴田勝家は兵を發して南進して來た。先づ二月に佐久間盛政をして兵二萬を率ゐて柳瀬に陣せしめ、前田利長が其の先鋒である。これは秀吉が草履取り時代から懇親ある前田利家であるが、前田家も其頃は信長の老臣として驍名高き柴田について居たのである。前田は後に豊臣、徳川の間に立ちて矢張り首鼠兩端を持したのでどうも日本青年の趣味に合はない。柴田の先鋒は南進して火を關原(美濃)に放ち、退いて木之本(近江)に陣して居る。そこで秀吉は蒲生氏郷以下七將を留めて伊勢の瀧川一益に當らしめ、自らは北方の敵に當る爲諸軍を率ゐて近江の柳瀬に出かけて行つた。

こゝに瀧川一益を抑へる爲に残された蒲生氏郷、これは後日北國の重鎮となり伊達と徳川とに備へさせられた中々偉い大將である。秀吉は常に前田利家、蒲生氏郷、徳川家康を同列に取扱つたが、以て其の器量を察することが出来る。危急の際には

かういふ名將を抑へにして置かなければいかぬ。主力を以て他の一方面に決戦せんとする時には、他の一方を防ぐには、こんな風に智勇兼備の名將を留めて置くのが昔の人のやつた戦法である。斯くの如き名將は場合によつては自ら犠牲となつて受持ちの戦場を支へ、主將をして正面の敵を撃碎するに違あらしめるのである。秀吉は氏郷を抑へとして伊勢に備へ、自ら諸軍を率ゐて柳瀬にやつて來た。そこで自らは老兵十餘騎と山に上つて戦場を檢分した。形勢を觀測する時は經驗ある老兵でなければならぬ。

秀吉は北軍を望んで曰く、これは速戦を以ては勝てるものでないと、鬼柴田と云はれた柴田勝家の布陣は餘程確かりして居たのであらう。秀吉は之に備へる爲、兵を手分けして十三隊となし、湖と山との形勢に據りて、碁石を竝べたやうに要塞を築いた。これは電撃を見合せてトーチカを築いたやうなものである。さうして自らは後ろにあつて近江の長濱に屯して居つた。三月となり雪融けとなるや、柴田勝家

はその悉くの兵を率ゐて御大自ら越前の北の莊から柳瀬に進出した。秀吉の兵は壁を堅くして出でず、連珠砦に依つてこれと對立して居る。丹羽五郎長秀がやつて来て秀吉の方の助けをする。

そこに豫て柴田、瀧川と通謀して居つた織田信孝が美濃に兵を擧げ、秀吉に對して挾撃態勢をとつて來た。秀吉もこうなつては三方に敵である。併し伊勢の敵は蒲生氏郷に任せ、北方の敵は連珠砦で防ぎ、自ら信孝を攻むべく大垣に向つた。そこで佐久間盛政は此機に乗じ、進んで秀吉の連珠砦の諸壘に攻めかゝらうと思つたが、勝家は自重して許さない。此時柴田勝豊が病を養つて京都に居たが、その部下の山路將監といふ者は勝豊に叛き脱走して北軍に降り盛政の中營の中で曰く、神戸君信孝——織田信孝は神戸といふ家に養子になつて居る——が兵を擧げて我に應じ、今や秀吉これを討つために出かけて居る。かういふ際に貴下はなぜ赴き助けないので。盛政曰く、固より其の通りだが道路が險阻にして隔絶し、敵はその間に充滿し

て道を塞いで居る。我これをどうすれば助けに行けるだらうかと。

將監進んで耳打して曰く、敵の諸壘は皆固いが、獨り中川清秀の壘は賤ヶ嶽の麓にあり、我を去ること最も遠く、而して其の備へは固くない。我兵を潜めて之に趨き、その不意に乗じて攻めたならばうまく志を遂げられるだらう。秀吉は大垣に居るから一寸急に來ることが出來ぬ、さあ直ぐ撃つて、此の機會を失ふてならぬ。盛政大いに喜び十九日往いて勝家に此旨を告げた。勝家は唯遑然と城塞を攻めることには反對して居たが、今度具體的の謀だから、宜しいと之を許し、俺が利家と共に留りてこれ等の諸壘を牽制しよう、汝は則ち往つて撃て、撃つて勝つたら直ぐ歸れ、決してそこに留つてはならぬぞと。

そこで盛政は從弟の勝政と萬人を率ゐて夜に乗じて余吾湖の東に出で湖に循ひて馳す。かくて曉頃、賤ヶ嶽の麓に達した。丁度そこへ行くと中川の兵卒が馬を引出して湖で水を飲まして居る。盛政の先鋒これを捕へて斬る。その一人が逃歸り急を

告げた。清秀、高山友祥と數千人にて出で戦うた。その時に佐久間盛政が言ふには長篠の戦——武田と織田の戦——に鳶巢城を焼いて戦が勝ちになつた。そのやうにするがよいと、即ち人を遣はしてその壘下の營を焼かしめた。中川・高山の軍は戦鬪中に城が焼け出したから、顧みて敗れてしまつた。

高山友祥は馳せて羽柴秀長の軍に投じたが、秀長は恐れうるたへて救ふことが出来なかつた。

剛勇無双の中川清秀はそこで討死した。盛政はかくて戦に勝つたものだから、勝家の命令に背き、賤ヶ嶽に留りて還らない。勝家は心配なので使を出して召還した。盛政は日傾い兵隊は疲れて居る。曉きを俟つて還らうと答へた。勝家が言ふには、直路一里に過ぎないのだ、なぜ速かに還らないかと、盛政笑つて曰く、御大も年取つて臆病になつたものだ、そんなことは意に留むるには足らないと。勝家から又々還れと言つてやつた。それでも盛政は還らない。使者が往復五回もして居るうちに

到頭日が暮れてしまつた。

是の時に當り秀吉、岐阜を攻めんと欲す。會々大雨あり、呂久河漲りて未だ濟らず。午時に報至る。秀吉、方に食す、使者に問ひて曰く、「盛政退くや、未だしや」と。曰く、未だしと、秀吉乃ち箸を投じて起ち刀を抜きて踴躍して、曰く、「吾、大勝を得たり」と。即ち駛卒五十人に命じて先づ往き、沿道の民を募りて曰く、「吾、將に賤岳に赴かんとす。炬火もて我を導き、酒食もて我に餉せよ」と。遂に堀尾吉晴をして、留りて岐阜に當らしめ、而して自ら輕兵一萬五千を提げ鞭を擧げて疾く馳す。藤川に及びて昏黒なり。山谷皆炬。餉者争ひ至る。兵皆立ちながら食ふ。秀吉行くゆく且つ呼びて曰く、「其の里閭を記せよ。吾、將に凱旋のとき之を賞せんとす」と。北軍相驚きて曰く、「濃路の諸山炬火多し。秀吉來る」と。盛政、大に駭き、將に暗に乗じて軍を抜きて北せんとす。適々月已に出づ。我が軍之を覩て、進みて其の後を躡む。盛政、銃隊を留めて之を殿せしめ、兵を引きて岳北に上りて陣す。勝政、麓に在り。之れと合せんと欲す。金瓠の馬表已に岳南に在り。銃丸亂發す。勝政の兵、立ちどころに死するもの二百餘人。其の陣

稍と亂る。秀吉、左右を顧み、兵を縦ちて之に乗ず。加藤清正、福島正則、加藤嘉明、平野長泰、脇坂安治、糟屋武則、片桐且元、先を争ひて奪撃し、斬獲する所多し。諸軍従ひ進みて、遂に大に之を破り、勝政を擒にし、進みて盛政に蹙り、又大に之を破る。斬首五千級。遂に進みて勝家に赴く。勝家、核山に在り。賤岳の軍、大に囂しきを聞きて之を危む。已にして敗卒交と至る。勝家曰く、「盛政果して我が事を敗る」と。遂に北に走る。過りて前田利家を府中に見る。其の馬を請ひ、馳せて北莊に入る。秀吉走るを追ひ、府中に至りて、單騎、城門を打ち、利家の俗字を連呼して曰く、「又左又左」と。利家乃ち出でて之を迎へ、其の兵を以て従ふ。諸城、風を望みて解走す。且日、秀吉、北莊に至り、自ら其の後山に上り、堀秀政をして、火を縦ち、烟にじて城に迫らしむ。或、盛政及び勝家の義子權六を縛して、麾下に獻す。秀吉、之を城中に視す。勝家遂に自ら焼殺す。秀吉、城中に火起るを見て、則ち兵を引き、北、加賀・能登を徇へ、盡く之を下す。信孝出で走りて自殺し、一益降る。是に於て、秀吉、還りて坂下に軍す。六月、從四位下に敍し、參議に任ぜらる。七月、大に論功を賞し、北莊を丹羽長秀に、大垣を池田信輝に、澤山を堀秀政に、金山を森長可に予へ、近臣七人に秩各と五千石を賜ふ。

ふ。世呼びて賤岳の七槍と曰ふ。

佐久間盛政は勝家から五遍も使を往來させても、還らないで日が暮れた。そこで話變つて、秀吉はこの際岐阜を攻めんとしてゐる。大雨に會ひ呂久河の水が大に漲りて未だ渡れない。そこに午頃報知が來た。中川清秀、賤ヶ岳に破れて討死したといふのである。

秀吉は飯を食つて居つたが、使者に問うて曰く、盛政はもう退いたかまだ退かぬかと。答へて曰く退かぬと。そこで秀吉は箸を投出し、刀を抜いて踴躍して、我れ大勝を得たりと言ひ、直ちに驅足の早い兵隊五十人を先に立たせ、兵糧の準備をする暇もないので、沿道の民に募つて曰く、我は賤ヶ岳に行くのだ、日が暮れたら炬火を以て我を導け、酒や食物を用意して我に辨當を出せと、觸れながら馳せて行くのである。又一方は堀尾吉晴を留めて岐阜の敵に當らしめ、自らは身輕な兵一萬五

千を提げ、さア行けと先頭に立ち鞭をあげて疾驅した。堀尾吉晴は山崎の合戦では堀秀政と共に天王山攻略の智將であるが、秀吉は何時でも危急の場合には、蒲生氏郷とか堀秀政とか堀尾吉晴とか、こんな連中に一方を支持させて、自ら行動を開始するのだ。藤川に及んだ頃薄暗くなつたが、山も谷も皆炬火に充ち充ちて居り、賄ひをする者は争つて集まつて来る。さア辨當を上りなさいと云ふのである。そこで兵士は立ち乍ら食ひ、食ひながら進むのである。

秀吉は氣轉がよい、頗る上機嫌でさアすつかり村の名を覚えて行け、凱旋したら御褒美をやらねばならぬと。百姓だつて聞けば嬉しくなつて仕舞ふ。こゝらが秀吉の好い氣分である。實に秀吉の戦のやり様はうまい。山川草木、天變地異、人情風俗、總て戦の材料たらざるはなしである。大垣から木之本までは十三里もある。呂久川から十五、六里疾驅して一晩でやつて來た。大軍を動かすのに自ら兵糧を運ばない。天下をして運ばしむるのだ、だからその機動が早いのだ。

北軍驚いて曰く、美濃路の山々に夥しき炬火が續いて居る、秀吉が來るのだと。盛政大いに驚き暗に乗じて軍を引いて逃げて行かうとしたが、偶々月が出て來た。秀吉これを見て進んでその後を追掛ける。盛政、銃隊を留めてこれを殿りにした。さうして自分は兵を引いて賤ヶ岳の山の北に上つて陣を布いた。勝政は山の南の麓にあり、盛政の軍と合せんとして居る。所がそんな餘裕はない。アツと言つて居る間に千成瓢箪の馬表が既に岳南にあり、どんく撃ち出して來た。勝政の兵は立ちどころに死者二百餘人、その陣亂れかけた。そこで秀吉は左右を顧み、兵を縦つてこれに乗せしめた。もうこうなつては隊も何も要らん、兵を縦つて之に乗せしむとは、崩れかゝつた敵陣に亂れかゝつて自由に討取れといふのである。

加藤清正、福島正則、加藤嘉明、平野長泰、脇坂安治、糟谷武則、片桐且元等は先を争つて奪撃する。皆若者ばかりである。大いに斬りまくつた。諸軍従つて進み、遂に大いにこれを破る。勝政を擒にし、盛政に迫り、又大いにこれを破つた。斬首



五千級、遂に進んで勝家に攻めかゝつて行つた。勝家は核山さねやまに居つたが、賤ヶ岳軍の大きいに罵しきを聞き、これはやられたのぢやないかと心配しんぱいして居る。

そこへ負けた兵卒がばらばらやつて來た。勝家曰く、盛政の奴、俺の言ふことを聽かないで果してこの始末しまつ、俺れの大事を誤つたのだと。遂に北に走つた。行く／＼前田利家が越前の府中に居るので、通り掛りに前田利家にその馬を請ひ北莊まで走り自分の居城きよじやうに歸つた。ところが追ひかける秀吉も寸隙すんげきを興へない。秀吉は勝家を追かけて府中に至り、單騎城門を叩いて、利家の俗字を連呼して曰く、又左又左と。又左は前田又左衛門利家のことである。利家もこうなつては仕方がない。今まで勝家に興してさまり悪かつたらうが、出でて秀吉を迎へる外はない。

利家が秀吉の御供をするやうになつたので、北陸の諸城は其の威風を望んで、備へを解きて敗走する。翌日秀吉は北の莊に着き、自ら後方の山に登り、堀秀政に火をつけさせて烟に乗じて城に迫らせた。そこに或る人が佐久間盛政及び勝家の義子

權六を生け捕り、縛して秀吉の麾下かきに獻じて來た。秀吉は之を城中に引廻して見せつけた。勝家は遂に城に火をかけて死んだ。

秀吉は見透しが早い。城中に火起ると見るや、勝家程の剛の者がそこで死なない道理はないと見て取つて居る。そこで陥ちた城の檢分けんぶんもしないで兵を引いて北に向ひ、加賀能登盡く從へた。そこで岐阜にあつた信孝は出で走つて自殺し、伊勢にあつた瀧川一益は降參した。そこで秀吉は還つて坂下に陣した。六月從四位の下に敘せられ、參議に任ぜられた。七月大に戦功を賞し、北の莊を丹羽長秀に、大垣を池田信輝に、澤山を堀秀政に、金山を森長可に、それから殊勳ある近臣七人に秩録各々五千石を興へた。世に之を賤ヶ岳の七本槍と言ふ。

此の賤ヶ岳の七本槍を讀みながら、古今東西名將のやることは常に其の軌を一にするを痛感せざるを得ない。ムツソリーニは伊太利の指導者であるが、寧ろ古羅馬の英雄を想ひ出させる風貌である。彼はエチオピア戦史に序を書いて居る。パドグ

リオ元帥といふのが戦争の總指揮官であり、後に參謀本部の命によりエチオピア戦争の本を書いて居る。それにムツソリーニが書いた序文は天下の名文であり、兵法の極意とも思はれる。彼は曰く、

エチオピア戦争はあらゆる他の戦争と同様に勝たなければならぬ戦争であつた。もう一つ大事なことは早く勝たなければならぬと云ふ條件がついて居る。早く勝たないと外交の干渉が来る。その次には經濟封鎖が来る、其の次には軍事的干渉が来る。列國の反伊參戰が豫想される。敵は山岳重疊せる熱帶の天險に據り、歐洲新銳の武器で武装し歐洲の將校によりて指揮さるゝ、慄悍無双の土民軍である。最初軍を出す時に、參謀本部からは十萬でいゝといふ話であつたが、自分は進んで五十萬の兵を出せと言つた、兵數を五倍にして速力を五倍にせよと言つた。このバドグリオ元帥は自分の意見を體得して、到る處に快速殲滅戰を演出した。アスチアング湖の大勝の後、アビシニア軍は混亂に陥つた。バドグリオ元帥は一息入れて機を待つべ

きであつたかも知れぬ。然るに時間的要素は我等に進撃を要望した。

敵の危機にある時、彼に恢復の餘地を與ふべきでない。斷じて進撃して最後の一人まで殲滅せねばならぬ。我等は向ふ見ずと思はるゝまでに勇往邁進せしバドグリオ元帥に感謝せねばならぬ。由來將帥は剛猛果敢であらねばならぬ。而して斷じて行ふ者のみ機會を善用し、常に天佑を享受し得るものである。……十月三日に開始せられ、五月五日に終了せし此の戦争は、正しき意味に於てファッシストの戦争と謂ふべきである。……「迅速」「決斷」「犠牲」「勇氣」「忍耐」はファッシストの特徴であり、其の特徴は最高度に顯現せられたと。

秀吉の賤ヶ岳に於ける戰鬪ぶりはまさに此の通りである。大垣から木之本まで十三里餘を一晚で駆けつけ、拂曉には賤ヶ岳に迫り、其の勢で敵の總大將柴田勝家を求め、秀吉自身、越前の府中(竹生)まで一騎で躍進し、去就明白でなかつた前田利家を引具して、直ちに北の莊の勝家を亡ぼし、其の序に鞭を擧げて北陸一帯を平定

して居る。愚圖々々して居れば、織田信孝、瀧川一益、柴田勝家、敵は三方から迫つて來るのである。時間的要素は秀吉に電撃的決戦を要望してゐるのだ。尋常一樣の大將なら賤ヶ岳の急襲はやり切れない。普通以上の名將でも、賤ヶ岳に勝つたらそこで一息入れる所である。併し敵に大打撃を與へた時、味方の損傷もあるが、敵に加へたる本質的、精神的損害は更に大きい。その損害と精神的打撃から敵が恢復しないうちに、更に次の殲滅戦に移るのである。南京を屠つたら、其の足で漢口を取つてしまふと言ふ様な次から次の徹底的撃滅を企て、且つ之を勇敢に實行したのである。

さればといつて秀吉は決して輕舉に出づる者でない。最初柳ヶ瀬から敵陣を見渡して、速戦の不可能なるを知り、連珠砦を築き、湖山の險を利用して防守的態勢を取つたなど、さすがに用心堅固である。然るに柴田方の佐久間盛政は饒勇ではあるが未熟であつた。うづかり賤ヶ岳に進出し、勝家の命令を聽かずして其の地に止ま

り、遂に秀吉の電撃を受けて、全軍の破綻を生ずるに至つた。柴田勝家は使者を五回も往復させて盛政に退陣を命じて居る。「直路一里に過ぎず、何ぞ速やかに還らざる」と嘆息して居るのは、戦争巧者の勝家として悲痛の聲である。

秀吉と勝家との見識は一致してゐた。勝家は部下の盛政が退陣しないので、ひどく心配してゐるが、敵方の秀吉は「盛政退くや未だしや」と情勢を問ひ質し、「未だし」と聽くや、「我れ大勝せりと」絶叫し、食事中の箸を擲ち、直ちに鞭を擧げて疾驅して居る。賤ヶ岳に勝つて後、府中の城門を叩き、敵の大將に對し、「又左、又左」と呼びて、その己れに隨ふことを當然のこのやうに思ひなし、疑ひも怖れもしない所秀吉の濶達明朗ふりを示すものである。自重して容易に動かないが、敵の隙を伺ひ破綻を見出すと、電撃又電撃、一舉にして徹底的に片づけて仕舞ふところ實に古今に絶せる秀吉たる所以である。偉大なる將帥は同時に偉大なる人間の心理把握者である。

## 關白天威也

伊達政宗、人をして形勢を覗はしむ。還り報ず。則ち大に懼れ、乃ち肯て使幣を修め・徳川氏に就きて降を乞ふ。徳川公、使者を戒めて曰く、「忝かに來り謁せざる可からず」と六月、政宗百餘騎と下野に入る。路塞りて通ずるを得ず。還りて越後、信濃より、間行して箱根に至り秀吉に謁せんと請ふ。秀吉、謁者に問ひて曰く、「政宗の狀貌は如何」と。曰く、「齡二十歳可なり。眇にして被髮し、奇偉甚だし」と。秀吉輒く見るを許さず。人をして之を詰責せしめて曰く、「吾、王命を受けて、天下を經略す。遐方絶域の人と雖も、來歸せざるは莫し。汝、東北に屈強し、兵數萬を擁し、未だ嘗て一介の使を發せず。葦名義廣、心を王室に歸す。而して、汝、擅に之を攻む。是れ何の故ぞ」と。政宗答へて曰く、「義廣、臣の叛將を納れ、佐竹、岩城と結びて、臣を滅ぼさんと圖る。臣、二本松氏を討ちて父の仇を復せんと欲す。又義廣の拒ぐ所と爲る。故に臣、日夜攻撃し、終に之に克つを得たり。臣、敵中に在りて、四方の事を知らず。殿

下の東伐に及び、然る後に天下の歸する所有るを知る。是を以て來り謁す」と。秀吉、又之に言はしめて曰く、「汝の陳する所、果して偽無くば、則ち盡く侵す所の會津、仙道の地を獻ぜよ。不らずは則ち亟かに汝の國に歸り、徐ろに守備を修めよ。吾、北條氏を討滅して、然る後に汝を我馬の間に見ん」と。政宗曰く、「臣の生死は唯殿下の令のままなり、況んや邑土をや」と。其の侵地を致す。乃ち入見す。秀吉、便服して坐し、之を慰勞し、問ひて曰く、「卿、陸奥に在りて幾たびか戦ふ」と。曰く、「三十餘戦」と。秀吉曰く、「是れ村巷の小鬪のみ。意ふに未だ大兵を部勒するの法を知らざらん」と。因りて起ちて、政宗を引き出で、廣壑を下臨す。秀吉前に在りて、指示して曰く、「彼は畿内の軍なり。彼は坂以西の軍なり。彼は海道軍なり」と。政宗、唯唯、敢て仰ぎ視る莫し。既にして罷めて、遣歸す。諸將、交々之を留めて遣らざるを勸む。曰く、「之を遣るは是れ猶ほ虎を野に縱つがときのみ」と。秀吉晒ひて曰く、「吾寸兵を用ひずして、五十四郡を取る。汝が輩の知る所に非ざるなり」と。政宗退きて人に謂ひて曰く「關白は天威なり」と。遂に去りて國に之く。

秀吉は既に中國から九州を平定し、さうして北條征伐、小田原征伐に行く。小田原征伐には寧ろ秀吉の堂々たる軍容を見せるといふ恰好で、天下の大軍を小田原の城下に集める。諸侯の陣營を連ねて城を遠巻きにし兵糧攻めにして自ら屈するを待つ。その間に天下諸侯の技倆を見よう。軍容を見よう、その人物を見よう、その兵隊を通じて地方の風土を察しようといふ大きな考へ方である。實に悠々として餘力ある者のいくさ振りである。この間に天下の態勢を整へて、次の朝鮮征伐の計畫位は考へて居たであらう。

そこに東北に居る伊達政宗は屢々招かれても、これまで秀吉の所に顔を出さなかつた。然るに政宗は茲に於て形勢を觀測し、徳川家康を頼りにして初めて小田原の行陣に於て秀吉に謁見することゝなつたのである。東北の重鎮たる伊達政宗の風貌、それに對して秀吉が一喝を加へて置いて、やがて寛大なる度量を示し、戦はずして東北五十四郡を掌中に收め、完全に政宗を威服してしまふと言ふ。秀吉の英雄らし

い風貌がこゝに見えて居る。

伊達政宗、人をして形勢を視はしめ、其の還り報ずるのを聽いて大いに秀吉を懼れた。實際、雄なりと雖も東北の田舎者たる政宗の目には、小田原征伐の規模と軍容は實に偉大なものに寫つたに相違ない。そこでお土産物たる幣物を整へて徳川氏に就て降參せんことを乞ふた。徳川公は使者を戒めて、降參は宜しいが、早く身輕に出て來てお目通りを願はねばならないと言ふた。そこで六月、政宗は百餘騎を從へて仙臺から下野まで出て來たが、路が塞がつて通ずることが出來ない。そこで引き還して越後信濃を廻り、間道を通つて箱根に至り、秀吉に謁見を願つた。秀吉はその取次の役人に、噂に聞いて居る政宗の面魂はどうだと聞いて見ると、齡二十歳ばかり、片目で、髪は振り被つて居る、とても一癖ありげな變つた人相だ、と言ふのである。政宗は野生で大學教育を受けて居ない所に特色がある。これまで東北を暴れ廻り、邊隅に雄視して天下の關白秀吉に對してさへ、情勢を見きはめねば敢て

膝を屈しなかつたしたゝか者である。眇にして髪を被る。文句は短いが仲々よく彼の風貌を描寫して居る。此の奇偉なる人物、野育ちではあるが學問もあつて、左の如き詩も作つて居る。

馬上にて青年は過ぎたり

時平かにして白髪多し

殘軀天の許す所

樂しまずんば亦如何

俺は青年時代を馬の上で過してしまつた。今は天下が平かになつて、戦さもなくなり頭には白髪が殖えて來た。暗に天下を取りそこなつたことを嘆息して居る。さて生き残つた身體は天の許しを得て壽命を保つて居るのだから悠々として風月を樂しまふ。樂しまずんばどうしようぞと云ふ政宗らしい詩である。此の政宗が二十歳位の若者で天下の秀吉に挨拶する時の光景である。一語一語に運命がかけられて居

る。一寸威かされて魂まで引きぬかれた形であるが、相當の應對振りである。

東北に生れたから、中京の天下には縁遠かつたけれども、仲々偉い男で、南蠻貿易にまで手を出した人物である。仙臺にある政宗の菩提寺を見ると獨創的な野趣が彼の人格どうりに建物の上に躍動して居る。人工的に切り組まずして自然のまゝに調和がある。石燈籠にしても、門柱にしても、曲りくねつて、右と左は別々だが、そこに、自然の統一がある。柱や戸に金の延金を當て、居る所がある。その延金の餘つた所は折り返してあるが、足らぬ所は隙間を残して居る。それで特殊の面白味がある。機會ある毎に屢々野心を起したが、到頭天下が取れなかつたので、こんな詩を作つて自ら慰めて居たのである。

その政宗が若輩の時に秀吉に謁見を乞ふた。秀吉容易に見ゆるを許さず、人をしてこれを詰責せしめて言ふには、俺は主上の命を受けて天下を経略して居るぞ、如何なる遠方隔絶の地域の者でも俺の下に歸せない者はないのだ。それにお前は東北

に頑張り、兵數萬を擁し、今まで俺に對しては一遍も御機嫌伺ひの使ひも出さんぢやないか、而も東北に居る葦名義廣は心を王室に歸して居るのに、お前は擅まゝにこれを攻めたがこれはどうした譯か。先づその返答をしろ、其の返答によつては會つてもやらうと。政宗答へて言ふには、義廣は私に叛いた家來を納れて味方につけ佐竹、岩城の諸氏と結んで私を滅さんと圖つた。そればかりでなく、もう一つ、私は二本松氏を討つて父の仇を復せんと欲して居るのに、それも亦この葦名義廣が邪魔をした。それ故に私は日夜攻撃して到頭これをやつ付けた。それから今まで關白に御目通りを願はなかつたのは私の立場を御察し下さればわかる次第である。私は戦さばかりして居つたから、四方のことを知らなかつた。あなたが小田原征伐をなされるに及び、天下の機運が自から歸する所あるを知つたので、こゝに來てお目通りを願ふのだと。

秀吉、又使ひに言はしめて言ふには、お前の言ふことが偽りでないならばそれで

宜しい。その誠意を示せ、即ち侵す所の會津及び仙臺地方を盡く献上してしまへ、それでなければ、面會に相成らぬから直ぐ歸つて防戦の準備をしろ、折角出て來たのだから、此處でやつ付けやうとは言はない。さつさと歸れ、俺が北條氏を征伐してしまつて、その後には貴様と戦場でお目に掛からうと。政宗が言ふには、私が生きるも死ぬるも唯あなたの御命令の儘にまします。私は覺悟して出て來たのであります。生命を投出して出て來たのであります。生命すら投出してゐる以上、況や土地や村なんかは固より仰せの通りに致しませうと。

そこで侵した所の土地をその儘差上げてしまふことにしてお目に掛つた。さうすると秀吉は仲々英雄らしく、今度は打ちくつろいで常の服の儘出て來て慰さめ勞はつて曰く、お前は陸奥に居つて一體戦さをどの位やつたかと。さうすると政宗は三十餘回戦ひましたと、言葉短かく聊か威張つて即答した。そこで秀吉は高飛車に、それは村や町の小競り合ひだ。戦の數に入らない。思ふに、お前はまだ大軍をどうい

ふやうに部署分けをするか、大軍の配置は解らぬだらう。さあ来い。俺が見せてやると言つて起ち上り政宗を連れ出し山の上から廣い谷を見下した。

秀吉が前に居り、政宗が後に居る。政宗に異心あれば後から突落せば何でもない。秀吉は委細頓着なく、どうだ、あれを見ないか、あちらに居るのが畿内の軍、あちらの方は大坂以西の軍、こちらに居るのは東海道の軍、貴様達の村や巷の小戦さとはちと勝手が違ふだらうと。政宗は頭を下げて、はい、はいと言ふばかり、その威嚴に打たれて正面から顔も見ることが出来なかつた。それで秀吉は用事がすんだので歸して遣らうとした。諸將は交々これを歸さないやうに勸めて、こんな危険な政宗を歸してしまへば、虎を野に放つやうなものでどんなことするかも知れませんが、言ふた。秀吉は呵つて、俺は一寸の兵を用ひずして五十四郡を取つてしまつたのだ、お前達は俺の量見は分るまいと曰ふた。

詰責して、面會して、大きな所を見せて、政宗の魂まで引抜いて、五十四郡を取つてしまつた、戦さはしないで相手を真から屈服させたのだ。秀吉は別に大望を抱いて居る。東北などにかゝり合つては居られない。よしんば征伐して政宗の領分を取つてしまつたとて、地方の事情にも通じて居ないと反覆常なく、治安の維持すら容易でない。そのために暇どつて居れば、朝鮮より大明を征するといふやうな大志を伸べて日本を盛大にするといふ秀吉の願望に反するのであるから、政宗のやうな人傑はその儘活かして使はふと云ふのである。そこで部下の諸將に對し、五十四郡は寸鐵を用ひずして取つたのだ、俺の量見が解らないのかと曰ふたのである。

政宗も餘程秀吉には畏服したと見え、退いて人に言ふには、關白は天稟の威力だと。遂に國に去つて行つたのである。秀吉の氣宇雄大なる所、若い政宗の眼玉が光つて居る所、眼に見えるやうに山陽の筆によりて躍動して居る。こゝで、この間讀んだ六韜三略の一節を振り返つて見ると、更に津々として盡きざる味ひがある。秀吉は三略の所謂、城を獲れば之を割き、地を得れば之を裂き、得て有することなく



居りて守ることなく、城をして自ら守らしめ、土をして自ら居らしむと云ふ極意を實行して居るのである。抑、私が有するといふのはケチな觀念で、得たならばこれを持つな、天下の爲に之を預るがよい。これは支那の老子の思想である。

天下を得て有しない者は天下を有する。自分が取つて私慾のために使はうといふやうなケチな根性では天下を保つことは出来ない。これを有しないが故にこれを持つことが出来る。自分に手に入れても自分の物として之を所有するな。天下の物としてこれを活用することを考へる。得たならばこれを支配すれば澤山だ。天下の利のためにこれを支配すれば宜しい。自分の懐ろに入れるやうなケチな考へを持つな。城を取りて此處に坐り込んで居なければ其の地を守ることが出来ぬやうでは駄目だ。天下の人心を得てしまへば自分で守る必要はない。土地を取つたならばそこに支配者を立て、やる。満洲國、支那、ビルマ等に對する日本の政策のやうなものだ。皇道は世界の爲に世界を統制するものでなければならぬ。

満洲皇帝に、汪精衛氏に、ガンデイに、各々其處を得しむるがよい。而して大東亞新秩序の支柱は斷じて日本であれば、それで澤山ではないか。満洲の民衆をして各々其の樂土を愛せしめば、日本は満洲を守る必要はなくなる。満洲は満洲の民衆が守る。搾取したり、窘めたり、官吏の食ひ物にしたりして居ると、名前は有して居ても、本當は有して居ないことになる。ソビエトの物になつたり、蔣介石の物になつたり、或は英米に取られたりする虞れがないではない。皇道を徹底せしむれば、城は自ら守る。土地は自ら處分する。こちらの手は要らんとしやうな意味だ。秀吉のやり方がこの通りである。

昔の武將は夫れほど澤山書物なんか讀まなかつた。六韜三略ぐらゐを知つて居れば逆も偉い部類であつた。而して實際はそれでよいのである。理論や公式に囚はれず、活達自在なる頭で以て歴史を讀めば、秀吉の傳記の中から大東亞建設綱領が出て來るのである。秀吉が伊達政宗を殺さず、戦はずして五十四郡を取つてしまつた

所は面白い。土地を取るところか、大將を取つた。大將を取るところか、根性骨の髓まで取つてしまつた。さうして政宗をして東北を治めしめ、そこに平和を維持することが出来た。政宗を殺したら東北は亂れたかも知れぬ。こんな者を相手にして居ては朝鮮征伐まで手が延びない。城をして自ら守らしめ、土をして自ら居らしむ。誠に面白い文句でないか。秀吉は之を紙の上に畫かず、身を以て大地に刻みつけた。

### 征韓之役

秀吉の關東に在るや、鎌倉に遊び、源頼朝の塑像を觀、進みて其の背を撫でて曰く、「若は我が友なり。徒手にて天下を取りしは、唯吾と若と有るのみ。然れども若は名族に承籍す。吾が人奴より起りしに如かさるなり。吾遂に地を略して明に至らんと欲す。若以て何如と爲す」と。

初め秀吉の織田氏の爲めに山陽を徇ふるや、韓及び明を攻めんことを請ふ。後常に其の志を成さんと思ふ。明主、嘗て足利氏と好を修む。韓、其の間に兩屬し、常に朝貢を我に奉ず。足利氏の衰ふるに及び、我が西南の海盜、數々明境を侵す。明、韓、皆我と絶つ。而して海賈の互市は絶えず。我が對馬島は韓を距る甚だ邇し。島主宗氏、世と吏を韓の釜山浦に置く。豊臣氏の時に至り、明の民或は來り投する者有り。秀吉、明主朱翊鈞の政を失ひ、武備具らざるを聞き、益々之を窺はんと思ふ。其の畿内を定むるや、橋康廣、嘗て韓の事を諳んするを以て擢んで使者と爲し、朝貢を韓に徴す。要領を得ずして還る。秀吉、其の韓と私有るを疑ひて之を族誅す。西海を定むるに及び、宗義智、款を送る。秀吉、命じて使事を掌らしむ。會と琉球入貢す。秀吉、其の國に囑しく、明に通ずるを求めしむ。曰く、「明、我が言を聽かずば、我當に兵を發して之を伐つべし」と。琉球王尙寧、之を明に告ぐ。明聽かず。義智韓に至る。韓王李昭、乃ち其の大臣黃允吉、金誠一をして、隨ひて入貢せしむ。秀吉既に關東を伐ちてより至り韓の使者を見る。

秀吉が、北條征伐の後であつたらう。關東に在る時に、鎌倉に遊んで、源頼朝の塑像を見た。進んでその背中を撫して曰く、お前は俺の友達だ、腕一本で天下を取つたのはお前と俺だけだ。けれどもお前は源氏といふ名族を承けて共の餘澤を藉りて居る。俺は人の奴僕から起つたのだ、自力でやつて來た所は俺に及ぶまい。秀吉は明け放しに俺は人奴より起ると言つて居る。徳川家康のやうに、俺は源氏の嫡流だとは言はん。お前は名族、俺は人奴、この點は俺の方が偉からう。しかもその上俺は遂に土地を經略して今度は明に行かうと思つて居るのだ。どうだ、お前さん、かなふまいがと言ふたのである。

初め秀吉が織田氏の爲に山陽征伐をする時に、韓及び明を攻めんことをお願ひした。これは前にあつた通り、秀吉が餘り憚る所なく放言したので、秀吉、又々大言するかと信長から笑はれたことがある。併し秀吉は其の後常にその志をなさんことを思つて居る。明の皇帝は嘗て足利氏と誼を通じて居た。韓は日本と明と其の兩

方の間に宜しく仕へ、常に吾れに貢物を奉つて居つた。然るに足利氏が衰へると四國、九州邊りの海賊が屢々明の邊境を侵した。これは所謂倭寇である。斯くして明と韓とは吾れと絶つやうになつた。併しながら貿易上の通商は絶えなかつた。

我が對馬の島は韓と最も近いので、島主宗氏が世々官吏を釜山浦に置いて居つた。丁度今から言へば領事館を置いて居るやうなものである。豊臣氏の時に至つて明の民が屢々日本に來り投ずる者があつた。それ等の便りにより秀吉は明の君主たる朱翊鈞が失政多く、武備が具はらないといふことを聞いて、益々これを征伐してやらうといふ氣になつた。そこで、畿内を守めた後で、橋康廣といふ人が嘗て韓のことを諳じて居るので、これを引上げて使者となし、貢物をするやうに韓國に掛合はせた。然るに其の使者が、要領を得ずして歸つて來たので、秀吉は、大方賄賂でも受けて居るのだらうと思ひ、康廣と韓との間に交りあるを疑つて一族一門を誅戮した。九州征伐が片付いた時に對馬の島主、宗義智が誼を通じて來た。そこで秀吉はこ

れに命じて韓國に對する外交を掌らせた。能力ある者を使ふのが秀吉の流義であるかくて秀吉は義智及び僧の玄蘇を韓に行かせた。又琉球が入貢した時に、秀吉はその國に命じて明に通づることを求め、俺の言ふことを聽かないならば兵を出して討つぞと言はせた。琉球王尙寧はこれを明に告げた。併し明は相手にしなかつた。義智が韓に行くとき韓王の李昭がその大臣黄允吉、金誠一を遣はして日本に貢物を送らせた。秀吉は丁度その時關東征伐より歸つて居つたので、韓の使者を引見した。私はこの間朝鮮の本を讀んだ。さうしたらこんなものが出て來た。

それは「徵瑟錄」と云ふ書物で、朝鮮の大臣であつた柳成龍といふ人が書いたもので、日本と朝鮮との戦さのことがこの中に書いてある。金誠一が初めて使者として義智に随つて入貢し、秀吉が關東から歸つて來て之を引見した。これは外史に書かれて居る通りである。その時の經驗を金誠一から聞いて柳成龍が左の如く書いて居る。

彼の眼に秀吉はどんな奴だつたか。彼は冠を被り、黒の禮服を着て居る色が黒くて小さな奴だ。全く沐猴にして冠するの類であるが、その目を見たら實に物凄く光つて居る。恐ろしい面をした奴だ。此の秀吉は使を引見し、先づ素焼の盃で徳利酒を飲ませるのである。酒を見ると濁つたやうな變な酒だ。……あの頃まで清酒の立派なものはないかつたらしい。……粗末な酒である。肴といふのは全然ないのである。唯餅を一つお盆のやうなものに載せられてあるが、之は見るばかりで食はないのだ。盃を二、三遍廻したら、それでもうお終ひである。まあ何と簡素な禮儀であることか。さうして秀吉はそれきりにブイと立つて行つてしまつた。と思ふと、何時となく變な奴が平服の着流しで小さい子供抱いて現はれた。其の顔を見ると最前の秀吉だつた。使者が坐つて待つて居るのに、今度は子供を抱いてあちらへ行き、こちらへ行きしながら頻りにそれをあやして居る。そのうちに子供が小便をした。さうすると秀吉は大きな聲を出して侍女を呼び付けておしめを替へさせた。人の前で子

供を裸はだかにして着替かへさせる。濟すんだところがブイと立つて歸かへつてしまつた。實じつに傍はらう若無人わが若無人で、大膽不敵だいたんふてきな振舞ふるまひである。併ひも面を見れば目玉めだまから火の出るやうな奴だ。こんな物凄ものすごい男は今まで見たことはない。斯かくう書いてある。

私は日本人が變な教育制度けいよくせいどの型かたに入れて、ヘシ曲まげられない前には、こんな山から掘出ほりだしたやうな素鐵あらねの男が時々現あらはれたらうと思ふ。儀禮れいぎがやかましくて甚だ細かいのは、支那の唐から以來の習俗しゆぞくを取入れたからである。日本の王朝政治わうてうせいぢといふものは支那の官僚政治くわんれうせいぢの眞似まねである。それで日本人は素朴そはくなる神代かみよながらの風格を失うしなひ、所謂有識階級いはいゆうしきかいきふが支那風の官僚に墮落だらくしてしまつた。王朝時代の文學がいゝと云つても、源氏物語など讀んで見ると性慾小説せいよくせうせつのやうなものである。歌だつて實に纖弱せんじやく浮薄うはく、萬葉集以後は歌も公卿くけいさんの遊戯いうぎに墮だした趣おもむきがある。

一言以て之を掩おほへば、思おもひ邪よこしまなしとも言ふべき風格は古代ふるたのものである。然るに素朴そはくなる秀吉は公卿文學や官僚制度の弊へいを受けて居ない。無教育だから教育に歪ゆがめ

られて居ない。そこに支那風の儀禮れいぎに慣なれた朝鮮人の眼には、一見異様の荒削あらかげりの男が現あらはれたのである。

外交談判を始める前に、眼玉と濁酒だくしゆと傍若無人はらうじやくおじんの振舞ふるまひで驚かされたのである。日本人は外人に對する時、日本人の流儀れいぎで禮節れいせつを重おもんずるがよい。強しひて先方の寸法すんぽうに合せやうとすると、行動かうどうに自信じしんと落付おちがなくなつて仕舞しふ。日本人は外國語は極めて上手じやうずな人でも高が知れたものである。アクセントを氣きにしてイエス、イエスとばかり言ふのが常つねである。ノーと言ふと、その理由を説明せつめいしなければならん。其の言葉づかひが面倒めんどうである。そこで大概たいがいのことはイエスで片付ける。慣なれないモーニングなんか着きて、マンナア(作法)に氣を取られ、シェークハンド(握手)などやつて居れば、それだけで自主じしゆ的てきなところを失うしひて、相手に追隨ついでいすることになる。秀吉のやうにグイと出ると、目玉だけで物を言ふのだ。子供をあやしなからそれが小便せうべんをすると、人の前で裸はだかにして着替かへさせる。傍若無人はらうじやくおじん、聊ちやうか野蠻人やまんにんのやうだが、眼玉

の鋭さで取り戻すわけである。そこに甚だ面白い所がある。

乃ち史に命じて書を作らしめ、以て之に答ふ。曰く、「日本の豊臣秀吉、謹みて朝鮮國王足下に答ふ。吾が邦の諸道、久しく分離に屬し、綱紀を廢亂し、帝命を阻格す。秀吉之が爲めに憤激し、堅を被り鋭を執り、西討東伐、數年の間を以て六十餘國を定む。秀吉は鄙人なり。然れども其の胎に在るに當り、母、日の懷に入るを夢む。占者曰く、「日光の臨む所、透徹せざる莫し、壯歲必ず武を八表に輝さん」と。是の故に、戦へば必ず勝ち、攻むれば必ず取る。今、海内既に治り、民富み財足る。帝京の盛なる、前古に比無し。夫れ人の世に居る、古より百歳に満たず。安んぞ能く鬱として久しく此に在らんや。吾、道を貴國に假り山海を超越し、直に明に入り、其の四百州をして盡く我が俗に化せしめ、王政を億萬斯年に施さんと欲す。是れ秀吉の宿志なり。凡そ海外諸蕃の後れ至るものは、皆釋さざる所にあり、貴國、先づ使幣を修む。帝甚だ之を嘉す。秀吉、明に入るの日、其れ士卒を率ゐて軍營に會し、以て我が爲めに前導せよ」と。

秀吉は韓の使者を見た。そこで、史といふのは秘書官である。それに命じて書を作らしめ、これに答へて言ふに……話が大きい。……日本の豊臣秀吉と來た、謹んで朝鮮國王足下に答ふ。我が國の各道は久しく分れ分れになつて居つて、政治の大綱が廢れ亂れてしまひ、陛下の御命令は粗絡して通ぜざるに至つて居つた。秀吉はこれがために憤激し、堅甲を被り、鋭鋒を執り、自ら兵を率ひて、西を討ち、東を伐ち、數年にして六十餘國を平定した。その秀吉なる我が輩は鄙しき素性の土百姓だ。併しながら母の胎内にあるに當つて、母は日輪が懷ろに入るを夢みたのだ。そこで占ふ者が曰ふには、日光の臨む所透徹しない處はない。だからこの子は壯年に及んだなら必ず武を八方に耀やかすだらうと。此の故に戦へば必ず勝ち、攻むれば必ず取り、今や海内既に定まり、民富み、財は足り、帝都の盛なることは前古に比類なき有様である。——彼は生を日本に享け、日輪の申し子たる自信に立ち、天

下平定、帝京繁榮の功績を述べて居る。そこで更に人生觀に移り——夫れ人の世に居るや昔から百に達する者はない。何で鬱々として久しく小天地にグズグズしようか。俺はお前の國を道にして山も海も飛越えて直ちに明に入り、さうして四百餘洲をして悉く我が風俗に化せしめ、以て天皇陛下の政治を億萬年に施さうと思つて居る。これは元から秀吉が考へて居つた宿昔の願である。凡そ海外諸蕃國が早く降参しないで後から来る奴はみな容易くは許されない。然るにお前の國は先づ使者と朝貢品を修めてやつて來たので、陛下が大變お喜びになつて居られる。そこで秀吉が明に入るの日にはその士卒を率ゐ、我が軍營にやつて來て俺のために道案内をしろといふのである。

これは外交書として最も正大雄渾のものでないか。日輪懷ろに入るから始まつて戦へば必ず勝ち、攻むれば必ず取るに至り、遂に山海を超越して直ちに明に入らんと欲すと述べ、その四百洲をして盡く我が俗に化せしめ以て王政を億萬年に施さんと

と欲す。これ秀吉が宿志なり、と言ふのである。

更に後から降参して來ても遅い奴はお咎めがあるぞ、貴様早く朝貢したのは奇特の至りだ。俺が兵を率ゐて明に攻入る時には、軍營に出迎へて道案内でもしると、仲々大きい態度である。私はこれを讀みながら十年戦争の時の西郷さんの手紙を思ひ出す。あの手紙は秀吉のそれに似通ふものがある。

西郷さんが一萬五千の子弟を提げ鹿兒島を出づる時、熊本鎮臺司令官に與へた手紙は甚だ豪壯なものである。曰く拙者儀今般政府へ訊問の廉これあり、明後十七日縣下發程、陸軍少將桐野利秋、陸軍少將篠原國幹及び舊兵隊の者共隨行致候間、其の臺下通行の節は兵隊整列、指揮を受けらるべく、此段照會に及候也。明治十年二月十五日、西郷隆盛、熊本鎮臺司令官殿、斯う書いてある。これは桐野利秋が勢にまかせて書き流したので、西郷さんの本旨でなかつたと言ふ人もある。桐野利秋も學者ではないが、あの當時外史位は讀んで居つたであらう。既に官を擲つた陸軍大

將が現役の司令官に對し、勸降書を送つたやうな形は甚だ不穩であるが、時には斯ういふ外交文書も書いて見たいではないか。

外史にある秀吉の手紙は實に痛快である。文句も面白い。朗讀してみるといゝ。お經を讀むより面白う。

因りて平調信・玄蘇を遣して與に借にせしむ。韓王、書を得て疑懼す。誠一、以て虚喝と爲す。王之をして私かに二人を饗し、其の情實を探らしむ。調信曰く「我が主、明に通ぜんと欲す。明、答禮せず。故に之を伐たんと欲するのみ。貴國蓋ぞ間に居て之を和解せざる」と。誠一、依俸す。玄蘇、聲を勵し言つて曰く、「今日の議、首鼠兩端するを得ず。和を講ずるを欲せずんば、乃ち戦はんと欲するのみ」と。因りて辭訣して返る。韓始めて懼れ、稍と邊備を修む。明も亦、之を聞き、海防を申嚴す。天正十九年夏、秀吉復義智を遣して昭を責めしむ。釜山に在ること旬餘。報を得ず。怒りて返る。秀吉志益と決す。

秀吉初め子無し。是より先、姫人淺井氏、男鶴松を生む。秀吉、之を絶愛す。是の歳、鶴松夭す。乃ち悲哀累月、心忽として樂しまず。因りて屢と出遊して自ら遣る。一日、清水寺の閣に登り、西望して從者に謂ひて曰く、「大丈夫、當に武を萬里の外に用ふべし。何ぞ自ら悒鬱するを爲さん」と。乃ち還り、大に諸將帥を會し、之に謂ひて曰く、「吾、諸君の力を藉り、海内を平定す。亦以て休ふべし。特に諸醜夷、王化を阻む者有り。吾深く之を羞づ。吾、邦治を以て内府に委ね、自ら將として朝鮮に入り、其の兵を以て先鋒と爲し、以て明に入らんと欲す。彼我が命を拒まば、則ち撃ちて之を滅し、遂に遼東より直に北京を襲ひ、其の國を奄有し、多く土壤を割き、以て諸君に了へ、諸功臣をして皆其の望に厭かしめん。亦快ならずや。我之を籌ること已に熟す。事甚だ難きに非ず。諸君是れ能く我が爲めに力を出すや」と。諸將帥、愕然し、相視て、敢て對ふる者莫し。浮田秀家進みて曰く、「殿下、此の無前を擧ぐ。誰か努力せざる者ぞ」と。衆敢て異議する莫し。内府とは秀次を謂ふなり。秀次、時に内大臣と爲り、正二位に叙せらる。是に於て、秀吉、奏請し、諸將を遣して國に之き、各と兵食を具へしめ、九鬼嘉隆に命じて大艦幾千艘を造らしむ。大廳、秀吉の海外に赴かんとするを聞き、憂恐して



寢食を廢するに至る。乃ち議して、秀家をして代り往かしめ、自ら出でて肥前に陣し、以て策應を爲す。乃ち大に那古邪に築き、建て、行營と爲す。

そこでさういふ手紙を書いてやつて、平調信と玄蘇を遣はし、一緒に出發せしめた。韓王はその書を得て疑ひ又懼れた。まさかこんなことをやりはすまいかと疑つて見たり、えらいことになつたと懼れたりした。金誠一といふ向ふの大臣はこれを以て威かし文句だと判定した。そこで國王は金誠一をして秘にこの二人を饗應しながら情實を探らしめた。その席で調信が言ふには、我主秀吉は明に通ぜんと欲して居るのだ。然るに明が答禮しないからこれを討たうとして居るのだ。貴國は何故仲に居つて和解の役を務めないかと。

誠一は之を聽いて愚圖々々して居る。そこで調信と一緒に居つて居つた玄蘇が聲を盛んにして言ふには、今日の場合、二股をかけてどつち付かずにして居ることは

出来ないのだ、和を講ずることが厭なら即ち戦を欲するのだらうと。斯く言ひ放し、さよならを言つて歸つて來た。

愈々開放して歸つて來たから、韓が初めて懼れ、これから海邊の防備を修めた。明も亦これ聞き、海防を嚴重にした。天正十九年夏、秀吉又義智を遣はし韓王李昭を詰責させたが、義智は釜山に在つて待つて居ること十日餘、何とも韓王からは返事がなかつた。そこで怒つて歸つて來た。秀吉は愈々これではいかぬといふので遠征の志を決した。

秀吉は初め子がなかつた。これより前に妾淺井氏が、(これは淺井長政の娘で後の淀君である)鶴松を生んだ。秀吉は絶愛したが、其子は早死した。そこで幾月もく悲しみに暮れ、何となく心が落着かずして楽しまない。由つて屢々外に出掛けて行つて自ら鬱憤を拂つて居る。

一日、清水寺の樓閣に上つて西の方を眺め從者に曰うには、大丈夫當に武を萬里

の外に用ふべし、何ぞ自ら鬱々として塞ぎ込んで居られやうかと。そこで家に歸りて大いに諸將帥を會して曰く、我諸君の力を藉りて海内を平定した。これで休んでもよいのである。しかし、諸々の醜き夷共あひすどもに我が帝王の政治を阻む者がある。これは我輩の深く恥づる所である。そこで俺は我が國內の政治を以て内府に委託し、自ら大將として朝鮮に入り、その朝鮮の兵を以て先鋒となし、明に攻入らうと思つて居る。彼、若し我が命を拒んだならば、即ち撃つてこれを滅さう、さうして遂には朝鮮から遼東、遼東から直ちに北京を襲つて、その國を掩ひ取り、多く土壤を割きて諸君に與へ、諸功臣をして皆その望みに厭かせやう。どうだ、これも亦痛快ではないか、自分はこれを計畫——籌は算盤で計る——既に計畫は熟して居る。此事をなすのは甚だしく難かしいことぢやない。諸君よくそれ我の爲に力を致すか、どうかと。

諸將帥はびつくり眼を見はり、相顧みて答へる者もない。そこに浮田秀家が進ん

で、殿下この前代未聞の盛大事を企てられたのに對して、誰が努力しない者があつたませうと言つた。そこで誰一人厭だと言つて異議を唱へる者はなかつた。秀吉は國內の政治を内府に委すると言つて居るが、内府とは秀次のことを言ふのだ。これは秀吉の弟で内大臣となり、正二位に叙せられて居る。

こゝに於て秀吉は陛下に上奏して、諸將を遣はして各々國元に行かじめ、諸藩に於て兵馬糧食を備へ、九鬼嘉隆に命じて、大艦數千艘を造らしめた。大艦——秀吉のお母さんはこれを聞いて、憂ひ恐れて、寢食を廢するに至つた。そこで評議の結果、浮田秀家をして代りに朝鮮に向はしめ、自分は出でて肥前に陣し、之と策應することにした。その爲に大いに肥前の名護屋に築き、建て、行營とした。行營は出征の爲の陣營である。

文祿元年正月、秀吉、加藤清正を召し、之に記帳を賜ひて曰く、「吾、毛利氏を伐ちし時、先

右府の賜ひし所なり」と。小西行長を召し、之に名馬を賜ひて曰く、「以て鬻虜を驅突せよ」と。清正、素より行長を鄙しめ、相善からず。是に以て、之に謂ひて曰く、「予は賜幟を用ひて號と爲す。子が號は何をか用ふる」と。行長對へて曰く、「我は藥商より起る。當に藥囊を用ふべきのみ」と。是より益と相隙す。

二月二十八日、秀吉、京師を發す。或曰く、「蓋ぞ漢文を善くする者を以て從へざる」と。秀吉笑ひて曰く、「吾が此の行、將に彼をして我が文を用ひしめんとするのみ」と。四月、安藝に至り、嚴島祠に謁し、百錢を投じて、祝りて曰く、「吾にして明に勝たば、面する者多きに居れ」と。乃ち投ず。皆面す。衆、大に喜ぶ。蓋し豫め兩錢を糊合したるなり。遂に那古邪に至る。諸軍の會する者。凡そ五十萬人、糧食之に稱ふ。是に於て、先づ水陸九軍を遣り、大礮を發し、開して帆を揚げ、海を蔽ひて渡る。

九月の夏に計畫したことが次の正月にはもう出征することになつた。文祿元年正月、秀吉は加藤清正を召して紋の付いた幟を賜うて曰く、これは自分が毛利征伐の

時に、亡くなられた右大臣信長公から戴いたのだ。小西に名馬を賜うて曰く、あの鬻面の夷共を蹴散らせと。

清正は元來行長を輕蔑して仲が良くなかつたが、こゝに於て清正は行長に向ひ、俺は賜つた所の幟を以て馬印ししようと思ふ、お前の馬印しは何を用ひるのかと言うた。行長答へて俺は昔藥賣りだつたから、藥袋でも用ひよう、と答へた。これは行長が豫て藥賣りの成り上りとして輕蔑を受けて居るから、自ら名乗つて出たのである。こゝに於て益々兩人の仲が悪くなつた。

小西は相當の者で、俺は昔は藥賣だと買つて出れば加藤は鍛冶屋の倅に過ぎない。御互に無産階級の出身なのに、藥賣を輕蔑する柄でもあるまいと言ふのである。小西は藥賣りでも故太閤の恩義に感じて、關ヶ原の戦にはあれだけ戦つてゐる。愚直な職人あがりの清正よりはその時には徹底して居つた。この人は戦は上手だけれどもどうも商人臭い所があり、自分で錢を蓄めたりするから部下が懐かなかつたやう

である。

關ヶ原の戦でも、寺の小僧であつた石田三成は島左近のやうな名臣を有し、華々しく戦つたが、小西の方はそれ程に行かなかつた。併し中々きかない男で、朝鮮征伐では最初清正より先陣を争ひ勝つて居た。

二月二十八日、秀吉京師を發す。或人曰く、漢文の出来る者を連れて行つたらよからうと。秀吉笑つて曰く、俺は今度は彼等をして日本文を用ひさせるつもりだ、漢文なんか要りやしない。日本の外交談判も、向ふでこつちの言葉を使はせる意氣込みでなければうまいかぬ。そこら邊からも自主的に出直すがよい。四月、安藝の嚴島に參詣して百錢を投げ散らし、自分が明に勝ちますならば、表向きになるもの多いようにと言つた。投げて見たら、皆表を向いた。衆、皆これは勝ち戦の證據だと言つて大いに喜んだ。蓋し、どつちにしても表を向くやうに豫め二枚の錢を糊でくつ付けて置いたのである。遂に名護屋に至る。諸軍の會する者五十萬人、兵

糧もこれに適ふ物があつた。こゝに於て水陸九軍を遣はし、大砲を打放して関の聲を擧げ、帆を揚げ、海を蔽ふて押し渡つた。實にすばらしい勢である。日本で秀吉時代は最も豪壯華麗である。私は何遍も話したことがあるが、何年か前の秋頃であつたか、京都で時代祭の武者行列を見たことがある。次々の時代が繪巻が繰り擧げられるが、秀吉の時代になると、其の武具甲冑の華々しさ、絢爛眼を奪ふものがある。併し華麗ではあるが、雄渾である。源平時代、王朝時代よりは世界的である。それから徳川時代になるとずつと質素であり、消極的である。

明治維新の武者行列はやはり非常に威勢がよい。新興の機運が溢れて居る。知識を世界に求め、大に皇基を振起すべしと仰せられた大御心を奉戴するかの如く、歐洲様式を日本精神でこなし居るかに見える。變な陣笠やしやくまのやうな物を被つて居るかと思へば、洋服を着て居るし、袴を穿いて居るかと思へば袴の先をくつてモンペイのやうに裝うて居る。洋服の上に大小をぶち込んで居るのもあれば、軍

服の上に陣羽織を着て居るのもある。總て異國情緒を積極的に取り入れながら、世界に乗り出さんとする日本精神が躍動して居る。

私は時代祭の武者行列の中で秀吉時代と明治時代が一番よいと思つた。藤原を中心とした文弱なる公卿の官僚政治が駄目になつて、武門政治が起る。その武門政治が建武中興により一度び打倒された。併し北條氏破れて足利時代となり、遂に武力なき武門政治は天下を統一する能はず、應仁の大亂から戰國時代となつた。此の戰國時代には民衆は塗炭の苦みに陥つたが、一面に於て公卿の官僚政治からも、武門の官僚政治からも解放せられて、民衆は自主活潑となり、段々、海外發展の氣運を長ずるに至つた。

大阪とか(當時の淀)、堺とか、九州の博多、其他四國の津々浦々から續々南洋に押渡つた者がある。シヤムとかルソンとかジャヴァとか、到る處に日本町も出來た南洋から持つて來た物資を支那に賣込み、支那から日本に必要品を取るのみか、之

を日本人の手で南洋に供給した。また、南洋から持つて來た物資を日本で加工し支那に賣込んだものもある。斯くて雄健なる自主的日本人の手で大東亞貿易が開發された。

秀吉が興つた頃は、公卿政治が破れ、足利の武門政治が破れ、大亂の進行中社會状態が段々變つて來て、地方到る所に豪快なる野人が擡頭し、時代が將に轉換せんとして居たのである。秀吉はその時代を象徴して草履取りから成り上りて天下を取るに至つた。天下を取つたけれども、彼は公卿貴族でもなければ、武門官僚でもない。彼は彈壓政治によりて特權を享樂するやうな味を知らぬ。彼は何邊までも積極的であり、早く日本を纏めて置いて海外に發展しようと云ふ念願に驅られて居た。

秀吉が聚樂第を築いて後陽成天皇の御行幸を請ひ、諸侯を率ひて陛下に扈從し奉つたのは内政の基礎を國體的に確立し、以て大に海外に進展せんと欲したのである。聚樂でも大坂城でも、その金は新興の通商貿易及び諸多の産業から得たものである。

専制政治の搾取資金でない。それ故に非常に華々しいのみならず、獨創進歩的のものがある。

然るに徳川時代になつて、海外通商を止めてしまつた。海外に出かけて居つた日本人は政府から捨てられたのみか、本國から遮断せられ、歸國することも出来なくなつた。彼等が悶々たる情緒を故郷に書き送つた手紙が、所謂ジャガタラ文として幾らも残つて居る。徳川氏には、豊臣氏のやうに雄渾の氣風がなく、堅實ではあるが、自家の特權支酌を恒久化せんが爲、小さく日本國內に凝まつてしまつた。さうして諸侯を貧しうすることにより、自家の優位を維持せんと欲し、贅澤極まる日光廟を造營させた。諸侯は之を負擔せねばならぬが、通商貿易は止つて居るし、豊富な資源がないから主として農民を搾取した。日光その他の土木工事は搾取資金で出来て居る。

秀吉の大坂城、聚樂第は海外發展で儲けた金で出来て居る。威勢がよいのは當然

である。秀吉は自分が草履取りから起つた程であるから、家來達も皆傳統を破つて庶民から出て居る。加藤清正は鍛冶屋、小西行長は藥賣り、福島正則は桶屋、石田三成はお寺の小僧、さういふ者を狩集めて立ち上つた。彼の足場は新興階級である秀吉は内に盛り上る新興階級の勢を提げ、外に大發展を企てた。あの儘押して行けば日本はもつと大きな日本になつて居たらうと思ふ。それが徳川氏によりびたりと止められて武門政治となり、武門政治の武士は段々事務的となつて、武門官僚政治を出現せしめ、社會は特權と奴隸化と、遊惰と卑屈との爲に頽廢して自ら支ふる能はざるに至つた。

徳川幕府の威令が行はれなくなると諸侯が動き出し、諸侯が愚圖々々して居れば諸士横議を試みるに至り、人心再び活潑なる動きを見せて明治維新となつた。明治天皇が維新の宏謨を定め給ひ、立憲政治を制定せられた時には、政治を諸侯や武人の基礎の上に置き給はず、全國民を赤子として一君萬民の國體觀念を明徴にせられ

たのである。

明治天皇は陛下の親愛なる臣民を以て皇祖皇宗が惠撫滋養せられし臣民の子孫なるを思召され、此の臣民に信賴して國內政治を確立し、その勢を駕御して萬里の波濤を開拓せんとせられたのである。だから明治時代は積極進取であり、時代を象徴する武者行列を見ても威勢がよい。此勢ひで、日清日露までどん／＼伸びたのである。然るにそれが段々歐米の逆攻勢に追詰められた。

大正、昭和に及び日本の世界的大發展といふのは漸く名目だけとなり、日本人は世界市場から閉め出され、保護關稅、輸入割當制、等々段々ひどくなつて殆ど窒息せねばならぬ状態となつた。全世界で鼻を壁につきあてた日本は、仕方がないから東洋に還らうと思ひ出し、大に日支親善の大義に目覺めたが、歐米の壓力は既に支那人を籠落し、彼等の排日は友邦日本を支那本土から、滿洲から追ひ出さねば已まぬ勢を示すに至つた。

日本は滿洲事變で盛返した。其の以後日本國內には特權政治的鎖國主義と、國民的進取主義とが種々の形に於て相對立し、未だ國內革新を完了せざるまゝ、歴史的大變局にぶつ／＼かつた。

日本の大使命は内に因循姑息の特權政治を打開し、皇道を仰ぐ全國民の情熱によりて達成せられねばならぬ。日本國民が世界に於て擔任すべき繩張りは、一朝にして何十倍に擴大せられた。之に善處せんと欲せば日本人の心胸を擴大し、その思想を雄渾にせねばならぬ。徳川流に自己の地位を維持せんが爲に、消極的に國民を束縛し、學問に至るまで支階配級本位に統制するやうなことがあつてはならぬ。

何處までも秀吉流に皇室を尊崇し一身一家の計よりも日本國家の爲に積極進取の氣概を有せねばならぬ。國民の氣魄は國力を推進せねばならぬが、油斷をすると國民の思想が國家の重量によりて壓縮せられ、妙に小さく固定したり、硬直したりする虞れがある。秀吉時代のやうな、更に明治時代のやうな、瑣事に拘泥せざる活達

雄大の氣風がなければならぬ。

俺は藥商だから旗印は藥囊で結構だなど放言する所は、如何にも素朴で圓滑で面白くないか。

### 加藤清正咸鏡道に入る

清正の咸鏡道に入るや、安城の民三人を虜にして、先導せしむ。二人、辭す。清正、立ちどころに之を斬る。其の一人懼れて之に従ふ。永興に至り、二王子、咸鏡北道に通ると聞き則ち大に喜び、直茂・頼定を留めて永興を守らしめ、自ら其の輕兵を以て、日に行くこと數百里、鐵嶺に至り、踰えて北す。北道兵使韓克誠、六鎮の驍騎を以て清正を海汀倉に逆ふ。北兵善く射、平地に憑りて馳突す。我が軍、歩兵多し。利有らずして卻く。會と日暮れ、收めて倉内に入る。韓兵、沓至して之を圍む。矢の下ること雨の如し。清正、倉粟を排して城と爲し、銃を發して

之を拒ぐ。手に應じて千餘人を斃す。韓兵退き、鐵嶺に上りて陣し、且を待ちて戦はんと欲す。清正、夜、兵數千を分ち、敵を環りて伏す。且、大に霧ふる。克誠將に嶺を下らんとす。而して我が兵、四面齊しく起り、大に之を破り、北ぐるを追ひて鏡城に至り、又大に之を破り、遂に克誠を擒にし、火を縱ちて城を焚く。二王子、會寧府にありと聞き、驅りて之に赴く。府は韓の極北なり。行くこと十日にして至る。府使鞠景仁懼れ、二王子を拘し、人をして來りて降を乞はしむ。且つ曰く「府内、食盡き、王子食はさること三日、願はくば之に食を賜へ」と、清正、之を許し、自ら城に入らんと欲す。將校皆諫めて曰く、「吾、府内を窺ふに、虜人填咽す。我、寡兵を以て入る。恐らくは變有らんと。清正曰く、「虜何ぞ能く爲さん。吾已に王を失ふ。又王子を失ふ可らず。即し變有らば、吾、王子と死を決せん。憾莫きなり」と。乃ち十餘騎と城に入る。饋者數十人をして、人ごとに一器を執り、隨ひて入らしむ。韓人、危疑し、弓を張りて清正を環る。清正、之を叱し、其の他無きを辯す。韓人、解する能はず。清正自ら襟を開き箭に當て、印を懷に取り、紙に印して之を示す。韓人弓を捨てて拜す。是に於て、清正王子及び其の大臣黃赫、金貴榮等、拘し、人をして之を鏡城に護送せしむ。乃ち景仁に問ひて曰く、



「朝鮮の北境、此に盡くるか」と。對へて曰く、「然り」と。曰く、「北隣は何の國ぞ」と。曰く、「兀良哈」と。清正乃ち八千人を以て進み、其の境に入り、一城を攻めて之を抜く。既にして夜なり。令を下して曰く、「甲を釋くこと勿れ」と夜半、胡騎大に至る。我が兵、力戦して之を走らす。清正曰く、「虜、我が至るを意はず。我の一捷、以て太閤に報ずるに足れり」と。

加藤清正と小西行長とは出征の最初から先陣を争つて居たが、敵地上陸も京城攻略も、つねに小西行長に出しぬかれた。行長は京城攻略の後、黃海道、平安道から鴨綠江を目がけて進み、馬を綠江に飲ひて直ちに燕京を衝くとの意氣込みであつた。清正は右折して今の咸鏡南道から、咸鏡北道に入り、懸軍長驅して朝鮮の極北を窺め、會寧から間島の兀良哈にまで攻め入つたのである。敏捷なる侵入戦には清正の方が行長に一籌を輸したが、幾多の艱險を冒し、困苦缺乏に堪へ、深く敵地に入り、韓の王子を擒にし、面もふらず奮闘した武者振りには、天晴れ清正と謂はねばならぬ

いのである。

清正は咸鏡道に入ると、安城の民三人を捕虜にして道案内をさせようとしたが、其の二人は之に應じない。そこで清正は立ちどころにこれを斬つたので、残りの一人が懼れて命に従つた。清正はかくて永興まで進んだが、韓國の二王子が咸鏡北道に遁れたと聞いて、大に喜び、鍋島直茂・相良頼定等を留めて永興を守備せしめ、清正自身は輕装せる兵を率ゐ、毎日數百里（日本の數十里）を行軍して鐵嶺に至り、更に之を越えて北行した。

そこで北道兵使の役をして居る韓克誠が六個鎮臺の騎兵隊を以て清正を海汀倉に逆へ討つた。曠騎とは馬上から弓を射る騎兵である、北軍の兵は弓を射るのが旨く、且つ平地に臨みては騎兵の性能を發揮し、馬蹄にて駆け散らすのである。清正は輕装した歩兵を以て進んで來た。そこで騎兵の馳突し來るのに對しては歩合が悪く利あらずして退いた。

丁度日暮れとなつたので、倉の中に軍隊を收容した。韓兵は人馬雑踏、重なり合つて攻め寄せ、清正の軍勢を取り圍んだ。敵の射かける矢は雨のやうに下つたが、清正は土豚のやうに倉中の穀物を並べて城となし、鐵砲を打ち出して防戦した。その鐵砲は利き目があり、手に應じて千餘人を斃してしまつた。そこで韓兵は退いて鐵嶺に上つて陣を構へ、夜明けを待ちて戦はうとする。清正は夜のうちから數千の兵を部わけし、敵を取り圍んで伏せ勢とした。丁度、其朝大に霧がかゝつて居る。克誠は霧のために情況がわからず、嶺を下らんとする所に、清正の伏兵が四面より一齊に並び起りて之を撃破し、逃ぐるを追ひて鏡城に至り、そこで又大に之を破つて敵將克誠を捕虜とし、火をはなつて敵城を焚いた。さて二王子は逃れて會寧府に在りと聞き、乃ち兵馬を驅つて其地に向つた。

此の會寧府は韓國の北の果てである。清正は五十日にして會寧に到着することが出来た。そこで會寧の府使鞠景仁が懼れ入つてしまひ、二王子を拘束して置いて、

使者を出して降參を乞ふたのである。彼が云ふには會寧城内は糧食盡きて、王子は三日間も食物を取つて居ない。どうか食物を恵んで頂きたいと。清正は此の降參を聞き届け、自分で敵の城中に行かうとした。清正の將校が諫めて曰うには、私ども城中の様を覗ふに、敵の軍勢が人いさで咽びかへる程充滿して居る。若し味方が僅かの兵を以て城に入つたなら、敵はどんな變事をしてかすか知れせん。清正は之に答へて、敵が何をすることが出来るものか。自分は既に王を擒にしそこなつた。重ねて王子を取り逃してはならぬ。城中變事あらば自分は王子と命をかけても遺憾はないと曰うた。かくて清正は十餘騎を促へて城に入り、又食物を送る者數十人を従へ、その人々は各々食器一つを持つて入つて行つた。韓人は之を危惧し、弓を張つて清正を取り圍んだので、清正は之を叱りつけ、他意なきことを辯じたが韓人にはそれが解らない。清正は自ら襟を開き胸をつき出して敵の矢先にあたり、印鑑を懐中から取り出し、紙に印を押して示してやつた。韓人は始めて意味が

解り弓を捨て、拜んだ。

そこで清正は王子及びその大臣黃赫、金貴榮等を拘へ、人をつけて鏡城の方に護送した。そして景仁に問ふて曰く、朝鮮の北境はこれでおしまひかと。對へて曰く然りと。然らば北隣は何國であるかと問ふたら、それは兀良哈と對へた。清正はそこで八千人を従へて國境を越へ、一つの城を攻め落した。その夜、號令を下して、軍兵に鎧をぬぐなと命じたが、果して夜半に至り胡騎（えびすの騎兵）大に攻め寄せて來た。我が兵は覺悟の前であるから力戦して之を走らせた。清正が曰うに、敵は私の攻め來るを思はなかつたのだ、我は一戦快捷して太閤の委託に報ずることが出來たと。

清正が日本を思ひ太閤を思ふ、面目躍如たるものがある。

自分は今から二十數年前、まだ汽車も出來ない際、或は牛車に乗り、或は輕便鐵道の手押車に乗り、清正が進入した道を通過して、茂山嶺の險を越え、會寧から間

島に入つたことがある。なかなかの難路であつた。あの時代に清正が如何にして、武器糧食を携へ、土地不案内の嶮路を踏み越えて、軍隊を進めたであらうか。大膽不敵にして強剛無比なる日本軍の姿が偲ばれるのである。

## 碧蹄館

碧蹄館は京城のすぐ西北にある。日本の名將小早川隆景、立花宗、毛利秀包等が、明の名將李如松を破り、明軍一萬を斬り、逃ぐるを追ひて河に顛落せしめ、江水之が爲に流れず、李如松は身を以て逃れ、慟哭三日にして去ると云ふ有名な戦争の行はれた所である。外史より抜き書して、此の一章に綴つた次第である。

太閤秀吉の朝鮮征伐は其の緒戦の花々しさ、敵前上陸から電撃又電撃、破竹の勢を以て雞林八道を席卷し、直ちに明の國境に迫らんとするに至つた。

秀吉が始めて明國征伐の動員令を下し、部署を定めたのが、文祿元年（皇紀二二五二年、西歴一五九二年）一月五日である。小西行長が、釜山城を陥れたのが四月十三日である。加藤清正が、釜山から進んで彦陽を陥れたのが四月十八日である。四月二十日小西行長は大邱城を陥れ、加藤清正は慶州城を抜いて居る。京城が陥ちたのは五月二日であり、最初の釜山上陸から實に僅かに十九日目に韓國の首府を手に入れたのである。それから黒田長政等が平壤を占領したのが六月十五日であり、加藤清正が會寧に入りて二王子を擒にしたのが七月二十三日である。小西行長は平壤から京城にある總司令部に獻策して、

「太閤の志は明を伐つを主とす、今已に平壤を取る、平壤以西復た支ふる者なし。鴨綠江より明の北京に至るまで百餘里に過ぎず。我が全軍甲を卷きて之に趨き、彼をして備ふるに及ばざらしめば、以て志を得べし」と曰うて居る。加藤清正も亦た會寧に二王子を擒にした、後咸鏡の二十二管を收め、力めて韓人を宣撫し、勢に乗

じて直ちに遼東に迫るの意氣を示して居た。

然るに京都に總司令部を形造つて居た三奉行の石田三成、増田長盛、大谷吉隆は自重して其の輕々しく進むを許さなかつた。それは陸戦の花々しかりしに似ず、海戦の方が之と歩調を合せ、後方の聯絡を完全にする事が出来なかつたからである。

年表を調べて見ると六月五日と七月八日には、唐項浦と閑山島との海戦に於て、我が水軍は韓將李舜臣の爲に破られ、多くの戦艦を焼かれて居る、浮田秀家は三奉行と共に小西行長の電撃急進論を戒めて、「全羅、江原の二道未だ定まらず、我れ深く入る可らず、我が水軍將に全羅に循ひて北のかた黄海に會せんとす。然る後水陸並び進む、これ萬全の策なり」と陳べて、専ら京城と平壤との連絡を確實にせんが爲、黒田長政、小早川隆景等の名將を其間の各地に駐屯せしめて居る。果せるかな、加藤清正は懸軍所隔し、小西行長は平壤にありて日に水軍の到るを望むも到らず、